

---

# ヒベルニアの極光

葉梨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒベルニアの極光

### 【Nコード】

N4345Y

### 【作者名】

葉梨

### 【あらすじ】

ヨーロッパ全域を襲った大地震を境に、世界の空は分厚い雲に覆われ続けていた。ある日、西の果ての島から流れ着いた一人の少女が言う。「ヒベルニアにだけは太陽が照っている」と。異常気象の秘密を探るためにヒベルニアを目指したのは、家族を失った異能の少年、ヒベルニアの秘密を知るエディンバラ名誉司教、好奇心に負け続ける民話学者、冒険小説好きの書籍商。18世紀のアイerlandとスコットランドを舞台に、彼らの旅が始まる。

## プロローグ（前書き）

災害によって心や体を傷つけられたすべての方に、この作品を捧げます。

## プロローグ

夜明けが来ても 西を向いていればまだ夜だ  
朝が来ても 目を閉じていれば真夜中だ

もし 太陽が昇らなかったら  
東へ向かって走ればいい  
僕と 世界の夜明けを見に行こう

夜の向こうには朝が  
暗闇の向こうには光が  
混沌の先には希望が  
必ず僕らを待っている

（オペラ『ラヴェル』より「夜明け」）

\*\*\*

しかし、マキシムの弟は言いました。

「だけどまだ、諦めるのは早いんじゃないか」

生まれてからずっと共に歩んできた双子の兄に異を唱えたのは、彼にとって初めてのことでした。

「まだ、諦めるのは早いんじゃないか。いつかきつとエディンバラ教会とクラシック教徒が共存できるようになる。そうしたら、俺もみんなの後を追ってヒベルニアへ行くよ。どうかそれまで、俺と、彼女と、彼女のお腹に宿るおまえの子供のことを待っていてくれないか」

マキシムの妻は別れを惜しんで涙を流しました。

「きつとすぐに追いつくから待っていて。約束よ、マキシム」

「ああ、約束する」

「約束だ」

三人は誓い合い、そうして散り散りに別れたのです。しかし、約束は果たされないまま、それから六十年が経とうとしています――。

（ヨイク・アールト著 『クラシックの歴史』（リプトン書店、1767年） より 一部抜粋）

\*\*\*

そのとき、ウイスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。猫のようにしなやかな人影が修道院の庭に音もなく着地する。ま

るで漆黒の闇夜に現れた伝説の盗賊のようだった。修道院の塀の高さは二メートル以上あり、その上、塀の外をぐるりと掘が囲んでいる。そんな芸当を難なくやってのけるのはこの町でも彼くらいだろう。

「いい匂い」

形の良い両眉を上げ、彼は鼻腔を膨らませた。ついでに両腕を広げて月も星も見えない天を仰ぎ、その場でぐるぐると回る。しばらく子供じみた遊びに興じていると、彼の短い茶色の髪が、しつとりと甘い夜霧に濡れた。この修道院はその名の通り、ウイスキーを蒸留している。

魅惑的な香りに酔いしれてはいるが、彼は酒に深く酔う性質ではない。彼の酒の強さは大酒飲みの多いこのアイルランドでも抜きん出ている、今夜も行きつけのパブの閉店時間までビールを飲んでいった。酔いの回った客に酒を薄めて出す店主も、彼だけはまだ騙せずにいるというもっぱらの噂である。ちなみに飲酒に年齢制限はなく、紳士としての振る舞いさえできれば、誰もが好きなだけ酒を飲むことができる。その代り、泥酔など絶対にしてはいけない。

朝から建設現場で働き、夕方には行きつけのパブでギネスビールを飲み、夜が更ければ歌を歌い楽器を鳴らし、深夜になって町はずれの修道院へ帰って来るというのが彼の日課だった。門限に間に合わず、塀を乗り越えて修道院内のぬぐらに戻るのもいつものことだ。昼間はウイスキー造りやレース網みや農作業に精を出すおせっかい焼きの修道女がうろうろしているこの庭も、深夜を過ぎた今ではしんと静まり返っている。建物から火の気は消えていて、どんなに耳をすましても物音の一つもしない。

修道女たちの眠りを妨げることに彼はそつと草を踏んで庭を横切った。敷地内には修道女や病人が寝起きする居住棟と事務所、礼拝堂が建っていて、礼拝堂の裏には果樹園や畑が広がり、そこでは林檎や野菜や小麦をつくっている。彼は礼拝堂の横を通り過ぎ、木の葉や小枝を踏みしめて収穫の済んだ果樹園を抜ける。その先にある開けた草地へ近づくにつれ、彼の足取りは徐々に重くなっていた。

「ただいま、帰ったよ」

彼が足を止めた場所は墓地だった。本来は修道院内で亡くなった老人や病人を葬るための墓地だが、最も新しい墓標の一つには彼の妹の名が刻まれている。彼は草地に片膝をつき、冷たい石の墓標にそつと触れた。

「今日も三月地震で壊れた旧街道の石畳を直したよ。幹線道路や街の中心部の修繕が済んだから、やっと旧街道に手をつけられるようになったんだ」

今から九ヶ月前の一七六五年三月九日、未曾有の大地震がヨーロッパ全域を襲った。震源地は各地に散らばる断層や火山であったが、それらがほぼ同時に大地震を引き起こした原因は解明されておらず、地震とそれに続いて起こった津波や火事、大雨や洪水などの災害は総じて三月地震と呼ばれている。

大地震は町や道や港湾を壊し、津波や洪水は建物や家畜や農作物を押し流したが、悲劇はそれだけでは終わらなかった。三月地震の発生から今日までの九ヶ月間、世界中の空が分厚い雲に覆われて一度も太陽の光が差さないのだ。最初は火山灰が上空を舞っているだけだろうと楽観的に考えていた者もいたが、しばらくするとそんな

ことを口にする者は誰もいなくなった。太陽の光が差さない、たったそれだけのことがどんなに恐ろしい未来を紡ぎだすのか、秋が訪れるまでもなく人々は悟っていた。人間が口にする農作物も、家畜の飼料も、魚介の餌となる微生物も、十分な日差しがなければ育たないのだ。

案の定、今秋の収穫は昨年の半分以上で、世界中が厳しい飢饉に見舞われている。彼の住むアイルランドも例外ではなく、ビールは値上がりするし、育ち盛りだというのに一日二回の食事はジャガイモ料理ばかりだ。

「三月地震は神が我々に与えた試練である。神のしもべとして祈りを絶やさず善行に励むことを欲する。災害の混乱に乗じて悪事を働けば決して神の国に行くことはできない。最後の審判を忘れることなかれ」

そのエディンバラ教皇の声明は日曜の礼拝で馴染みの司祭の口から耳にたこができるほど聞いた。それならオレはもう神の国には行けないな。彼は自嘲して墓標に触れていた手をだらりと垂らした。

とん。

遠くでかすかな音が聞こえた。少し前に彼がしたように、誰かが修道院の塀を乗り越え庭に着地したような音だ。彼は素早く立ち上がり、足音を忍ばせて来た道に戻った。果樹園の林檎の木の隙間からそっと様子をうかがうと、背の高い男の影がゆっくりと居住棟へ向かうのが見えた。

ウイスキー修道院はこの港町ベルファスト唯一の女子修道院である。老病人以外の男性の立ち入りは日の出から日没までと決められているので、こんな真夜中に男が訪ねて来るのはおかしいことだった。



た。見知らぬ訪問者は実にのんびりと、暢気にゆったり歩いている。応対に出るべきかと彼が林檎の木の影で思案していると、訪問者の男は思い立ったように急に方向転換して彼のいる果樹園に身体を向けた。

男は聖職者のようだった。暗闇に浮かび上がるほど白い肌と背中  
で結んだ金褐色の長い髪がとても上品で、地面に届きそうなほど丈  
の長い濃紺色の法衣をまとった身体はがっしりとしている。年の頃  
は壮年に見えた。長いまつげに縁取られた瞳は翡翠色で、腰に提げ  
ている数珠も同じ色をしていた。

相手が聖職者と分かると彼は林檎の木の影から出た。男も彼に気  
が付いたようで、ゆっくりとした動作で彼の方を見た。

「こんばんは」

男の口から聞こえたのは、音楽のような声だった。低く響く穏や  
かな声で暢気な挨拶をしながら、男は彼に向かって微笑んだ。だが、  
その微笑みが一瞬のうちに固まったのを彼は見逃さなかった。男は  
彼の顔を穴があくほどじっと見つめたり、芝居じみた仕草で自分の  
目をこすったりしている。

「こんばんは。……あの、何か？」

居心地の悪い思いで彼が問うと、男は我に返ったように居住まい  
を正したが、すぐに愛好を崩して再び親しげに彼を見つめた。それ  
はうっとり、愛おしみ慈しむような瞳だった。はっきり言って気  
持ちが悪い。男が聖職者だと知って安心していた気持ちが消え、彼  
の心に警戒心が生まれた。だが同時に何かもっと根の深い感情が、  
彼の心の隅っこでわずかに疼いた。それが何なのかは今の彼には分

からない。

「ああ、ごめん。シスター・アンジェラの若い頃にあんまりそっくりだからびっくりしちゃった。——君はシスター・アンジェラの曾孫のコルガー・バルトロメかな？」

## 1. ウィスキー修道院

そのとき、ウィスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。今夜二人目だ。

広大な緑の敷地は高い塀と深い堀で囲まれている。ギーヴ・バルトロメはその内側の芝生に、木の葉のように着地した。このウィスキー修道院を訪れるのは六十年ぶりだった。

「うわあ、やっぱり相変わらずだあ」

ふわふわと夜霧とともに漂うアルコールの香りに、ギーヴは顔をしかめた。ウィスキーを蒸留しているこの女子修道院は昼でも夜でも一日中、酒の匂いがぷんぷんするのだ。酒好きにはたまらないだろうが、ろくに酒が飲めないギーヴにとっては騒音と同じか、それ以上の迷惑である。

つい何日か前にうっかり飲んでしまったフルーツビールで泥酔したことを思い出し、ギーヴは頭を振った。口で息をしながら、「よいしょ」と言っておもむろに歩き出す。本人は急いでいるつもりだったが、はたから見れば暢気に散歩しているとしか思えない足取りだった。

「この匂いだけで酔いそう。エディンバラより酷いよ」

彼の暮らすスコットランドのエディンバラの悪臭は国際的にも有名で、「エディンバラは一マイル先からも匂う」と言われるほどだ。パリ同様、家庭の窓から汚物を投げ捨てるので、街はいつでも悪臭が立ち込めている。

ウイスキー修道院の庭はまるで林のようだった。両腕をいっぱい  
に広げたようなナラの木が乱立していて、闇よりも濃い直線的なシ  
ルエットを天に向かっていくつも作り出していた。その根元にはや  
せたドングリがごろごろと落ちていて、白い花が黄緑色の冬草に紛  
れるように点々と咲き、軽く跨いだ小川には薄氷が張っていた。

ギーヴが風を切って庭を横切ると、身にまとった濃紺の法衣のひ  
だが扇のように広がり、月明かりも差さない漆黒の闇にとろけた。  
地面についた錫杖の輪がりんと澄んだ音を奏でる。ギーヴの目に礼  
拝堂の裏に広がる果樹園が映ったのはその時だった。六十年前にこ  
こを訪れた時もギーヴは果樹園に足を踏み入れている。天気の良い  
秋の昼下がり、修道女たちが林檎の木陰で食後のお茶を飲みながら  
笑いさざめいていた光景を思い出し、ギーヴはちよつと寄り道をし  
てみようという気になった。

くるりと方向転換して果樹園に向かうと、六十年前の記憶がまざ  
まざと蘇り、ギーヴは少々ばつの悪い気持ちになる。前回、ギーヴ  
がここを訪れたのは彼の兄嫁を家出から連れ戻すためだった。ギー  
ヴはその兄嫁に横恋慕していたが、もちろん彼女を兄から奪い取る  
うとか、兄に内緒で彼女と関係を持つとうなどとは一度も考えたこと  
はなく、彼女への想いや不埒な劣情は胸の奥に鍵をかけてしまい込  
み、誰にも打ち明けなかった。だが。

「迎えに来てくれて嬉しかったわ」

彼女にそう言われた時、ギーヴはひた隠していた想いを彼女に告  
げてしまった。彼女はさぞ困っただろう。優しい彼女はギーヴを傷  
つけないように気遣いながら、きっぱりと彼を拒んだ。ギーヴは悲  
しかったが、同時にひどくほっとしたのを覚えている。

果樹園は六十年前より大きく広がっていた。確か何十年か前にもらった手紙に、オンフルール村の林檎の苗を何本か移植したと書いてあった気がする。フランスのギーヴの故郷からやってきた林檎の木がアイルランドですくすくと育ち、人々に美味しい実をふるまっている。感慨深く心を弾ませた時、果樹園の中から小柄な人影が颯爽と現れた。修道女だろうか。

「こんばんは」

こんな夜更けに出歩くとは奔放なシスターだと笑いながら近づくと、夜の闇の中で、その人の顔はどうしてかずいぶんよく見えた。

それはギーヴがかつて恋慕っていた女性の顔だった。

「あのー……何か？」

不審者を見るような目で見つめられ、ギーヴは我に返った。よくよく見ると、目の前の人物は少年だ。年は十代半ばくらいだろうか、中性的な顔立ちは幼く見えるが眼光は刃物のように鋭く、細身の体にオリーブグリーンの上着とズボンを身につけている。短い髪も瞳もアンジェラと同じ茶色だった。

「ああ、ごめん。シスター・アンジェラの若い頃にあんまりそっくりだからびっくりしちゃった。――君はシスター・アンジェラの曾孫のコルガー・バルトロメかな？」

容姿と年齢から判断してギーヴはそう言った。確かアンジェラの曾孫の中で男の子は一人だけだったはずだ。彼の名前がコルガーといい、古代アイルランドの言葉で「荒武者」を意味するということ。はアンジェラが手紙で教えてくれた。

「確かにオレの名前はコルガー・バルトロメですが、シスター・アンジェラの曾孫ではありません。神の花嫁に子や孫はいませんかね。――シスター・アンジェラに御用でしょうか？」

コルガー少年は一瞬だけ驚いたような表情を見せたが、すぐに涼しげな顔で大嘘をついた。外見は曾祖母似で、性格は曾祖父似なのかもしれない。マキシムにもそういうところがあった。やたらめったら口が達者なのだ。

「隠さなくていいよ。俺はギーヴ・バルトロメ、つまり身内だ。アンジェラの曾孫はたしか男の子が一人に、女の子が三人くらいいるんだっけ」

「……妹は二人ですよ。二人とも死んだけど」

コルガーは数秒間の思案の後、低い声で真実を明かした。聡明な子だ。

「緊急のご要件ならお取次しますが、そうでなければ明日改めてお越しく下さい。ここは日没以降、男子禁制ですから」

「前に来た時は快く泊めてくれたよ。それに、君も男子じゃない」「オレはいいんです」

よく分からない。一刻を争うわけではないものの、こんな時間にやってきて緊急じゃないと言ったらそれはそれで怒られそうだったので、ギーヴは取り次ぎを頼むことにした。

「取り次いでくれないかな？この時間じゃあどこの宿も開いてないし、どちらかというと急ぎの用件だから」

「シスター・アンジェラは最近寝つきが悪いようなので、できれば

起こしたくないんですけど、それでも取り次げとおっしゃいますか？それともシスター・アンジェラが起きるまでお待ちいただけますか？」

朝まで待てと言われている気がする。気を遣えと。

「分かったよ。アンジェラが起きるまで待たせていただきます」

ギーヴは降参した。どうやらアンジェラは曾孫にとっても愛されているようだ。そう思うと、少年の手厳しい対応も悪い気がしない。むしろ、彼の強引で計算高いところが兄マキシムを思い出させて嬉しくもあった。

「ようこそ、お茶を淹れますね」

コルガーはそれまでの殷懃無礼が嘘だったように破顔した。その底抜けに朗らかな花のような笑顔を見て、ギーヴもつい笑ってしまった。どんなに泣いても怒っても、あつという間に端から忘れていくのが典型的アイルランド人だと聞く。アンジェラの容姿を引き継ぎ、マキシムの性格を受け継ぎ、アイルランド人の気質を持つ、これが兄の曾孫か。

コルガーが先に立って修道院の事務所へ向かって歩き出し、ギーヴは彼の小さな背中をのんびりと追った。コルガーは楽器ケースを背負い、小脇にスケッチブックを抱えている。黄緑色の芝の上を歩く足取りは弾むように軽く、その下で踏みつぶされたドングリがぱきぱきと楽しげに歌う。

「ねえ、背中の楽器は何？」

訊ねると、コルガーはわずかにギーヴを振り向いた。アンジェラに良く似た茶色の目がくると動く。さっきまでの鋭さは消え、小動物のように可愛らしい。ギーヴの心にはすでに血縁者に対して抱く親愛の情が芽生えていた。

「フィドルですよ」

コルガーは意味ありげに唇の端を上げた。

「フィドル？」

聞いたことのない名前の楽器だった。ギーヴが首をかしげていると、少年はおかしそうに目を細めながら脚を止めて楽器ケースを背中から下し、蓋を開けて中身を見せてくれた。それは紛れもなくバイオリンだった。

「アイルランドではフィドルって言うんです」

「へえ、君は演奏家なの？」

「演奏家？まさか！パブで弾くんですよ。みんなで色んな楽器を持ち寄って合奏するんです」  
セッション

ギーヴが暮らしているスコットランドにもパブの文化があるが、アイルランドのそれはまた独特だと言う。下戸のギーヴには無縁の世界だ。

「あの、あなたはシスター・アンジェラとどういったご関係で？」

フィドルを背負い直しながらコルガーはギーヴを遠慮がちに見上げた。頭二つくらいの身長差のある少年がようやく自分のことを訊ねてくれたのでギーヴは気分良く答えた。相手の反応がおおよそ見



えているだけに躊躇いはなく、むしろ面白がっている節もある。

「俺はマキシム・バルトロメの双子の弟だよ。アンジェラにとっては夫の弟、君にとっては……大大叔父さんかな。実は俺、こう見えて百九歳」

疑わしげな顔をするか、大嘘をつくなど怒りだすか、馬鹿にするなど鼻で笑うか、この子供はどんな反応を示すだろう。ギーヴはひねくれた思いでコルガーの表情をうかがった。ところが、少年は感心したような顔でギーヴをちらりと見たきりで、再び事務所に向かって歩き出した。

「へえ、大大叔父さんかあ」

拍子抜けして彼に続くのが遅れたギーヴは慌ててコルガーを追いかけた。慌ててと言っても全く速くない。

「あの、君、それ信じるの？」

「え、嘘なんですか？」

コルガーは振り返りもしない。

「いや、嘘じゃないけど、本当に本当だけど。こんなに簡単に信じてもらうの初めてだから、どうしてかなあと思って」

どう見ても三十歳前後の容姿のギーヴが十七世紀の生まれで、こともあろうに百歳を超えていると聞いて驚かない者はあまりいない。驚かないとしたら、鼻から信じていないか聞き間違えたと思っているかのどちらかだ。しかしコルガーはそのどちらでもないようだった。

「それはもう」

低く切り出し、コルガーは脚を止めてギーヴに向き直った。小動物のようだった彼の目が再び刃物のような鋭さで光る。この子供が抱えている何か暗く重たいものの正体がギーヴにも垣間見えたような気がした。

「それはもう、他でもないこの自分の身内なら、どんな変人でもありえると思うから」

眉を下げ、苦々しく微笑んだ少年はアンジェラにもマキシムにも似ていなかった。

「ああ、それは――」

ギーヴも苦い思いで応じる。自分の心の歪みを感じるのはこんな時だ。ギーヴの思いを感じ取ってくれたのか、コルガーはいくらか親しみをこめて彼を見つめ返してくれた。ギーヴは片頬を上げて微笑む。

「――同感だね」

築百年以上の修道院は白い漆喰塗の壁に赤黒い瓦屋根が乗っている二階建てだ。コルガーはギーヴを事務所の中の小さな応接室に通し、熱い紅茶を淹れてくれた。石造りの応接室には堅い木の机と揃いの椅子が四つあり、その足元には古い絨毯が敷かれている。

壁に飾られた一枚の絵にはこのウィスキー修道院が描かれていた。強い日差しの注ぐ緑いっぱいの庭で、青空と白壁の居住棟と果樹園

を背に、修道女たちが笑いさざめいている。それはギーヴの記憶の中のウイスキー修道院のイメージとぴったり重なった。

「それ、オレが描いたんですよ」

食い入るように壁の絵を見つめていたギーヴの背後で、コルガーは照れ臭そうに言った。

「そうなの？ 君は楽器が弾けて、絵も描けるんだ」

振り向いたギーヴはコルガーの姿を見て目を見張った。コルガーは二人掛けの布張りのソファを片手で軽々と担ぎ上げている。

「あ、これ、眠くなったら軽く休めるようにと思って」

どすん、と音を立てて少年は暖炉の前にソファを下す。ギーヴはコルガーの言葉を思い出してなるほどと思った。「他でもないこの自分の身内なら、どんな変人でもありえる」と彼は悲しそうに言ったのだ。

「みんな五時には起きてきますから、それまでゆっくりしてて下さい」

コルガーはアンジェラが起きて来るまでソファで横になったらどうかとギーヴに勧めたが、ギーヴはそれを辞退した。時刻は二時過ぎだ、あと三時間もすれば居住棟で眠っている修道女たちは起床する。

「ねえ、それ見せてよ」

赤々と燃える暖炉の炎の前のソファに座り、ギーヴが指差したのはコルガーが脇に抱えるスケッチブックだった。コルガーは頬を染めてわずかに洩ったが、結局はそれをギーヴに差しだした。

スケッチブックにはベルファストの古い大聖堂や教会や市庁舎が描かれていた。建物の外観、内部の全体図、柱飾り、扉の彫刻、屋根の上の魔物の像、天井の造詣……色々な角度から執拗なまでに描かれたスケッチは、少年の入れ込みようをうかがわせるには十分だった。

「やっぱり。タッチがマキシムによく似てる」

スケッチブックをめくりながらギーヴはのんびりと言った。胸に懐かしい気持ち広がりが、暖炉の炎で温まり始めた身体と心が眠気に誘われる。兄も絵を描く人だった。彼はギーヴにはない才能を他にも多く持ち合わせていた。

「君は建築が好きなんだねえ」

ギーヴがソファの背によりかかり、背後に立つコルガーを顧みると、彼は暖炉の炎に照らされたギーヴの姿を頭からつま先までゆっくりと見下した。ギーヴは僧侶が着用する黒の詰襟の上に丈の長い濃紺の法衣をはおり、自分の背丈ほどの長さの錫杖を脇に抱えている。

「失礼ですけど、濃紺の法衣を着る方がエディンバラ教会にいますという話は聞いたことがあります。エディンバラ教皇は純白、枢機卿は朱色、司教は紫、司祭は灰色の法衣をまとうものではないでしょうか？あなたはエディンバラ教会の方ではないのですか？」

ギーヴの身元を見極めようとする少年の問いは鋭かったが、彼の声や表情からは何故だか警戒心は感じられなかった。ギーヴはどこまで本当のことを話そうかと頭をかきながら、自分の隣に座るようコルガーを促した。

「さすが修道女の曾孫だ、よく知ってるね。そうだよ、俺はエディンバラ教会のヒエラルキーからはずれているんだ」  
「ヒエラルキーからはずれてる？」

コルガーはギーヴの隣に腰を下して首をかしげた。

「俺は六十年間エディンバラ教会に囚われていた、名ばかりの司教なんだ。実は閉じ込められていた塔から脱走して来たお尋ね者な  
さ」

## 2. 冒険のはじまり

ギーヴがウイスキー修道院を訪れる二日前、十二月一日のことだ。

ギーヴは窓を開けた。分厚い木の窓は勢い良く開いて、塔の中に重く溜まっていた空気がみるみる外へ吸い出されてゆく。彼は胸一杯に息を吸い込み、大きく伸びをした。この塔に幽閉されて六十年、飽き飽きするほど眺めたエディンバラの街は今日も変わらず美しい。薄らと朱色を帯びた夕暮れの光に照らされた赤いレンガ屋根群は、まるでルビーのように輝いていた。

「案外あっさり帰って来るかもだけど、行ってくるよ」

窓に背を向け、ギーヴは多少の感慨を込めて自室を眺めまわした。可愛らしい小さな木の丸テーブル、テーブルと揃いの椅子二脚、天蓋つきの寝台、火の消えた暖炉、礼拝台、木のついたて。それがこの塔に閉じ込められた彼に与えられた全ての家具だった。

囚人のように扱われ、惨めな気持ちにならないわけではなかったが、もし自分が普通の人間に生まれていたら、今頃もっと苦しい生活をしていたに違いないと思う。雨風をしのぐ屋根のある場所では寝起きできるだけでした。ギーヴには自分の不遇に酔いしれる趣味はなかった。たとえ学者でありながら一冊の本を持たなくとも、エディンバラ大学図書館への出入りが許されているならそれで充分だった。

彼を捕えているのはヨーロッパのほぼ全域に教えを広めるエディンバラ教会である。もっともらしく「エディンバラ名誉司教」などという位を授かったが、組織内での権限はほとんどなく、エディン

バラ城の建つ岩山にそびえる聖ピーター大聖堂に隣接する塔のひとつに軟禁されている。彼はエディンバラ教会が異端とするクラシック教徒なのだ。

クラシック教徒は六十年前にエディンバラ教会から破門され、改宗しなかった者たちは処刑された。それを免れた者はヨーロッパ中に潜んでいるとも、誰も知らない遠い島に移り住んだとも言われている。彼らが反乱を起こさぬように捕らえた人質、それがギーヴだ。クラシック教徒のリーダーであるマキシム・バルトロメの双子の弟である。

ギーヴは窓の外を眺め、小声で歌を口ずさんだ。

「過ぎた日々はただ懐かしく  
振り返ることしかできないけれど  
ただ心だけで この心だけで  
私はあなたのもとへ飛んでゆく」

子供の頃、マキシムとギーヴは故郷の聖歌隊で『神の歌声を持つ双子の神童』ともてはやされていた。

「愛を告げる勇気も 己の非を認める強さも  
運命に立ち向かう覚悟もなかった  
あなたが許してくれるなら  
他にはもう何もいらない」

ギーヴの実年齢は百九歳だが、外見は壮年に見える。背中で緩く結んだ腰まで届く長い髪はつややかな金褐色で、身長は十八世紀のヨーロッパ成人男性の中でも長身の部類だ。長いまつげに縁取られた瞳は、祈りの回数を数えるために腰に提げている翡翠の数珠と同

じ色をしている。黙って立っていれば若い女性にもてないこともないが、一度口を開いてしまうと「年寄りみたい」と言動に非難を浴びることが多い。十七世紀のフランス北部の漁村に生まれ、クラシック教徒が異端とされる前から生きているのだから仕方がないといえ仕方がないのだが。

「どうも、菓子店ニュートンです！」

塔の地階から若い娘の元気な声がした。

「ギーヴ猊下にアップルパイをお持ちしました！」

合図だ。いよいよ始まった。

ギーヴは石の壁に立てかけてあった一本の錫杖を手に取り、別の手で自分の頭より小さな布包みを持った。荷物はそれだけだ。

「きゃあ！」

くぐもったような爆発音がして、娘が叫び声をあげた。

「何だ、何事だ！！」

「地下だ！地下道で何かあったんじゃないか？！」

複数の衛兵たちが大騒ぎを始め、それを聞きつけて大聖堂前の広場を見張っていた衛兵たちも持ち場を離れた。予定通りだ。

「さて、行こうか」

出かける覚悟を決め、六十年間も雨風から自分を守ってくれた小さな部屋に背を向けたとき、ギーヴの足の下で鐘が鳴った。この塔



は鐘楼なのだ。鐘は毎日、日の出から日没まで十五分ごとに鳴り響く。

西の空が燃えるように赤い。この鐘はこの日最後の鐘だろう。ギーヴは目を閉じて鐘の音に聞き入った。耳に慣れた厳かな旋律を、しばらく聞くことはないのだと思いながら。

鐘はまだ鳴っていたが、ギーヴは窓枠に手をかけてそこへ上った。狭い窓枠の上に立ち、思い切って外に身を乗り出すと、夕暮れの美しいエディンバラの町並みが遠くまで見渡せた。地面は遠く、人が豆粒のようだ。

新鮮な風が吹き、長い髪や足首まで覆っていた濃紺の法衣が扇のように広がる。ギーヴは思わず声を立てて笑った。六十年間感じたことがないくらい清々しい気分だった。

鐘がやんだ。ギーヴは大きく息を吸い込み、両眼を見開いて、力いっぱい窓枠を蹴って窓の外に飛び出した。年甲斐もなく、わくわくした。

――まだ、諦めるのは早いんじゃないか？ マキシム。

法衣をはためかせて落下し、ふわりと石畳へ着地した彼の姿を見た者はいない。ギーヴは身をかがめて広場を抜け、階段を下りて待ち合わせ場所へ急いだ。このエディンバラから逃げ出すために。

エディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメが病に伏したという噂がエディンバラ教会内で囁かれ始めたのは翌日だった。彼がクラシック教徒の人質であり、本当は脱走したのだということを知る者は少ない。

これが冒険の始まりであった。

「その後、脱走を手伝ってくれた子たちと別れて、船に乗ってアイランドまでやって来たんだ。ここまでは郵便馬車に乗せてもらったんだよ」

ギーヴはバンゴールというアイランドの小さな港町で船を下りた。教会の放った追手の裏をかこうと思つてのことだ。ギーヴが姿を消せば、教会が真っ先に調べるのはベルファストのアンジェラの元のはずだ。港で待ち伏せでもされていたらたまらないと思い、彼は陸路でベルファストへやってきた。案の定、市門では厳しい検問を行つていたので夜を待ち、高い市壁を飛び越えて町に入り、やつとのことでウイスキー修道院まで辿り着いた。万事不器用な自分としては大変首尾よくできたものだと思つた。ギーヴは我ながら思う。

「クラシック教徒の人質？教会から逃げて来た？」

コルガー少年は困つたような顔で腕組みした。

「あなたはクラシック教徒なんですか？」

「うん。六十年前にエディンバラ教会から破門されて、そのまま教会に捕えられたんだ。ヨーロッパ中に潜んだクラシック教徒が反乱を起こさぬように」

あつさりと答えるギーヴに少年はますます困つたような顔をした。

「なぜ、ここへ？」

コルガーの質問には答えず、ギーヴは唇の端を上げた。

「君はアンジェラの曾孫で、しかもここに住んでいるんだよね。それなら、この修道院の秘密を知らないはずはないと思うんだけど」

少年が何か言おうとした時、窓の外が光った。まるで雷でも落ちたかのように一瞬だけ庭が明るくなったのだ。二人は窓に駆け寄り、外の様子を窺った。よく見ると、礼拝堂に明かりが灯っているようだった。

「こんな時間に誰だろう」

「眠れずにベッドを抜け出した誰かがお祈りをしているだけだといけど」

修道院は日没と同時に唯一の門を閉ざして堀に架かる跳ね橋を上げる。夜更けに庭を散歩しても危険はないはずだが、コルガーの表情は厳しい。ギーヴの胸にも言いようのない不安がよぎった。心に何かが引っ掛かっている。

「オレ、様子を見てきます。あなたはここにいて下さい」

「待って、俺も行く」

ギーヴは暖炉の薪に灰をかけ、慌てて部屋を出て行くコルガーを追いかけた。嫌な予感を抱えながら二人は炊事場や食堂を抜け、門の外れていた扉を開いて外へ出た。そのとき、ウイスキーの香りに混じって妙な匂いがした。

「――魔の匂いがする」

ギーヴは背中毛が逆立つのを感じた。コルガーもうなずいた。

「行かなきゃ」

礼拝堂に向かって走り出したコルガーの背中をギーヴは追う。辺りには奇妙な風が吹いていた。生命の気配が大いに混じった、それでいてひどく冷たい風だ。見上げると、重々しい曇天が彼らの頭上へのしかかっていた。風に吹かれ雲は確実に流れているが、それが途切れることはこの九ヶ月間で一日もなかった。

「中に何者がいるか、分かりますか？」

コルガーは礼拝堂の前で足を止め、静かにギーヴを顧みた。修道院に隣接した礼拝堂は一見すると白い石造りの二階建てだ。だが本当はレンガで造った後に石を貼り、石造に見せかけている。どこの修道会にも所属せず、修道院長も置かず、資産家の後ろ盾もないので、石で礼拝堂を建てる金などないのだ。三月地震の時に崩れなかったのは奇跡としか言いようがない。

「アンジェラと、少なくとも一人、魔法を使う者がいるね」

ギーヴは声を潜めて答え、少年と視線を交えた。

「ちなみに、こういうことに対処する自信はありますか？」

訊ねつつ、コルガーは両開きの扉の片方を押した。

「全然ないねえ。長生きだけはしてるんだけど、俺は箱入りだからね」

悪びれもせずに答え、ギーヴはもう片方の扉に手をつく。二人の手で力いっぱい押し開けられた扉はバンと音を立てて壁にぶつかっ

た。装飾のない壁と天井を持つ小さな礼拝堂の床にさつと光が差し込み、風が壁のろうそくの火を消す。入口から祭壇まで太い通路が真っ直ぐに伸びていて、その両脇に木製の長椅子が合計二十個ほど並んでいる。

長椅子の群れの向こうに、二人を顧みる人影が二つ見えた。彼らは高窓から注ぐわずかな光に照らされていた。

「ばあちゃん！」

少年は人影に向かって呼びかけた。帰って来たのは期待通りの声だった。

「コルガーね？」

張りのある堂々とした声で応じたシスター・アンジェラは、前列の長椅子に座らされていた。その傍らにずっと立つ侵入者は、シルエットを見る限り女性だったが、着ているものは典型的な男性貴族の服だった。茶色の長い髪を丁寧に結びあげていて、化粧が濃く、胸が豊かだからすぐに女性と分かる。女であることを隠すというよりは機能性を求めている男装なのであろう。年齢は二十台前半くらいに見える。

「やあ、俺もいるよ」

「まあ、ギーヴげいか猯下！よかった、あなたが病に倒れたという噂はやつぱり嘘だったのね！」

おもむろに手を振るギーヴと、歓声を上げるアンジェラに、無視されたと思ったのだろう、男装の女が動いたのは間もなくだった。

ずがん！という鈍い音とともに、祭壇と扉を結ぶ通路に小さな穴が開いた。撃ち込まれたのは銃弾だ。コルガーはギーヴの腕をつかみ、とっさに長椅子の影に身を隠した。

「あらあらあら、誰かと思えば、ギーヴ・バルトロメ名誉司教殿下ではございませんか」

高窓からの薄光を浴び、男装の女は胸をそらして妖艶に笑った。

「君は誰だい。エディンバラ教会の人間には見えないけど」

ギーヴは長椅子の影から顔を出し、女に訊ねた。彼女は新しい銃を構え、それをアンジェラに向ける。ところが、そこで一瞬だけ、彼女は表情を曇らせた。アンジェラを見下ろし、寂しげな顔をしたのだ。

「ええ、その通り。私はアヤ・ソールズベリ。教会とは無関係よ。あなたやシスター・アンジェラに用があるの」

女は言いながらしげしげとギーヴを見つめた。

「本当なのね。三十歳の身体に百九歳のおじいさんが閉じ込められているという噂は。あなたのことを聖なる妖怪と言う人もいるのよ」

壮年の頃から姿が変わらないこと。それこそがマキシムとギーヴがかつてエディンバラ教会に認められた『神の奇跡』だった。二人は三十歳のある日を境に、髪や爪が全く伸びなくなった。擦り傷や切り傷を作っても瞬時に癒え、傷跡さえ残らなくなった。

「いつまでもこの世にとどまり、神のために尽くすよう、老いが止

まっただ」

当時の教皇はそう言って二人の名を福者の列に加えたが、ギーヴとマキシムだけは本当のことを知っていた。

「君はこんな夜更けに、物騒なものを持って、そんなおしゃべりをするために来たの？」

ギーヴは不愉快な気持ちを抑えて立ち上がった。無礼な女を恐れて椅子の影に隠れているのが我慢ならなかったからだ。彼の法衣の裾をコルガーが引っ張ったが構わない。

「ええ、そうよ。単刀直入に言うわ。シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

### 3. 遠い日の約束

この年、一七六五年、世界から太陽が消えた。ヨーロッパ全域を襲った大地震の日からずっと、空が雲に覆われているのだ。なぜ太陽が雲に隠れているのかは分かっていない。作物の不作で食料の値段は跳ね上がり、人々の不満が各地で燦り始めている。各国の王たちは異常気象の原因を躍起になって探していた。

「シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

彼女はきっぱりと言った。

「こう見えても、できればあなたたちに危害を加えたくないのよ。私はあなたたち二人が持っているヒベルニアに関する情報が欲しいだけ」

女王のような風格を持つ彼女は、アンジェラの後頭部に真っすぐ拳銃を向ける。彼女の名はアヤ・ソールズベリという。名門貴族の家系図に名を連ねる生粋のイングラント人で、現在は「ロッキンガム東方貿易会社」という企業に雇われている用心棒だ。

子爵家の令嬢であった彼女が家を飛び出し、安穏な生活と貴族の身分を捨てたことには理由がある。アヤには幼馴染の親友がいた。彼の名前はジャック・ロッキンガムといい、ロッキンガム東方貿易会社の跡取り息子である。アヤの両親は「成金商家の馬鹿息子」と言ってジャックを敬遠したが、アヤにとって彼は唯一友達と呼べる存在だった。



ロッキンガム東方貿易会社は、イングランド王国からの特別な委託事業を請け負う民間企業である。今から二十年ほど前、財政難で植民地を維持できなくなった王室が、その一部の統治を民間の資産家に開放したのだ。それに真つ先に飛びついたのがロッキンガム東方貿易会社の創始者ジョージ・ロッキンガムだった。王室御用達の商家とはいえ、それまで国内だけで収益を上げていたロッキンガム家はみるみる巨大化していき、今では植民地統治のための私的な軍隊まで保有している。

ロッキンガム家は、表向きはインド北部の領地から紅茶と小麦を運んでいる巨大貿易会社だ。安心で安全な品を扱う、誰もが知っている食料品店というクリーンなイメージも大衆に定着している。しかし、利益のためなら手段を選ばないことでジョージ・ロッキンガムの右に出るものはないということもまた業界では周知の事実だった。

「もっとと不作になればいいのにな」

九月のある夜のことだ。ジョージ・ロッキンガムは孫のジャックとアヤの前でそう言った。ロッキンガム家の居間でアヤがジャックに相談事をしているところへ、泥酔したジョージ・ロッキンガムがスコッチウイスキーの瓶を手にとって来たのだ。イングランド中から舞い込む縁談話に苛々していたアヤは彼の姿を目にとめて顔をほころばせた。彼女は子供のころから老人というものが好きだった。

ジョージ・ロッキンガムは高齢にもかかわらず、いまだに会社の舵取りをしている。その日も恰幅のいい体軀を高級なスリーピースで包み、四十年前は男前だったであろう顔を脂で光らせていた。頭髮は色こそ真白だが禿げてはおらず、とても六十代後半には見えな

い。

「どこもかしこももっともって不作になれば、俺の領地の作物がもっともって高く売れるのに」

目を丸くするアヤの隣で、ジャックは豪快に笑った。彼はアヤより五つ年上で、この夏に二十五歳になった。祖父の過激な発言にも慣れている。

「おいおい、じいさん。そうなりやインドの作物だって育たないだろ」

祖父の発言を丸きり冗談と受け取り、ジャックは軽い口調で言った。彼は長めの黒髪に黒い瞳の美丈夫で、ジョージ・ロッキンガムにあまり似ていない。趣味のいい赤茶のジャケットとパンツに乗馬用のブーツをはいている。彼が大股で通りを歩けばリヴァプール中の女が振り返るとも、振り返った瞬間につまずいた彼に幻滅するとも言われている。彼の底なしのどんくさは王子様のような外見と同じくらい有名だ。

ジョージ・ロッキンガムは柔らかいソファにどすんと腰を下ろし、大きな腹を震わせて笑った。

「違うさ、ジャック。俺の領地にだけは太陽が輝くんのだ」

「はあ？」

「エディンバラの友人が、いいことを教えてくれたんだよ。世界中が雲に覆われ、世界が不作に見舞われているにも関わらず、ある場所だけに太陽が輝いているんだと」

ジョージ・ロッキンガムは瓶に口をつけ、ウイスキーをごくりと

飲んだ。

「へーえ、そりゃどこなんだ？」

老人が酒を飲み下すまで待ってから、ジャックは笑いながら訊ねた。本気にしていない。

「――ヒベルニアだよ、ヒベルニア。ヒベルニア王マキシムが氣象を操って、世界中の空を雲だらけにしているんだとよ」

ジョージ・ロッキンガムの声はしごく真面目だった。だからジャックもアヤも腹を抱えて笑った。

「あつはつは、じいさん、ヒベルニアはないだろ！俺たちだってもう子供じゃないんだから、御伽噺は卒業したぜ！」

「おじいさまったら、ご冗談がうまいんだから！」

だが、笑い転げる二人を見るジョージ・ロッキンガムは、やはり真面目な顔をしていた。

「まあ聞け。ヒベルニアへ行ってその氣象兵器を手に入れることができたら、世界の氣象を思うままに操ることができるってこった。それは想像もできないくらい莫大な利益と途方もない軍事力を生む。イングランドを買うことだってできるかもしれない」

ジョージ・ロッキンガムが本気らしいことが分かると、アヤの胸の中で亡き祖母のことが思い出された。彼女の祖母は敬虔なクラシック教徒で、クラシックのリーダー・マキシム・バルトロメたちと共にエディンバラ教会と戦った人物だった。息を引き取るその時まで、彼女はヒベルニアのことを口にしていた。ヒベルニアには離れ

離れになってしまった大切な仲間がいると。もう一度彼らに会いたい、ヒベルニアの地を踏みたいと。

「おじいさま、ヒベルニアは本当に存在するんですね？」

笑いを収めてアヤが訊ねると、ジャックが大げさにソファに倒れこんだ。

「あー、もー、しょーがねえなあ、アヤまで何言い出すんだか。ヒベルニアやアトランティスは御伽噺の舞台だろ。俺級のヒーローでも行けねつつうの、おわっ！」

勢いあまってソファから転落した孫を無視して、ジョージ・ロッキンガムは身を乗り出した。

「ヒベルニアが本当に存在するかどうか、それは俺にも分からん。だが、もし本当にヒベルニアがあって、そこに気象兵器があって、他の会社に先を越されたらどうなる？他の国に先を越されたら？大変なことになる。我々は富を絞り取られ、飢えに苦しみ、そうなたら戦争が起こるかもしれない。しかも勝ち目はない。その最悪の事態を避けるには、ヒベルニアの有る無しも気象兵器の有る無しも、俺たちが真っ先に確かめればいい。正直、半信半疑ではあるが、俺はうちの用心棒たちを何人か選抜して、ヒベルニアを探す」

ジョージ・ロッキンガムはウイスキーの瓶に口をつけ、それを勢いよく傾けた。

その時、アヤの脳裏に懐かしい思い出が浮かんた。本当はもっと早く思い出さなければならなかった、心のどこかに引っかかっていた大切な記憶だ。

『ヒベルニアにはお砂糖の雪が降るのよ』

それは彼女が六歳の頃のことだ。舌足らずな口調でアヤは言った。生まれ育った屋敷の厨房で、お菓子の城を作っていた。かまどから漂う熱気が暖かったのを今でも鮮明に思い出せる。

『まあアヤお嬢様、そんなにお砂糖をかけられては。こちらのクリームになさいませ』

ブランデーの瓶を手になんと言ったのは祖母だった。瓶の中できらりと揺れる茶色の液体は、お菓子作りには欠かせない。

『だめよ！ヒベルニアは誰も知らない西の果てにあって、世界で一番美しいお城があって、いろんなお花が咲いて、いろんな果物がなくて、それでお砂糖の雪が降るの。教えてくれたのは、ばあやですよ。それで、雪の下には黄金と宝石が、まるで石ころみたいにごろごろ転がってるのよね、ほら見て』

アヤが城の土台の中から小麦粉とクリームと砂糖にまみれた大量の貴金属類を取り出して見せると、祖母は卒倒しそうになった。

『お、お嬢様！奥様の宝石じゃありませんか！』

『いいのよ。あたしはいつかヒベルニアに行って、こんなもの、いくらでも持って帰るんだから！』

アヤはクリームだらけの両手を腰に当て、椅子の上に仁王立ちした。

『あたし、いつか絶対ヒベルニアを見つけるの！楽しみにしててね、

ばあや！』

祖母は目じりに涙をにじませて破顔した。

『まあ、アヤお嬢様ったら！』

忘れていた約束への想いが胸にあふれたとき、アヤの意識はロツキンガム邸に引き戻された。目の前には怪訝そうな顔をしたジョー・ロツキンガムと興味津津のジャック・ロツキンガムがいる。

「私、行くわ、ヒベルニアへ」

アヤの唇はひとりでに動いていた。アヤがヒベルニアを見つけると誓った時に顔をくしゃくしゃにして喜んだ祖母の姿と、息を引き取る時にアヤの手を握ってヒベルニアへの思いを口にした祖母の姿が重なって、アヤの胸を締め付けた。

「行かなくちゃならなかったのよ。約束をしたから」

過去の残像を振り払い、アヤは居住いを正してソファに浅く座り直した。ジョー・ロツキンガムの双眸を真つすぐに見つめる。酒に酔ってはいたが、彼の眼は力強くアヤの視線を受け止めた。

「おじいさま、お願いです。私にもヒベルニア探しを手伝わせてください。私の祖母もヒベルニアは実在すると言っていました。ヒベルニアの地を踏みたかったと最期の時まで悔やんでいたはずです。私が祖母の代わりにヒベルニアへ行くことができたなら、祖母はとも喜ぶと思うんです」

まじかよ、と仰け反って叫ぶジャックの横で、ジョージ・ロッキンガムは深く頷いた。

「いいだろう。だが、アヤ君……その話は二度としない方がいい」「え？」

「ヒベルニアを聖地としているのはクラシック教徒だけだ、君のお祖母さんは恐らくクラシック教徒だったんだろう。もし彼らの縁者と知れば君も教会に睨まれる」

ジョージ・ロッキンガムの忠告に、アヤは黙って首を縦に振った。祖母が異端と呼ばれるクラシック教徒であったことをアヤは知っていた。首をかしげたのはジャックだった。

「ん？そのクリケット教徒ってのは、みんな改宗したんだろ。じゃなかったら処刑されたって歴史で習ったぜ」

「人は自分の信じるものをそう簡単に変えられないものさ。俺の友人曰く、クラシック教徒はヨーロッパ中に潜んでいるそうだ」

「双子の魂百までってやつか」

アヤは指を三本立ててジャックの鼻先に突きつけ、ジョージ・ロッキンガムは再び孫を無視して話を続ける。

「そいつが言うには、ヒベルニアを探している人間は三種類いる。ひとつは俺たち金の亡者ども。気象兵器を手に入れてひと儲けを企む連中だ。もうひとつはエディンバラ教会。奴らはクラシック教徒の反乱を恐れていて、中でもヒベルニアの勢力は目の上のたんこぶだ。人質にしている名誉司教を餌にすればヒベルニアのクラシックどもを従えることもできるかもしれないと踏んでいるんだろう、ヒベルニアを見つけ出したら、ヒベルニア人の弾圧に走るのは目に見えている。そして最後に、クラシック教徒たちだ。ヒベルニアは彼

らにとって聖地だが、そこへ行く方法は謎に包まれている」

その島は誰も見つけてはいけない島なのではないか。そんな疑問がアヤの脳裏を横切った。だが、いずれ誰かが見つけてしまうのなら、自分の手で見つけたい。そしてできることなら、祖母が想いを馳せたヒベルニアを守りたい。気象兵器とやらが悪党の手に渡らぬようにしたい。もしかしたら、そのためにジョージ・ロッキングガムを裏切ることになるかもしれないが。

「君のお祖母さんはヒベルニアを目指す手がかりを何か残していないものかね？」

アヤの思惑など知らないジョージ・ロッキングガムは、ヒベルニア探しの最初の糸口はないものかと頭を抱えていた。アヤは平静を装いつつ古い記憶を探った。祖母が亡くなってもう十年経っている。

「たしか、ヒベルニアへ行く方法はクラシックのリーダーのマキシム・バルトロメの妻と弟しか知らないと言っていました。ヒベルニアへ行く方法を知っているのに彼らはなぜ船を出さないのだろうと祖母は不満を口にしていたように思います」

「妻というのはともかく、弟というのはギーヴ・バルトロメ名誉司教猥下のことだな」

「ギーヴ・バルトロメ猥下？どなたですか？」

「普通の人間は知らない男だ。年をとらない、聖なる妖怪さ。外見は三十そこそこだが、本当の年齢は百九歳と言われている。幽閉された塔の中でクラシックに関する研究をしているというが、クラシックが反乱を起こさないように捕らえられた人質だ。ギーヴ猥下に接触する方法と、生きていければの話だがマキシム・バルトロメの妻の



居所を並行して探ってみよう」

祖父の言葉に誰よりも勇ましく立ち上がったのはジャックだった。

「聖なる妖怪に、異端の残党、御伽噺の島に、氣象兵器とくらあ、そりゃー面白そうだ！よし、俺もやるぜ！」

ジャックは軽いノリで笑いながらアヤの肩を叩いた。いつものことながらアヤは呆れ果て、ジャックに二言三言の小言を告げる。だからその横でジョージ・ロッキングアムがつぶやいた言葉は、彼自身の耳にしか届かなかった。

「御伽噺と言って笑っていられるのは今のうちかもしれんぞ」

そうしてアヤ・ソールズベリは家を飛び出し、ロッキングアム東方貿易会社に雇われた。たった三ヶ月間だったが、彼女は用心棒としての身のこなしを学び、体力や筋力をつけるための訓練や射撃の練習に明け暮れ、魔法を覚えるなど血のにじむような努力をした。特に男性と比べて体力的に劣る彼女は魔法の習得に没頭した。人之道にはずれると教会が忌み嫌う魔法を扱うことは、祖母を弾圧した教会への復讐になるような気がしてアヤはその行為に快感さえ覚えた。

遠い日にかわした約束は追い風を受け、今や彼女の胸に熱く燃え盛っていた。

ウイスキー修道院侵入当初、アヤはもう少しスムーズに事が進むと思っていた。シスター・アンジェラを脅して必要な情報を聞き出すくらい朝飯前だと思っていたのだ。拳銃や弾薬は多めに持って来

てはいたが、三対一となれば、ここから離脱するだけでやっとの装備である。

「シスター・アンジェラの命が惜しければ、ヒベルニアの場所と行き方を教えなさい」

アヤはそう言って、シスター・アンジェラに拳銃を向けた。出直した方が賢明かもしれないという考えが頭をよぎったが、マキシム・バルトロメの妻と弟が二人揃って目の前にいることを考えると、引き下がるわけにはいかないという気持ちの方が大きかった。

「ヒベルニアって、御伽噺のオバケ島だろ？そんなわけ分かんないもののために、ばあちゃんに拳銃なんか向けるなよ」

長椅子の影に隠れていたコルガー少年がすくと立ち上がり、憤るでもなく、恐れるでもなく、平然と言った。気負いのない自然体な彼の言動に、アヤは一瞬ひるんだ。彼女はアンジェラに向けた拳銃を握り直す。少年がただの命知らずならいいが。

「君はシスターのお孫さん？」

年下の少年に対して、アヤはできるだけ友好的に微笑んだ。得体の知れない相手だ、なるべく優しく、刺激しないに越したことはない。だが、色気より飲み気のコルガーはただ顔をしかめた。

「修道女に子や孫がいるわけないだろ。オレはこの住人だ」

「そう。でも彼女にはマキシム・バルトロメという夫がいたのよ」

アヤはどうやって情報を聞き出そうかと考えを巡らせる。彼女が求めているのはヒベルニアへ行く方法、たったそれだけだ。

「ねえ坊や、本当のことを教えてあげましょうか。ヒベルニアはオバケ島なんかじゃないわ。一年中花が咲き乱れ、あらゆる果実が実り、雪山の下に余るほどの黄金と宝石が眠り、世界で最も美しい城があるといわれている理想郷よ」

それはアヤが祖母から聞いた話だ。

「理想郷？オレは子供のころ、ヒベルニアにはオバケがいるって聞いたぞ。悪いことするとヒベルニアへ連れて行かれるぞ、って言われなかった？」

そうだよね、とコルガーが同意を求めるとシスター・アンジェラは困ったような顔をした。アヤは苛立つ気持ちを抑えて軽く頭を振る。少年は本当に何も知らないのだ。

「いいえ。ヒベルニアはそんな場所じゃない。そもそも架空の島なんかじゃないわ。その島にはエディンバラ教会が異端とするクラシック教徒たちが住んでいるの。このギーヴ猊下の兄君マキシム・バルトロメヤ、ヨーロッパ大陸から逃げ出したクラシック教徒やその子孫たちがね」

「ヒベルニアに人が住んでる？冗談だろ」

コルガーは苦笑して、助けを求めるように再びアンジェラやギーヴの顔を見た。二人とも口を閉ざしたまま、否定も肯定もしない。

「坊や、一七〇五年のクラシックの大作進のことは知ってる？」

「歴史の授業で習ったよ。クラシック教徒って、エディンバラ教会の教えに反する悪魔を信仰してたんだろ」

「いいえ、クラシックが崇めていたのは神の四人の妻よ。彼女たちは四人姉妹で、それぞれ雨の女神、雷の女神、虹の女神、極光の女神と言ったの。神が太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、私たちの住むこの世界を創り上げたその時、同時に四人の美しい女神たちを生み出した、そう信じているのがクラシック教徒よ」

アヤ自身はその教えを信じてはいない。もはや彼女が何かの宗教を信じることはないだろう。エディンバラ教会の裏の歴史を知れば知るほど、宗教そのものに対する不信がつのり、クラシック弾圧の歴史を知れば知るほど、信仰への執着が招いた悲劇に胸が悪くなるのだ。

「シスター・アンジェラやギーヴ猊下はクラシック教徒。シスター・アンジェラはクラシック教徒のリーダーであるマキシム・バルトロメの妻で、ギーヴ猊下はマキシム・バルトロメの弟。マキシムはクラシック教徒たちを率いてヒベルニアへ渡ったけれど、この二人は大陸に留まったの。二人とも後からヒベルニアへ向かうはずだったのにそうしなかったと、私の祖母が言っていたわ。行き方を知っているのに行かなかったと」

アヤはアンジェラとギーヴへ視線を移した。何か言いわけでもして情報を漏らしてくれればいいのに、二人とも黙ったまま微動だにしない。アヤは唇をかんだ。もしヒベルニアへ行く船が出たとしたら、祖母は喜んで乗ったことだろう。しかしアンジェラもギーヴもヒベルニアを目指さなかった。そう考えると彼らが恨めしく思えてならなかった。

「私たちのことに詳しいと思ったら、あなたのお祖母さんはクラシックなのね。もしかして一七〇五年の大打進に参加していたんじゃない

ないかしら」

しばらく続いた沈黙を破ったのはアンジェラだった。銃口を向けられているにも関わらず、彼女の声はしっかりしている。これまで幾度となく修羅場をくぐりぬけてきただけのことはある、アヤは唇だけで笑った。

「ええ。祖母は熱心な信徒だったわ。そしてマキシム・バルトロメを慕っていた。大怪我をしていなければヒベルニアまでお供したのに、って」

アヤは祖母が行くことのできなかったヒベルニアの話やマキシムたちの話を聞いて育った。エディンバラ教会へ抗議の行進を行った時の思い出は特に好んで聞かせてくれた。祖母はマキシムに心酔していた。

「あなたたちが船を出さないのなら、私がヒベルニアへ行くわ。だからヒベルニアへ行く方法を教えて頂戴」

アヤは銃口をアンジェラの後頭部にこすりつけた。ギーヴは思案するように指先でのんびり頬をかくと、ゆっくりとした口調で言った。

「あ、あのね、俺たち、ヒベルニアへ行くよ」

#### 4. 天に選ばれること

ギーヴのあっさりとした答えにアヤはぽかんと口を開けた。

「え？」

「だから、俺たちこれからヒベルニアへ行くんだ」

ギーヴは中央の通路まで歩み、身をかがめて床に片膝を着いた。小さな祭壇や何も描かれていない壁をゆっくりゆっくり見回し、それから頭を垂れて口の中で祈りの言葉を唱える。ここは、彼にとって神聖な場所なのだ。コルガーは彼の一挙手一投足を目で追った。

この人は本当に神の僕なのだ。

やがてギーヴは立ち上がり、困ったような顔でアヤを見下ろした。彼の大きなシルエツトが入口に浮かび上がり、風に吹かれた法衣のひだが扇のように広がる。

「良ければ君も一緒に来る？」

さらりと言ったギーヴに、アヤは言葉を失ったように凍りついた。彼女は数秒間まじまじとギーヴの顔を見つめ、それからようやく切り返す。

「な、何を言ってるのよ！」

「だって君、ヒベルニアへ行きたいんですよ。エディンバラ教会の関係者ならお断りだけど、君のお祖母さんは大行進にも参加したクラシックだっていうし、一緒に連れて行ってもいいよ」

「わ、私はねえ、ある組織に雇われてるの！そいつらはヒベルニアの異常気象の原因をつきとめて、それで大金儲けするのが目的なのよ！要するに金の亡者よ！」

そこまで言ってからアヤはしゃべり過ぎたことを悔やむように口を覆った。アヤたちの目的を聞いてアンジェラとコルガーは目を見張ったが、ギーヴは驚かなかった。

「知ってるよ。異常気象の原因が本当にヒベルニアにあるのなら、それを利用しない手はないよね。どこから嗅ぎつけたのか知らないけど、列強国はみんなヒベルニアを狙ってる。どうせ君を雇っているのも、どこかの国か企業でしょう」

ギーヴの静かな指摘に、アヤは自棄を起こしたように言った。

「ええ、そうよ。夢のような話だけど、気象を操ることができれば、自分の国にだけ太陽を輝かせ、他国を飢えさせることができる。作物を輸出すればその値段は跳ね上がり、大きな利益を得ることもできる。信じがたいけど、そういう非情なことを狙っている人間が実際にいるのよ。私の雇い主もそう。――でも、それを知っていて、よくも一緒に行こうなんて言えるわね！」

「だって、人質とってるのは君の方だろ。それ以外にどうしろって言うの？」

アヤははっとして銃を握り直した。動揺したせいかアンジェラに向けた銃口が下がっていたのだ。彼女は心を落ち着かせようと深く息を吸い、ゆっくりと吐き出した。

「……ヒベルニアへ行く方法を教えて。それだけでいいの」

アヤは言い切らないうちに呻き声を上げて床に両膝をついた。

「そんなこと、してやる必要ないよ」

コルガーは誰にも気づかれずにアヤの背後に回り、彼女の  
手から銃をもぎ取り、ついでに鳩尾に肘で一撃をくれたのだ。付け  
焼刃とはいえ用心棒としての訓練を受けたアヤが少年の近付く気配  
を全く感じなかった。アヤは歯を食いしばり、コルガーの顔を見上  
げた。コルガーは手の中の銃を珍しそうにしげしげと眺めている。

「こういうの、あると便利なんだろうけど、えい」

それは粘土をこねるような動作だった。コルガーの手の中で、鉄  
製の拳銃がぐにやりと折れ曲がった。少年はそれを丸めてすっかり  
球状にしてしまうと、足元にばいっと投げ捨てた。

「なっ……何を！」

アヤが立ち上がった後ずさった隙にコルガーはアンジェラを抱き  
かかえて跳躍した。美しいアーチを描いて着地したのはギーヴの後  
ろ、礼拝堂の扉の前だ。

「まだやる？ 女の人を痛めつけるのは趣味じゃないんだけどな」

そう言いつつ、コルガーはギーヴにアンジェラを預け、アヤの方  
へ進み出る。神聖な修道院へ踏み込み、喧嘩を売って来たのはアヤ  
の方だ。遠慮する理由はない。

「気をつけて、あれはただ者じゃないよ」



ギーヴがささやくと、コルガーは皮肉っぽく笑った。

「オレも似たようなものだから、釣り合いが取れてちょうどいいかな」

コルガーが自分の超人的な肉体能力に気がついたのは物心ついてすぐだった。ほんの子供だったコルガーと一緒に遊んでいた兄の手の骨を折ってしまったのだ。兄には大泣きされ、両親からはこっぴどく怒られた。そしてアンジェラだけが、優しくこう言ってくれたのだ。

『あなたは神々から素敵な贈り物をもらったのね』

自分が他人と違うとどれほど思い知っても、彼女のその言葉があれば乗り越えられると信じて生きてきた。

「君のは生まれつきでしょう、彼女とはまるで違うよ。彼女は禁じられた古の知識を詰め込むことで魔法を後天的に体得している」

ギーヴは答え、アヤの姿を見た。コルガーも彼女に目を向ける。育ちのよさそうな美しい女性がなぜ魔法に手を染めたのかは分からない。だが、彼女が本気だということは分かった。彼女は本気でヒベルニアへ行く方法を手に入れようとしている。

「俺たちはヒベルニアへ行く。君たちは、その後をつけてくるといい」

音が反響するように設計された礼拝堂にギーヴの声が響いた。余裕を取り戻した女の笑い声がそれに重なる。

「私たちはヒベルニアの気象兵器を狙ってるのよ。一番にたどり着けなければ意味はないわ」

「俺たちは気象兵器なんかに興味はないよ。第一、君たちが望むような気象兵器は存在しない。この空を雲で覆ったのは極光の女神だ。彼女は人間の言うことなんか聞かない。――マキシムと俺以外の言うことなんか聞かないんだよ」

極光の女神。

ギーヴの口からするりと出た言葉は何とも甘美な響きを持っていた。

「……どういうこと？」

「俺たちは遠い昔の約束を果たし、極光の女神を止めるためにヒベルニアへ行くんだ」

「遠い昔の約束？」

アヤはオウム返しに訊ね、眉をひそめる。その一瞬の後、コルガーは鼻孔を刺激する不快な匂いに気が付いた。開け放たれた扉の向こうから、ウイスキーの香りに混じって焦げくさい匂いがした。

「まさか……！」

礼拝堂を飛び出したコルガーの目に飛び込んで来たのは、果樹園の方角に揺らめく真っ赤な光だった。

「火事だー！火事だー！かなりやばい大火事だー！」

炎の向こうから若い男の間延びした声が聞こえ、コルガーは走り

出した。男手がなく、閉鎖された修道院で火事ほど恐ろしいものはない。

少年が超人的な速度で走り去ると、アンジェラは深いため息を吐き出して礼拝堂の外に出た。ギーヴとアヤもそれに続く。

「あの果樹園には大切な林檎の木があったの。思い出の林檎の木がね。火をつけたのはあなたのお仲間でしょう、今夜はもうお引き取り下さい」

憤るでも悲しむでもなく、アンジェラは静かに告げた。その時アヤは、彼女の茶色の瞳が少年の目にとてもよく似ていることに気がついた。

「……ありがとう」

アヤはギーヴとアンジェラを交互に見つめてそう言った。何があるがとうなのかアヤ自身も分からぬまま、彼女は脱兎の如く逃げ出した。その足の速さや身のこなしは、やはり魔法に手を染めた者のそれだった。

「アンジェラ、早くみんなを起こして、門を開けて外に逃げるんだ」

「大丈夫よ、猊下。コルガーが何とかするわ。神々はね、あの子の期待を決して裏切らないの」

「それでもだめだよ。逃げて」

自信たっぷりのアンジェラに言い捨て、ギーヴは緩慢な動作で柔

らかな冬草の上を走った。本人はとても急いでいるつもりだ。ギーヴが林檎の木が密集する果樹園にたどり着くと、コルガーは夜露に濡れた草に片膝をつき、両手を組み合わせて燃え広がる炎を見つめていた。

「コルガー？」

ギーヴが後ろから声をかけると、少年はぱっと顔を上げ、朗らかに笑った。

「オレがこうすると雨が降るんです。雨が必ず助けてくれるんです。ここの人たちはみんなオレの家族ですから、オレが何とかするんです」

当たり前とでもいうような、自信に満ちた顔だった。子供のころのアンジェラにそっくりだなと口の中でつぶやき、ギーヴは微笑んだ。暗い空を見上げると、鉛色の雲が空を覆っている。三月地震以来ずっと居座り続けているその分厚い雲が雨を降らせたのは、ここ数カ月でも数えるほどだ。

「ばあちゃんはオレの天使なんだ。みんなや修道院に何かあれば、ばあちゃんが悲しむでしょ。それはだめなんです」

「天使？ 骨と皮の？」

「そう、骨と皮の！」

ギーヴはおかしくなって吹き出した。二人がけらけら笑うと、それに同調するかのように雷が低く呻いた。ギーヴは少年の隣に立ち、彼が組み合わせた小さな両手に片手を置く。その瞬間、コルガーは息をのんだ。

「あ」

ぽつりと少年の手の甲に雨粒が落ちてきた。夜明けの遠い闇の中、しとしとと救いの雨が降り出したのは間もなくだった。雨脚は次第に強くなり、肌に当たると痛いほどだ。二人はあつという間にずぶ濡れになり、果樹園を蝕む炎の手は脆くも崩れ去る。白煙を上げながら赤い光が消えていく。

辺りが再び暗闇に包まれると、ギーヴはコルガーの手から自分の手を離した。その途端、何かで遮ったように雨がぴたっとやんだ。

「……あなたは何者ですか」

組んでいた手をほどき、コルガーは立ち上がった。それでも、彼がギーヴと目を合わせるには顔をうんと上げなければならなかった。ギーヴは濡れた髪をかき上げ、首をかしげて微笑む。

「答えになってないかもしれないけど――俺はバルトロメ家の人間だ。君と同じだよ」

二人はお互いの目の中に、自分と同じものを見つけた。それは、人と違う何かを持って生れたものの悲しみだ。誰も、天に選ばれることを望んだわけではなかった。

「同じかあ」

コルガーは肩をすくめ、空を仰いで息を吐き出した。その唇には、わずかに笑みが浮かんでいた。同じ悲しみと同じ喜びを噛みしめ、ギーヴも微笑んだ。



## 5. 異端の女神（前書き）

クラシックの歴史についてのギーヴの朗読から始まります。

## 5. 異端の女神

「むかしむかし、古代のヨーロッパにおける宗教の中心地はバチカンでした。バチカン教会は古くからの教えを守り、神を崇め、神の四人の妻を女神と呼んで慕っていました。彼女たちは四人姉妹で、それぞれ雨の女神、雷の女神、虹の女神、極光の女神といいました。

神とは自然を支配し、人間に恵みと災いをもたらすものです。彼は太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、四人の美しい女神たちとこの世界を同時に創ったといわれています。

中世になると、異民の侵略によって弱体化した教会は、権力を別の都市へ移します。教皇はエディンバラに移り住み、教会は以後、エディンバラ教会と呼ばれるようになりました。それから間もなく開かれたのがグリーンヒル公会議です。この七日間に渡る話し合いの末、教会は神を唯一神とし、四人の女神たちの存在をこの世から抹消してしまいました。妻の存在を隠して神から人間性をとりあげ、神を唯一無二の超越した存在に仕立て上げることで、教会の権力を強めようというのが教会の狙いでした。

聖書や福音書が書き直され、あるものは焼き捨てられました。女神の描かれた宗教画や壁画やステンドグラスも失われました。彼女たちを讃える歌も歌うことを禁じられました。それまで妻帯することができた聖職者たちは次々と離縁させられ、彼らの家族はばらばらになりました。失いかけた教皇の権威を取り戻し、教会を建て直すためだけに、神も人間も人間らしさを奪われたのです。

しかし、やがて新たな宗派が生まれます。ルネッサンス文化とともに生まれた考え方です。ルネッサンスとは、迷信や聖書を鵜呑み



にし、エディンバラ教会の言いなりになっていた中世に差し込んだ理性という名の光です。もちろん、その考えに賛同した者の多くが知識人ではありませんでしたが、盲目的に聖書を信じる者は減りました。科学に目覚める者も、美や欲望を追い求める者も現れました。それは暗黒のような中世を抜けた、輝かしい近世の幕開けだったのです。

中世以前に存在していた人間らしさを追求する彼らは、古代遺跡から発掘された情報をもとに、女神たちを崇めるようになりました。配偶者を持ち、自分たちと同じように笑い、怒り、悲しむ魅力的な神々を、彼らは心から愛したのです。それは瞬く間にヨーロッパ中へ広まり、『古典へ帰れ』と唱えた彼らはいつか『クラシック教徒』と呼ばれるようになりました。

それが再び、中世の暗闇に飲み込まれたのが一七〇五年のことです。エディンバラ教会がクラシックの教えを改めて異端としたのです。教会は、唯一絶対の神に妻など存在しないと、もう一度、女神たちの存在を公に否定しました。

ルネッサンス期に好んで制作された女神の絵画や彫刻は破壊され、彼女たちについて書かれた本は焚書の憂き目に遭いました。中世に行われた悲劇が再び繰り返されたのです。知恵をつけ、賢く自由になった人々の心が聖書から離れていくことを教会は恐れたのです。教会は神が高潔で唯一無二の存在であることを徹底的に説き、女神たちをもう一度歴史から抹殺したのです。神がいつも人々の心を惹きつけ、スポットライトを浴び続けるただ一人の英雄でいられるように――。

中世に起きた最初の女神末梢の時、人々は教会に従いました。彼らは女神を忘れ、唯一神と教会を信じました。しかし、今度は違います。クラシック教徒たちは改宗を迫られると集会を開きました。

力を合わせて抗議し、エディンバラ教会の決定を覆そうとしたのです。その運動のリーダーがマキシム・バルトロメという男です。彼はフランスの漁村オンフルールの修道士でした。マキシムは妻と弟の助けを借り、ヨーロッパ中のクラシック教徒に呼びかけ、フランスから海を渡り、エディンバラへ向かって抗議の大神進を始めたのです。マキシムたちと共に歩いたクラシックの数は千とも万とも言われています。

もちろん、エディンバラ教会は黙っていませんでした。大神進のために留守になったクラシックの教会や修道院へ立ち入り、女神崇拜の象徴を没収して回ったのです。没収された絵画や古代の聖書は街の中央広場にうず高く積み上げられ、歴史的に価値のある物さえ容赦なく火をつけられました。弾圧は厳しく、マキシムたちは行進の途中で、教会との武力衝突を繰り返します。それによって多くの死者や怪我人を出し、やがて彼らはヨーロッパを去ることを決めました。ヨーロッパを出て、西の果てにある島ヒベルニアを目指そうとしたのです。

しかし、マキシムの弟は言いました。

『だけどまだ、諦めるのは早いんじゃないか』

生まれてからずっと共に歩んできた双子の兄に意を唱えるのは、彼にとって初めてのことでした。

『まだ、諦めるのは早いんじゃないか。いつかきつとエディンバラ教会とクラシック教徒が共存できるようになる。そうしたら、俺もみんなの後を追ってヒベルニアへ行くよ。どうかそれまで、俺と、彼女と、彼女のお腹に宿るおまえの子供のことを待っていてくれないか』

マキシムは答えます。

『待ってくれ。俺は諦めたわけじゃない。俺たちは信仰を諦めないためにヒベルニアへ行くんだ』

すると弟は首を横に振りました。

『エディンバラ教会は規律ある中世へ戻れという。クラシック達は古典へ帰れという。俺は古典でも中世でもない、この時代らしさを、ここで探したい。いろいろな信仰や思想が共存できる、この時代らしい信仰の在り方を』

弟は迷いのない言葉が続けます。

『だから俺はエディンバラへ行くよ』

『よせ、殺されるぞ！教会が俺たちに容赦しないことは十分に分かっただろう！』

『いいや、教会は決して俺を殺せない。俺に危害を加えればクラシックが黙っていないことは教会も知っているんだ。何より、俺が殺されたとしたらおまえが何をしでかすか。教会はその事態を恐れているはずだよ』

弟はマキシムを安心させるように柔らかく微笑みました。

『今まで宗派も国境も世代も越えて、色んな人たちと意見を交わしてきたんだ。これまでのように彼らと共に暮らすことができなくなるなんて嘘だ。どうして、みんな一緒にいられないんだ？おかしいだろう？——だからまだ、諦めるのは早いと思うんだ。いつかエディンバラ教会とクラシックが共存できるようになる。どうかそれま

で待っていてくれないか』

弟が頑固に言い張るのでマキシムはしぶしぶ頷きました。

『君は来てくれ、アンジェラ』

妻が大陸に残ることを、マキシムは頑なに認めませんでした。誰がヨーロッパ大陸に残っても、彼女だけは自分と一緒に来てくれると思っていたのです。

『マキシム、よく考えて。ヒベルニアへは長い航海に耐える体力がなければ行けません。ここには怪我人のクラシックがたくさんいるし、どうしても故郷を捨てられない人だって、新しい土地へ旅立つ勇気がない人だっているわ。彼らの面倒を誰が見るの？ 故郷に帰すにしても、時間と労力は必要だわ。語学力と統率力のある人間が何人かここへ残らなければ。彼らを見捨てたとなれば、あなたは人々の信頼を失うことになります。私が残れば、誰にもあなたの悪口は言わせません』

『俺は実の弟を残していくんだ、それで十分じゃないか』

『マキシム、この戦いで愛する者を失った人はたくさんいるわ。家族と別れなければならなかった人も。でも、生きてさえいれば、きっとまた会える。私たちにはまだ命がある。それだけで無限の可能性があるの、私たちにも、この子にも』

妻はそう言って大きな自分のお腹を撫でました。彼女のお腹にはマキシムの子供が宿っています。口ごもるマキシムに弟が提案します。

『マキシム、俺がヒベルニアへ行く時は、彼女と、おまえの子供を

連れていくよ。必ずだ、約束する』

妻も口を添えました。

『マキシム、元気な赤ん坊を産んで、こちらでの仕事全部済んだら、その時は私も必ず行くわ、ヒベルニアへ』

マキシムはようやく承諾し、二人はしっかりと抱き合いました。

『きつとすぐに追いつくから待っていて。約束よ、マキシム』

ぽろりと妻の瞳から涙がこぼれました。

『ああ、約束する』

『約束だ』

三人は誓い合い、そうして散り散りに別れたのです。ひとりにはクラシック教徒を率いて西の果ての島ヒベルニアへ。もうひとりには教会との共存を夢見てエディンバラへ。最後のひとりには大陸に残ったクラシックを故郷に帰した後、抛り所のないクラシックを連れてアイerlandへ移り住み、修道院をつくりました。彼らの約束は果たされないまま、それから六十年が経とうとしています——」

コルガーとギーヴは濡れた服を着替え、ウイスキー修道院の広間で暖炉に当たっていた。二人は毛織の絨毯に並んで座り、薪の燃える音を聞きながら、ギーヴは紅茶を、コルガーはウイスキーを口に運ぶ。厨房から、アンジェラがスープを温めるいい匂いがした。

「これはヨイク・アールトという民話学者が書いたもので、頼まれて内容をチェックしてたところなんだけど、どう？俺の話とクラシックの生き残りの日記を元にしたらいいんだけど」

ギーヴは視線を上げた。スープの入った皿を手を持ったアンジェラが戸口に立っていた。彼女はくすくすと笑い、温かいスープをコルガーとギーヴの前の床に置く。

「そうね、とても懐かしいわ。でも、ちょっと美化され過ぎなんじゃないかしら」

「君もそう思う？なんだか恥ずかしいんだよねえ。話が大げさすぎるっていうか」

ギーヴとアンジェラは微笑み合い、コルガーに目を向けた。少年はギーヴの手から紙の束を受け取り、熱心にめくっている。ヨイク・アールトという名はコルガーも知っていた。民話だか御伽噺だかを集めて大衆向けの本にした学者で、コルガーもそのベストセラー本を読んだ覚えがある。ユーモラスな新聞広告で話題になった本だ。

「冷めないうちに食べなさい」

見かねたアンジェラが声をかけると、コルガーとギーヴは両手を組んだ。

「あなた方の恵みに」

感謝の言葉をささげてスプーンをとりながら、コルガーははつとした。子供のころから食事の前に唱えるように言われていたこの言葉の「あなた方」というのは、神と四人の女神のことだったのだ。知らず知らずのうちに、自分の中にはクラシックの教えが根づいて

いる。だが、コルガーは不思議と嫌な気持ちにならなかった。

「ばあちゃんや、猊下の事情は分かりました」

じゃがいものスープをみんな胃の中におさめてしまうと体が芯から温まった。コルガーは本格的な眠気を感じた。

「でも、ヒベルニアって本当にあるんですか？」

コルガーは膝を抱え、大あくびをしながら訊ねた。つられたようにギーヴもあくびをする。

「うん、正直、俺も百パーセントの確信は持てなかったんだけど、九月に教会がマキシムの孫娘を保護したんだ。彼女はヒベルニアからやってきたと言っていて、どうやらそれは本当らしい。マキシムは今、ヒベルニア王と呼ばれてるんだってさ」

今度は二人同時にあくびをした。ギーヴは絨毯の上に寝転がって丸くなった。毛織の絨毯は硬くて寝心地が悪かったが、それが気にならないほど疲れていた。

「ヒベルニアという島はね、もともと、古の教えに登場する、女神たちの聖地なんだ。それが転じて御伽噺や怪談になったんだよ。悪いことするとヒベルニアに連れて行かれるぞっていうのは、クラシック教徒たちが聖地を隠すために流したデマだね」

へええと感心しながらコルガーもギーヴと同じように寝転がる。ギーヴはとうとう目を閉じた。

「そのヒベルニアへ行く方法を猊下は知ってるんですか？」

「もちろん。後を追うってマキシムと約束したからね」

「じゃあ、本当にヒベルニアへ行くんですか？」

コルガーは訊ね、なかなか返事が返って来ないのを見かねてギヴの顔を覗き込む。金褐色の長いまつげはぴくりとも動かず、規則正しい寝息が聞こえ始めたのは間もなくだった。



## 6. ロッキンガム東方貿易会社（前書き）

場面が一転します。

## 6. ロッキンガム東方貿易会社

アヤ・ソールズベリとジャック・ロッキンガムはウイスキー修道院から逃げ出し市街地を目指していた。ヨーロッパの辺境と呼ばれるこの国にも、ロッキンガム家の所有する商館がある。

辻馬車がいるような時間ではないので、男装の麗人と茶色のジャケットとパンツ姿の美丈夫は自分の足で路地を歩いた。薄暗い裏道には浮浪者が何人も寝転がっていたが、不機嫌な顔で先を急ぐ二人のイングラント人に絡んでくる者は幸いいなかった。

「しくじって悪かったわ、ジャック。相手を舐め過ぎてた」

歩調を緩めず、アヤは言った。敗北感に苛まれながらも、彼女にはやはり女王のような気品と風格がある。二人は中央広場に面した五階建ての商館の前で立ち止まった。築百年は経っている古い建物だ。入口には金色の文字で「ロッキンガム東方貿易会社」と書いてあった。

「気にすんなよ、収穫ゼロってわけじゃなかったんだし」

「でも目的はヒベルニアへ行く方法を聞き出すことだったのに」

「ああ、でもギーヴ猊下が言ったんだろ、彼らの船について行っていいって。まあ、そうなるとヒベルニアに一番乗りってわけにはいかないけど、それでもいいんじゃないの？うちのジジイの望みは叶うんだろ？」

そのとき、使用人によって商館の扉が開かれた。二人は暗い建物の中に入り、ほとんど手探りで階段を上って二階の一室に滑り込ん

だ。

ジャックはすぐに応接セットのソファに倒れこむ。アヤは窓に近づいて、締め切られた重いカーテンを開けた。月も星も雲に覆われているが、ほのかな明かりが応接室の空気に滲む。

「ねえ、ジャック。私の望みが、ジョージおじいさまの望みと真逆のものだったら、あなた、どうする？」

ジャックは目を丸くして身を起こした。

「はあ？」

「私、ヒベルニアの気象兵器なんてどうでもいい。私は祖母の夢見たヒベルニアの地を踏みたい。できることなら、ヒベルニアを守りたい。私の本当の望みはそれだけなのよ」

言いながら、アヤは祖母のことを思い出していた。今夜やたらと彼女のことを思い出すのは、ウイスキー修道院で仲睦まじい老シスターと少年のやりとりを目にしたせいかもしれない。

ジャックは乗馬用のブーツをはいた脚を組み、おもむろに頭をかいた。

「あのよー俺も聞いていい？ いまいち分かんないんだよなあ。アヤのお祖母さんって、あのばあやのことだろ？ ……血、つながってないよな？」

アヤの両親がジャックの訪問を嫌がったため、彼はアヤの家に入ったことがあまりない。だが子供の頃、二人が日暮れまで遊んでいると、青いドレスにエプロンをつけた白髪の老婆がアヤを迎えにや

って来たものだ。

「ええ。彼女はうちの使用人の一人だったわ。でも、私にとっては、たった一人のかけがえのない家族だった」

アヤは父親の不義の子だった。物心ついた時から兄や姉と明らかに差別され、母親からは暴力を振るわれて生きてきた。自分の夫とメイドの間にできたアヤをいじめる母親からアヤをかばってくれたのが祖母だった。アヤを愛し、慈しんで育ててくれたのは、愛する「ばあや」だけだったのだ。アヤは彼女の恩に報いたかった。

「そういえば、そういうあなたは どうしてヒベルニア探しに加わったの？面白そうだからってだけじゃ割に合わないと思うけど」

アヤが首をかしげると、ジャックは胸を張って冗談めかして笑った。

「しゃあねえだろ。強情なダチが、どうしても行くなって聞かねえからよ」

木枯らしが窓の外の木々から茶色の葉をもぎとって去ってゆく。隙間風が足元を通り過ぎて身を凍らせる。ジョージ・ロッキンガムを敵に回すかもしれない。ヒベルニアの地を踏むために命を落とすかもしれない。様々な不安が浮かんではアヤの心を重くしたが、それでも、ジャックがいればどこまででも行けるような気がした。何だってできるような気がした。

アヤが両肩を上げて破顔すると、幼馴染みもにっこりと笑った。リヴァプール中の女性の心を奪うような笑顔だったが、アヤにとっては心強いお守りだ。

「おまえの望みが何であろうと、それがうちのジジイと全然違うものでも、俺はどこまでも付き合うぜ」

親友同士が語らう部屋の前で、その扉に耳をつける者がいた。ロッキンガム家当主ジョージ・ロッキンガムに気象兵器奪取を任されたパーシヴァルという男である。長身の筋骨たくましい体は上から下まで黒い衣服に包まれていて、短い髪も切れ長の目も黒い。闇の中で白く浮かび上がる顔は整ってこそいるが見る者に冷めたい印象を与え、帝王のような威厳を感じさせる。年の頃は四十ほどだ。

「やはり信用ならんな」

気象兵器奪取を狙うロッキンガム家を裏切らんとするアヤとジャックの言葉に彼は眉をひそめ、口の中でそうつぶやいた。憤るでもなくそつとその場を立ち去ると、彼は自室に向かった。暖炉に火を入れ、黒いブーツを履いたままソファに横になって毛布を被る。

パーシヴァルはジョージ・ロッキンガムたつての願いでアヤとジャックを連れていくことにした。いつもなら子供のおもりなど御免と渋るところだが、今回ばかりは二つ返事で引き受けた。ジョージ・ロッキンガムが気象兵器を手に入れることは、彼の望みでもあったのだ。

だが、アヤはパーシヴァルに心をゆるさなかった。恐らく、パーシヴァルがヒベルニアの気象兵器に固執し過ぎているからであろう。アヤはジャックだけを連れ、パーシヴァルに黙ってウイスキー修道院へ向かった。彼らはパーシヴァルにばれていないつもりのようなだ

が、イングランド王家に二十年仕えて海軍大佐に上り詰め、三月地震以降ロッキンガム家の特別用心棒として訓練を重ねたパーシヴァルが、彼らの単独行動を見逃すはずがなかった。

生真面目なパーシヴァルにとって、チームワークを乱すアヤたちの行動は不愉快でしかない。しかも、どうやら彼らは敗走してきた様子だ。パーシヴァルは一刻も早くヒベルニアへ行くための手がかりを手に入れようと、慎重に確実にシスター・アンジェラの隙をうかがっていたというのに。

パーシヴァルは毛布から顔を出し、炎の影が躍る天井を見つめた。黄金色と暗黒が絡まりあい、溶け合ってまた別れていく。揺れ動く光と影を眺めていると、パーシヴァルの瞼に眩しい記憶が蘇った。

白いレースのカーテンが窓辺で風に揺れていたのを、パーシヴァルはよく覚えている。窓の外から差し込む弱い光と、蜂蜜のように甘く澄んだ声のことも。

『どうか私のお墓は日の当たるところへつくって。風に吹かれ、雨に打たれ、草や花のように眠っていたい』

空に横たわる分厚い雲を見るたび、パーシヴァルは妻の最期の言葉を思い出した。世界は灰色の雲に覆われ続けていて、半年前に亡くした彼女の遺言を、彼はまだ果たせずにいるのだ。

もう少し待ってくれ、エヴァ。

パーシヴァルは起き上がり、茶色のカーテンを開けた。確認するまでもなく、暗い夜空には晴れることのない雲が横たわっている。

もう少し待ってくれ、エヴァ、今にきっとヒベルニアの気象兵器を手に入れてみせる。そして我らが偉大なボスが定める土地にだけ、太陽の光が降り注ぐ日がやって来る。そうしたら、俺は真っ先におまえの棺をそこへ運ぶぞ、エヴァ。

その時ノックの音がしなければ、パーシヴァルは悲しい思い出の海に身を投げてしまっていたかもしれない。妻の死に顔を目の前から振り払い、パーシヴァルはドアに近づいた。扉を開ける前に神経を研ぎ澄まして廊下の様子をうかがう。そこにいるのはアヤ一人のようだった。ジャックは立っているだけで気配が騒がしいので間違いない。

「こんな時間にごめんなさい。話があるの、いいかしら」

パーシヴァルが扉を開けると、アヤは張りつめた表情でそう言った。パーシヴァルは黙ってアヤを見下ろし、武器を持っていないことを密かに読み取る。

「作戦会議をするには不向きの時間だと思うがね」

「そうね。でも密談するには都合のいい時間だと思うわ」

女というのはつくづく秘密が好きな生き物だ。妻もよく内緒ごとを匂わせては「あなたには秘密よ」と人差し指を立てていた。パーシヴァルはアヤにソファを勧め、暖炉の上に置いたブランデーの瓶を取り上げた。

「あなたに謝らなければならないの」

アヤはソファに腰を下ろし、握った拳を膝にのせた。男装していてもすぐに彼女が女と分かるのは、体に染みついた上品な仕草のせ

いかもしれないとパーシヴァルは思った。小柄な妻のしなやかな立ち居振る舞いを思い出しかけ、パーシヴァルは首を振った。

「私に黙ってウイスキー修道院へ行ったことか？」

顔をしかめ、アヤは視線を床に落とした。苦虫を噛み潰したような顔だ。

「知ってたの？」

「私はロッキンガム家の特別用心棒だぞ」

言いながら、パーシヴァルはブランデーを二つのグラスにそそぎ、ひとつをアヤに手渡した。彼女の酒の好みなど知らないが、仕事を失敗した夜に出された酒を拒む人間もそうそういないだろう。

「それなら話が早いわ。ヒベルニアへ行く方法は見つからなかったけど、ギーヴ猊下やシスター・アンジェラと接触できたの。彼らはヒベルニアへ行きたければ自分たちについて来いと。自分たちもヒベルニアを目指すのだと言っていたわ」

「ついて来い？それではギーヴ猊下に先を越されて、気象兵器を奪われるかもしれないということだろう？」

「いいえ、あの人は気象兵器には興味がないとはっきり言ったわ」

それは君もだろう。喉まで出かかった言葉を胸にしまい、パーシヴァルは息を吐いた。パーシヴァルにとってはヒベルニアもクラシック教徒もどうでもいい存在だ。気象兵器を手に入れることができれば他には何も要らない。だから、気象兵器に興味がないと言い切るギーヴの言葉が信じられなかった。それがもし本当なら、ギーヴとパーシヴァルの利害は完全に一致するのだが。



「君が余計な事をしなければ、私はシスター・アンジェラをさらい、ギーヴ猊下から必要なことを聞き出すつもりだった。それは君たちにも話しておいただろう。これで彼らはもう隙を見せない。なぜチヤンスを待てなかった？」

「あなたが目的のためならどこまでも冷酷になれる人だからよ。理由が何であっても、老人に手荒なまねをするのは反対よ。それに、私ひとりで何とかなると思ったのよ」

「仕事を舐めていたということか」

「そうね。甘く見てたわ」

アヤは勢いよくブランデーをあおった。反対にパーシヴァルはグラスを置いて立ち上がった。

「トムとジェリーには民話学者と書籍商をつけさせている。君とジャックはギーヴ猊下たちを見張れ。彼らが船に乗ったら、こちらもすぐに出港し、奴らの先導によってヒベルニアへ向かう。ヒベルニアへ上陸したら、すぐに奴らを殺す。そのために、君もこれで覚悟を決めろ」

パーシヴァルは酒瓶の並んだキャビネットから一本の小瓶を取り出した。色は黒く、ラベルはない。

「覚悟？」

直感的に身の危険を感じたのか、アヤは緊張した面持ちでパーシヴァルと小瓶を見上げる。パーシヴァルはせせら笑うように言った。

「君はなぜ彼らに負けたか分かるか？彼らはクラシックの女神に愛されている。神に対抗できるのは悪魔だ。昔からロッキンガム東方貿易会社の特別用心棒は、悪魔と契約することで超人的な力を手に入れてきた。私も半年前にアザゼルという下級悪魔と契約を交わした」

「悪魔と……契約？」

「なんだ、知らないのか。ならば見せてやろう」

パーシヴァルは小瓶を床に叩きつけた。ガラスの破片が飛び散り、瓶から黒い霧のようなものが現れる。背筋が凍り、心臓や胃袋を冷たい手で直接撫でられたような気がした。

——我が名はミステイク。おまえが差し出すものは何か。

黒い霧の中心から、腹に響くような重低音がした。それは聞き取りにくいが人の言葉だ。

——我が名はミステイク。おまえが差し出すものは何か。

「差し出すもの？」

部屋いっばいに広がる黒い霧に圧倒されつつアヤはパーシヴァルを見た。

「神や悪魔と契約するには交換条件が必要だ。例えば、飼い犬を差し出せばそれなりの力を、両親を差し出せば巨大な力を彼らは貸してくれる」

「あなたは何を差し出したの？」

「分からない。悪魔は契約のために何かを差し出させるが、その後から人が惜しまぬように差し出した物に関する記憶を消すんだ」

アヤは逡巡するように目を伏せた。

——我が名はミスティック。おまえが差し出すものは何か。

「ミスティック。なるほど、確かに霧のようね」

もやもやとした黒いものを見上げ、アヤはひきつったような笑みを見せた。

「私にはあげられるものがないわ。家族も資産も捨てたの。他を当たってちょうだい」

——ジャック・ロッキンガム、欲しい。

「だめよ!」

アヤは慌てた。なぜ悪魔がジャックのことを知っているのだろう。

——ジャック・ロッキンガム、欲しい。

「だめ! 彼は私の持ちものじゃないわ、あなたにあげられない!」

パーシヴァルは自分が悪魔と契約した時のことを思い出した。あの時、パーシヴァルも彼女と同じように「あげられるものはない」と言ったのだ。しかし、パーシヴァルは何かを差し出した。そう、無理やり奪い取られたのだ。何か、とても大切なものを。

「お願いよ、他を当たって！私には、自分以外の何かを差し出すなんてできない！」

懇願し、アヤは扉に向かって後ずさりした。だが、悪魔は愉快そうに低く笑った。

——それが答えだな。契約は結ばれた。

悪魔の声がしたとたん、黒い霧がアヤの身体に吸い込まれた。アヤは恐怖に表情を凍らせ、苦しげに口を開閉させて床に倒れ込んだ。

**7. まだ下せない背中の荷物がある（前書き）**

また、  
一転。

## 7. まだ下せない背中の荷物がある

『欲しくなーる、欲しくなーる、欲しくなーる、欲しくなーる』

十歳のコルガーの目の前で、古ぼけた銀の懐中時計が振り子のよ  
うにぶんぶん揺れる。暖炉の火が赤々と燃える父の部屋の揺り椅  
子で、コルガーは頬を膨らませていた。

『欲しくなーる、欲しくなーる。――どうだ？欲しくなったか？』

時計の鎖を持ったまま、父はにかつと笑った。けれどもコルガー  
は、そんな古臭いのは嫌だと言う。兄は誕生日にぴかぴか光る新し  
い時計を買って貰ったのに。

『あんなのはどこにでもある時計だ。これは世界でたった一つの特  
別な時計なんだぞ』

そう言って父は時計のふたを指でそつとなでた。コルガーはふて  
くされながら、父の表情を盗み見た。父はしわだらけの顔を悲しげ  
にゆがめ、いつくしむように時計を見つめていたが、すぐにまた時  
計を振り出した。

『よーし、こうなったら別の術をかけてやる。おまえはこれを貰わ  
なかったことを、後悔すーる、後悔すーる、後悔すーる、後悔す  
ーる、死ぬまで一生絶対後悔すーる……』

あんまりしつこいのでコルガーは観念した。父は満足げに笑っ  
て彼の髪をかき回し、へたくそな歌を歌いながら向かいの椅子に腰  
掛けた。

——ぎんのとけい、きみにあげよう、ぼくのころ、とわのあい。

『おまえは知らないか。私が若い頃に流行ったんだぞ』

コルガーは手の中で時計をもてあそびながら、しばらくの間、父が歌う声を聞いていた。

コルガーは目を開けた。毛布が顎の辺りまでかけられていて、部屋はまだ薄暗い。懷中時計の蓋を開けると五時を指していた。

ああ、あのまま暖炉の前で眠ってしまったのだ。そう思いながら、コルガーは九ヶ月前の三月地震で一度に亡くした家族のことをふいに思い出した。

父や兄は家の下敷きになって死んだ。同じ家の同じ部屋にいながら、不思議な力でコルガーだけが助かった。屋根や壁が崩れ、あらゆる家具や柱が住人に向かって倒れてきたにも関わらず、コルガーの周りだけが何かに守られてでもいたかのように何も落ちてこなかったのだ。彼はすり傷ひとつ負わなかった。それからというもの、彼は自分が生き残ったことに罪悪感を覚え、ときどき、生きていることが間違いのようにさえ思える。

大好きな人たちがたくさんこの世から姿を消して、もう二度と顔を見ることも触れることも声を聞くこともできないのに、自分がまだ息を吸って食べ物を食べて排泄していることが不思議に思えてならない。ぜんぶ、悪い夢に思えてならない。

そして、妹のことを思うと頭が真っ白になる。  
目の前が、真っ暗になる。

コルガーがぎゅっと拳で毛布をつかんだとき、暖炉に薪をくべる音がした。顔を上げるとギーヴ・バルトロメと目が合った。

「あれ、眼が覚めた？」

彼の翡翠のような緑色の瞳は優しくコルガーを見つめた。ギーヴは片膝を立てた格好でコルガーの傍らに座っていた。長い髪を結っていた紐をほどき、襟元を緩め、ゆったりとくつろいでいる様子だった。

コルガーはなぜだか、ほっとした。

「もう少し寝ててもいいかもね」

ギーヴは暖炉に薪を放る。コルガーは半身を起して頭をかいいた。

「……夢じゃなかったんだ。あなたや、変な女が来たこと」

「変な女ね。そういえば彼女、これからどうするつもりなんだろう。ある組織に雇われてるって言うていたけど、雇い主は誰だろう。ひよっとしてイギリス王室かなあ。イングランドの上流階級の言葉を使っていたよね」

「それにしちやお粗末なスパイじゃないですか」

「じゃあイングランドの大富豪かな。どっちにしろ、氣象を操って利益を得ようだなんて、神々をも恐れぬ行為だよ。まったく、経典を書き換えるとか、女神を歴史から抹消するとか、特定の宗派を弾圧するとかさ、本当に人間って――」



ギーヴは立ち上がり、暖炉にかけていた薬缶の湯をポットにそそいだ。白い湯気とともに、紅茶の良い香りがふわりと広がる。

「――身の程を、知らないよね」

そう言ったきり、ギーヴは黙ってしまった。コルガーはギーヴがのんびりと紅茶を淹れる様を眺めながら、彼の言葉の裏に隠された静かな怒りと信心を感じ取っていた。この人は、実は怒っているのだ。人間の思い上がった行動や、権力の横暴に怒っているのだ。

「そうだ、君に見せたいものがあるんだ。外は寒いから、毛布はそのまま被っていくといいよ」

二人が熱い紅茶を飲み終えた頃、沈黙がようやく破られた。ギーヴは暖炉の火をランプに移し、コルガーが立ち上がるのを待たずに扉へ向かった。

「外？」

コルガーは空のカップを床に置き、毛布を頭から被った姿でギーヴを追いかけた。ギーヴは建物の外へ出ると、林のような庭を真っすぐ横切り、礼拝堂の扉を開けた。夜明け前の闇は深く、ギーヴの持つランプの炎がゆらゆらと礼拝堂内部をわずかに照らす。彼は入口で片膝をついて頭を垂れると、静かに祈りを捧げた。

「この修道院へ来たのは初めてじゃないんだ」

ギーヴは立ち上がり、柔和な表情でコルガーを顧みた。

「前に来たのは六十年前」

「という和一七〇五年ですね。クラシックの大打進の年だ。ええと、猊下って、おいくつなでしたっけ？」

「こう見えて百九歳。でも、あれだね。言っちゃあ悪いけど、君も十八には見えないねえ」

「……失礼な」

コルガーは首に下げた小さな木の札を服の中から引き出した。彼の掌の半分ほどの札には姓名と生年月日、性別、所属教区が彫られ、ベルファスト市の紋章がスタンプされている。

これは四月から携帯を義務付けられた市民証で旅券も兼ねる。三月地震の際、命を落とした人々の身元が分からず、引き取り手のいない数千の遺体を共同墓地に墓標も建てずに埋葬せざるを得なかったことを教訓にエディンバラ教会が取り決めた。普段は首札と呼ばれることが多い。

最初はまるで首輪でもつけられたような不愉快な気分だったが、これさえあれば誰に対しても自分の身分を証明できるのでコルガーにとっては好都合だった。

『コルガー・バルトロメ、一七四七年生まれ、男』

間違いなく十八歳の男だろ、とばかりにコルガーは胸を張った。

「人は見かけに寄らないよねえ」

ギーヴの余計な一言を無視して、コルガーは視線を礼拝堂の奥に移した。目の前にあるのは何の装飾も無い祭壇と壁だ。漆喰で塗り固められた三方の壁にも、天井にも、彫刻のひとつも絵画の一片も

ない。資金不足ここに極まれりといった具合だ。

「それで、オレに見せたいものって何ですか？」

「あ、そうだった。座って、明かりを消すから」

ギーヴは一番後ろの列の長椅子に腰をおろした。コルガーが通路を挟んだ同じ列の椅子に座ると、ギーヴはランプの炎を吹き消した。自分の手さえ見えない闇に覆われ、コルガーは目を閉じた。木々の揺れる音が聞こえ、ふくろうの鳴き声がかすかに届く。五秒後、彼は両目を開いた。

「……ああ」

コルガーはつぶやいた。

それはまるで星座のようだった。四方の壁と天井と床がぼんやりと光を放っていた。よく見ると目の前に広がっているのは彩り鮮やかな絵画だった。建物の内側いっぱい描かれた、一枚の巨大な祭壇画だ。

「見せたいものってこれかあ」

コルガーは驚くでもなく、ぐるりと辺りを眺めまわした。

「君、やっぱりこの絵のこと知ってたんだ？」

「この絵は暗闇の中でしか見えないようになってるでしょう。それも、一度明りに照らして、それから真っ暗にすると数分間だけ光るようになってる。だからオレもこの修道院に住むようになってから気がついたんです」

背景の青空には豊かな白い雲が浮かび、小さな天使が何十人も舞

っている。祭壇の奥の、金色の太陽が輝く手前に男神が立っていて、彼は両腕で空を持ち上げるような格好をしている。隆起した二の腕の筋肉がたくましい。

「神は自然を支配し、人間に恵みと災いをもたらすもの。彼は太陽や月や星を持ち上げて空と大地を切り離し、この世界を創ったといわれている」

ギーヴは頭上に描かれた青空を仰いだ。エディンバラ教会が定めた神は一人だけだ。その他に神は居ないことになっている。だが、男神の周囲には、寄りそうようにたたずむ四人の女神の姿があった。四人ともそっくりの姿で、官能的なまでに美しかった。

「――雨の女神、雷の女神、虹の女神、そして極光の女神。エディンバラ教会によって存在を消されてしまったが、神には美しい妻がいた。彼女たちが復権したのはルネッサンス初期に古代遺跡を発掘し、独自に女神のことを調べあげた一部の聖職者のおかげだった。それ以降、女神の絵画や彫刻が好んで製作されたけど、それも六十年前にみんな処分されてしまった。識字率が今より低い時代に焚書なんてものがあつたくらいだから、それは徹底してたんだよ。だから、この絵も隠されていたんだ。聖なる術をかけて、弾圧から逃れるためにね」

「……逆行だ。そんなの、中世へ後退してるようなものじゃないですか」

こんなに美しい絵を人々の目から隠さなければならぬなんて悲しすぎる。コルガーは憤った。建築や美術に関心が高いだけに、少年の怒りは大きい。

暗黒の中世からルネッサンスへの移り変わりは、美術史を見ると一目瞭然だ。中世の時代、神や聖人は絵画の中で作り物のように描かれていた。表情は無く、体は薄っぺらで、棒のように直立しているか、人形のように椅子に座らされていた。頭からは後光が差し、背景は描かれないのが普通だった。ルネッサンス期に入ると、宗教画に変化が現れた。神々や聖人がまるで本物の人間のように、瑞々しく、艶めかしく描かれるようになったのだ。神々は服をはだけ、地べたに寝転び、喜怒哀楽を惜しげもなく表すようになった。後光は小さくなり、描かれないことさえあった。背景は写実的になり、リアリティや臨場感が増した。彼らがより身近に愛されていた証拠である。

六十年前、それが再び、中世の暗闇に飲み込まれてしまった。神々は人間らしさを取り上げられ、人々は捻じ曲げられた教えによって真実に目隠しされている。中世へ逆行している。

「神様や聖人に人間らしさを加えた、ルネッサンスの巨匠を侮辱してる」

怒りをこめ、つぶやいた少年の胸にあるのは偉大な芸術家たちのことだ。彼が敬愛する芸術家が、もし女神の彫刻を造っていたら？そしてそれが教会の手によって壊されていたら？

ギーヴは昔の記憶をさぐるように、ゆっくりと語った。

「人々が賢くなって、自由になって、教会は人心が経典から離れるのを恐れたんだ。神を高潔で唯一無二のものに仕立て上げ、いつも人々の心を惹きつけていられるように、女神たちを歴史から抹殺したのさ。俺の知る限り、彼女たちの絵が残されているのはここだけだ。だけどね、コルガー、エディンバラ教会が間違っているわけじ

やないんだよ。クラシックが間違っているわけでもない。信仰に間違いなんてないんだよ」

生き生きと輝く神々の姿を眺め、ギーヴは自分自身に言い聞かせるかのように言葉を紡いだ。

「あれから六十年経ったけど、俺はまだ諦めてないんだ。いつかエディンバラ教会とクラシックが共存できるようになる。いろいろな信仰や思想が共存できるようになる。まだまだ、しつこく、俺はそう信じてるんだよ」

ギーヴが語る間に、祭壇画の彩りはしだいに褪せていった。壁に浮かんでいた壮大で繊細な絵が消え、淡い光は跡かたもなく沈み、二人の前には暗闇と沈黙が再び舞い降りた。

「さっき、空を雲で覆ったのは極光の女神だって言いましたよね。それって、三月地震の原因も極光の女神にあるってことですか？そもそも極光の女神っていったい何者なんですか？本当に神様なんですか？だとしたらどうして人々を苦しめるようなことをするんですか？」

ギーヴが答えようとした時、礼拝堂の扉が開いた。

「ああ、ここにいたのね。心配したわ」

薄明かりが差し込み、ロウソクを手にしスター・アンジェラがやってきた。

「極光の女神とは、俺や君に不思議な力を授けてくれる張本人だ。今はマキシムと一緒にヒベルニアにいるはずだよ。三月地震やこの

異常気象を引き起こしたのは彼女たちだと俺は踏んでいる。こんなことができるのは極光の女神くらいだから」

歩み寄るアンジェラを目で追いながら、ギーヴは静かに言った。コルガーは椅子から立ち上がった。じっとしていられなかった。そして、家族や、妹のことを思う。頭が真っ白になる。目の前が、真っ暗になる。

「ばあちゃん、ギーヴ猊下」

コルガーは顔を上げ、大人びた表情で二人を見た。

「オレ、三月地震で家族を一度に亡くした時、天災だから仕方がないと思った。自然の力にはかないっこないから仕方がないって、ずっとずっと、今まで、自分自身に言い聞かせてきた。妹が酷い目に遭ったのも、仕方がないことだったんだって。でも、もしこのことに人為的な原因があるなら、もしこのことに犯人がいるなら、オレ、そいつにどうしても言ってやりたい。みんなが……妹が死ななければならなかったことの根っこに犯人がいるなら、一発ぶん殴ってやりたい。ギーヴ猊下、ヒベルニアへ行くなら、オレを連れて行ってください」

ためらいなく言い切り、コルガーは胸元で両手を握りしめた。その掌の下で、古ぼけた銀製の懐中時計が静かに時を刻んでいる。

「じゃなきゃ、いつまで経っても、オレは前を向けないような気がするんです」

家族の死が誰かのせいかもしれないなら、それを明らかにしたい。そうでないと、自分の弔いは終わらないような気がする。背中に負

った荷物を、地面に下ろせないような気がする。心の闇が晴らせない気がする。

「その犯人が自分の曾祖父かもしれないでも？」

ギーヴの問いにコルガーは迷わなかった。彼はうんと顔を上げ、ギーヴの緑色の双眸を見つめた。

「はい」

「そう」

しみりと短く応えたそれがギーヴの承諾のようだった。

「それじゃ、よろしくお願いしますね」

まさにアイルランド男児らしく、コルガーはさっきまでの沈痛な表情を顔から消し去り、ギーヴに右手を差し出しながらにっこりと笑った。ギーヴも彼に倣ってぎこちなく微笑む。

「猊下、私からも、この子をよろしくお願いします」

アンジェラはコルガーの肩を抱き、ギーヴを見上げた。  
男性陣は目を丸くした。

「え、ばあちゃんは行かないの？」

「え、君が行かなくてどうするの？」

老シスターは自嘲気味に目を伏せる。

「私は行けないわ。もうこの年だし、今さらなもの」



「何が年で、何が今さらなのさ？そんなの俺だってそうだし、君を連れて行くって、俺はあの時マキシムに約束したんだ！」

「ええ、でもね……私はマキシムに会うのが怖い。変わってしまった彼に会うことも、変わってしまった自分を彼の前にさらすことも、彼の築いた家庭を目の当たりにすることも怖い。彼の妻や子や孫が私のことをどう思うか、私が彼らをどう思うか、不安でたまらい。どうしても決心がつかない」

アンジェラはコルガーの肩に置いた手をぎゅっと握った。力を込め過ぎてしわだらけの手が一層白くなる。ギーヴはそれ以上追及しなかった。

「マキシムには、君は死んだと伝えるよ。その代りにコルガーを連れて来たと」

異常気象を引き起こした原因がマキシムにあるのなら、彼の怒りに触れるようなことは避けるべきだ。ギーヴとアンジェラが六十年もヨーロッパ大陸にとどまり続けたことにマキシムが怒っているのなら、アンジェラが死んだことにすれば少しは彼の怒りを鎮めることができるかもしれない。

ギーヴの理解を得て、アンジェラはほっと息をついた。

「ありがとう、猊下。さてと、二人とも朝食までもう一眠りするといいわ。コルガー、荷づくりは入念にするのよ。セーターを着て、靴下も厚手のものを履いて、懐炉も持っていきなさい、出かける前にちよっと暖炉で暖めるだけだから。手袋やマフラーも忘れずにね、冷えは女の敵ですもの」

アンジェラはコルガーの肩を抱いたまま礼拝堂の出口に向かって

歩き出す。今さらヒベルニアへ行けないと言うアンジェラのことも、それをあつさりと納得したギーヴのことも、コルガーには理解できなかった。

「ねえ、ばあちゃん、本当にいいの？」

少年のとまどいに気がつき、アンジェラは目を細めた。彼女はコルガーの髪にそっと頬ずりする。

「私の代わりにヒベルニアへ行ってちょうだい、コルガー。あなたはマキシムの血を引いているんだもの。あの人は、決して後ろを振り向かない人だった」

## 8. フライオーバー

アンジェラはコルガーの荷造りに手を出し口を出し、最終的にはそのほとんどを彼女がやることになった。コルガーは手際よく荷物を詰める曾祖母の傍らに座り、円筒形の革の鞆の中に防寒着や日用品が消えていく様を眺めていた。

「そういえば、私がなぜここに修道院を作ろうと思ったか、あなたに話したことなかったわね」

コルガーの部屋の窓は南向きだ。空は雲に覆われているものの、正午ともなれば淡い光が木の床やベッドを優しく照らす。

「うん、知らない」

出発は夜だ。暗闇に紛れてベルファストを脱出し、バンゴールという小さな港町に停泊している船を目指すとギーヴは言った。別れを惜しむ時間を与えられたアンジェラとコルガーは、どちらからともなくできるだけ一緒に過ごしている。今生の別れではないにしろ、どちらかが街を出るということはこれまで一度もなかったのだ。

「私は嫁いでからたった一度だけ、家出したことがあったの。マキシムのそばにるのが辛くなってね。当時、私やマキシムやギーヴ猊下はフランスのオンフルール村の林檎修道院というところで暮らしていたのだけれど、そこを一人で飛び出して、海を渡ってベルファストへ来たの。その頃、この町で大きな帆船を造っていてね、目でいいから見てみたかったのよね」

「どうしてマキシムのそばにいるのが辛くなっちゃったの？嫌いに

なったってこと？」

アンジェラは肩をすくめた。

「今ではこのとおり真っ白だけど、昔は私の髪もあなたみたいな茶色だったのよ。それがあ朝、髪を梳いていたら白髪を一本見つけたの。怖くなったわ。マキシムは永遠に歳を取らないけれど、私はどんどん年老いていくんだって。そう思ったら居ても立っていられなくなってしまうたのよ。彼を愛してたから」

コルガーはぽかんとした表情で瞬きした。異性に寄せる愛情について、彼はまだ無理解だ。そういうものなのかと感心するばかりのコルガーにアンジェラは微笑む。

「ベルファストへやってきて、どこか教会で休ませてもらおうと街を歩いていたら、一人の修道女に出会ったの。彼女は私の母親くらいの年齢で、何も聞かずに私を自分の修道院へ連れて行くと、十数人の修道女たちを紹介してくれた。言葉は半分も通じなかったけれど、そこに暮らす修道女たちが皆、歳老いたクラシックだということとすぐに分かったわ。誰もが親切で、何かの縁だからいつまでもここにいるといいと言われ、私も半分その気になっていた。その修道院には後継者になるような若い修道女がいなかったから」

きゅうつと鞆の口の紐をアンジェラが引いた。円筒形の鞆の口が絞られ、紐が持ち手となった。試しに持ち上げて担いでみるとコルガーの背中にぴったり収まったが、少し紐が短いようだった。

「その一方で、私はマキシムが私を捜しに来てくれることを願っていた。捜し当てられるような場所じゃないことは分かっていたけれど、それでも彼が迎えに来てくれたら、私はすべてを諦めて彼と一

緒にしようと思ったのよ。最後の最後まで一緒にしようね」

アンジェラは鞆をコルガーから受け取り、紐の長さを調整する。コルガーは机の上からスケッチブックを取り、これも入るかなと首を傾げる。

「そして、彼女たちと暮らし始めて二週間後、とうとう迎えが来たの」

「へえ、マキシムもここに来たことあるんだ」

コルガーはスケッチブックを鞆に押し込みながら不真面目に話を聞いていた。どうせ最後は迎えにきたマキシムと仲直りしてハッピーエンドに決まっている。

「いいえ。私を迎えに来たのはマキシムじゃなかったのよ」

少年の心中を察したのか、アンジェラはくすりと笑った。コルガーは目を瞬き、それから信じられないという顔をした。そうだ、ギーヴは六十年前にここへ来たことがあると言っていた。

「でも、あのギーヴ猊下がどうやって、ばあちゃんを見つけ出したの?」

ギーヴはお世辞にも勘が鋭いようには見えない。

「私も真っ先に聞いたわ。でも誤魔化された。マキシムが大慌てで私の実家へ旅立った後、何となく西のような気がしてアイルランドへやってきたんですって」

「それだけで修道院まで特定できないよ」

「ええ。だから私は、ギーヴ猊下には、まだまだ秘密があるんだと

思うのよ。私にさえ明かしてくれない秘密の力が」

アンジェラは楽しそうに笑い、コルガーに鞆を手渡した。今度は紐の長さも丁度良いようだ。

「あの人はいつでもマキシムの後ろにいた。修道院で暮らしている時も、教会へ反旗を翻した時も、いつも自分にはマキシムのオマケですって顔をした。前へ出ていく性格じゃなかったと言えばそれまでのかもしれないけれど、今はそうじゃないような気がするの。彼は自分と兄を対のように見せ、そればかりか兄の方が優れているように見せていたけれど、本当は逆なのかもしれない。あの兄弟は、ギーヴ・バルトロメという異能の男と、ちょっと変わったその兄と言った方が正しいのかもしれないわ」

不老の男を『ちょっと変わった』と言ってしまうのは彼女だからだろう。

「ともかく、家出した私はギーヴ猊下に連れられて林檎修道院へ帰った。するとすぐに教会のクラシック弾圧が激しくなって、私たちは教会に抗議するべくエディンバラへ向けて行進を始めたの。そのどさくさに紛れてマキシムとはすぐに仲直りしたわ。彼の子を身ごもっていると分かったのもその頃で、今から思えば私の人生が一番輝いていた時だった。そして大行進が終わり、マキシムがヒベルニアへ旅立ち、ギーヴ猊下がエディンバラへ向かった後、私は怪我人や病人を収容できる安全な場所を探したの。その時、思い出したのがこの修道院だった。そして、この修道院を手放せずに私はまだここにいるというわけ」

ウイスキー修道院には後ろ盾となる有力者や資金源となる貴族のスポンサーがない。必要なものは自給自足し、院内で収穫した農

作物や手作りの酒やジャムや菓子を売り、教会の目を盗んで彼女は細々とクラシックの教えを守ってきたのだ。

「ついでに聞いてもいい？」

コルガーはふと思いついて訊ねた。

「なあに」

「マキシムが迎えに来てくれたら、最後の最後まで一緒にいようと思ったって、それって、ギーヴ猊下の場合も適用されたのかなあつて」

アンジェラは思いがけない質問に心底びっくりしたようだった。

彼女は何度か瞳を閉じ、今まで考えてもみなかったわ、と微笑んだ。

「でも、彼が迎えに来てくれた時、とてもとても嬉しかったのは本当よ」

彼女の唇からこぼれた声は驚くほど愛情に満ちていて、自分ではいけない質問をしてしまったのではないかとコルガーは緊張した。曾祖母の本当の気持ちに気づいてしまうことは、誰に対してだか分らない後ろめたさがある。彼の心を読んだのか、アンジェラはうふふとおかしそうに笑った。

「それでも、私が愛していたのはマキシムだけよ」

昼寝から目覚めてギーヴが厨房に顔を出すと、夕飯の支度に取り

掛かっていた修道女たちが一斉に振り向いた。（見た目が）若くて顔の良い男が珍しいので、神々の花嫁たちも色めき立つのである。

「まあ、ギーヴ猊下、お目覚めですのね！」

「うん、おはよう。修道院の戒律を破って世話になっちゃって、悪いね」

これまでにウイスキー修道院に滞在を許された健康な男はギーヴ・バルトロメくらいであろう。女子修道院は日没とともに男子禁制となる。

「そのようなこと、エディンバラ名誉司教猊下のなさることですもの！」

「それもそうだよね」

可憐な野の花のような修道女たちに囲まれてギーヴが鼻の下を伸ばしていると、彼女たちの黄色い声を聞きつけたアンジェラが釘を刺しに来た。

「開き直ってどうするんです。本来なら、司教だろうと修道士だろうと、日没以降、老病人以外の殿方の滞在は許されていないんですよ」

「いいじゃない、俺は老人だよ。コルガーは？」

ギーヴがピクルスをつまみ食いしながら応じると、老シスターは菓草の入った籠をどんとテーブルに置いて笑った。

「一緒にお昼寝でもしましょうかって誘ったら、すっとなで逃げ行ったわ」

「そりゃね、もう十八歳でしょ、彼」



「……」

アンジェラは窓の外へ視線を転じ、暮れてゆく外の景色を一瞥した。

「ねえ、猊下、あなたは世間のことに疎い方だし、あの子もあなたより世慣れているとはいえ、長い旅に出るのは初めてのことも道中くれぐれも気を付けてくださいね」

「分かってるよ。どうしたのさ」

「心配なのよ、あなたのこともあの子のことも」

アンジェラはそう言い残し、上の空の様子で厨房を出て行った。

「コルガーは多分、墓地にいますよ」

修道女たちから果樹園の奥に墓地があることを教えられ、ギーヴはコルガーを探しに行くことにした。火災のせいで焼け焦げた果樹園を抜けて墓地に着くと、案の定、彼は小さな募石の前に座り込んでいた。ギーヴがおもむろに近づいていくとコルガーはすぐに気が付き顔を上げた。彼の表情はひどく暗く、ギーヴはつられて悲しい気持ちになる。

「家族のお墓？」

「妹です」

短く答え、コルガーは募石を撫でた。覗きこむギーヴに、少年は皮肉っぽく言った。

「これ、彫ったのオレなんです。三月地震の直後は混乱してたから、適当に拾ってきた石を削って墓標にしたんですよ」

石工顔負けの技巧をこらした墓石を眺め、ギーヴは感心した。

「君って本当に芸術家なんだねえ」

マキシムもそうだった。そう思いながらギーヴが微笑んだ時、修道院の門の鐘が鳴った。庭で日直の修道女が「ズボンは出て行け」と唱え始める。男子禁制となる日没の合図だ。

「猊下、行きましょう」

二人が居住棟に戻ると、扉の前でアンジェラが待っていた。ギーヴは自分の荷物を取りに客室へ戻り、コルガーはアンジェラに荷物を背負わされ、防寒着を着こまされた。

「ばあちゃん、みんなに宜しく言っといてね」

「あの子たちも、あなたに宜しくって。これ」

アンジェラが手渡したのは弁当の包みだった。

コルガーは洗濯物を取り込んでいる修道女たちを見た。家族を失い、打ちひしがれていた彼に彼女たちはやすらぎと日常をくれた。彼女たちはどんなに口やかましく小言を言っても、コルガーが決して触れてほしくない話題については一言も口にしなかった。彼女たちはコルガーのことを静かに温かく、絶えず見守ってくれていた。

コルガーは無理やり笑顔を作り、大きくうなずいた。少しでも力を抜けば、涙がこぼれてしまいそうだった。

「コルガー」

「ばあちゃん」

コルガーはシスター・アンジェラに向き直り、彼女のしわだらけの両手を握った。老シスターは渾身の力で曾孫を抱擁した。

「身体を大事にしなさい。あなたは――女の子なんだから」

耳元で囁いたアンジェラに、コルガーは頷いた。

「それ、猊下には黙っててね」

「あら、どうして？」

「だってあの人、オレのことばあちゃんの若い頃にそっくりだって、うっとりしながら言うんだぜ。二人旅で変な気、起こされても困るし」

「……それもそうね」

何故かしみじみと頷いて笑い、アンジェラはコルガーの髪を撫でた。

「愛してるわ、エド。いつも、あなたの上に光が差しますように」

「……オレも祈ってるよ、いつも」

カンカンカン！しつこく鳴り響く鐘の音に、二人は体を離れた。そこへギーヴが戻ってくる。彼にしては機敏な動きだった。

「行こうか、コルガー」

「はい！」

シスター・アンジェラと別れのキスを交わし、コルガーは踵を返した。心は決まっている。揺るぎようがないほど決まっている。

駆け出したコルガーの背中に、修道女たちの惜別の言葉がぶつかったが振り返らなかった。待っていてくれる人がいるというのは良いものだ。走りながら勝気に笑い、彼は――彼女は思った。

「猊下、こっちから出ましょう」

修道院の広い庭を走りながら、二人は視線を交わした。前方には高い塀がそびえ、その向こうには深い堀がある。彼らはうなずきあって無邪気に笑い、同時に冬草を蹴った。二人とも、いい踏切だった。

そしてそのとき、ウイスキー修道院の塀を飛び越えた者がいた。

## 1. 民話学者の冒険（前書き）

第二章のはじまり。

おはなしはスコットランドを旅する民話学者と書籍商へ。

## 1. 民話学者の冒険

ヨイク・アールトは初めて旅立つとき、父親にこう諭された。

「ヨイク、世の中には女の仕事というものがある。それを放棄しては世の中が成り立たないのだ。お前の好きな民話だってそうだ。妖精が妖精の仕事をしなくなったら困るだろう。誰が子供をさらうんだ」

ヨイクは鼻にもかけなかった。

「お父さん、人類の半数は女よ。女の仕事は彼らに任せて、私は私の、私にしかできない仕事をするわ。私ほどの民話学者は、人類の中にも二人とないんだから」

その後、彼女は自分の言ったことの正しさを証明した。一年かけて北欧諸国を周り、知られざる民間伝承を集めて本にまとめたのだ。『北欧伝承余話』は二カ国語に翻訳され、イギリスやフランスを中心にベストセラーになった。

だが、二度目の冒険に出るとき、彼女は婚約者にこう懇願された。

「君は女にしてはずいぶん自由に生きてきたんだ、もう充分だろう。お願いだから、危険な旅も難しい研究も今すぐ全部やめて、僕と結婚してほしい。君を必ず幸せにすると約束するから」

これにはさすがの才女も弱りはてた。彼は子供のころからの親友だったし、彼ならば約束通りヨイクを幸せにしてくれるだろうと思う。しかも二人とも結婚適齢期の十八歳である。だが、ヨイクは自

分が望むものが何か、よく分かっていた。彼もそうならいいのに。ヨイクは幼馴染みの青年を憐れむように見ると、言葉を選んでこう答えた。

「あなたが私を待てないというなら永遠にさよならよ。私にはまだ、やりたいことがたくさんあるの。見たいものも、知りたいことも、触りたいものも山のようにある。匂いをかいだり、肌で感じたり、自分の耳で聞いたり、そういうことをするために私は旅に出るのよ」

「僕が君を待てないならさよならだって？僕はいつだって君を待ってた！この前だって、半年で戻ると言って旅立った君を一年も待ち続けたよ！君が危ない目にあっているかもしれない、病気になっっているかもしれない、大怪我をしているかもしれない、もしかしたら命を落としたのかもしれない、僕はそんな不安を抱えて、来る日も来る日も君を待っていた！僕にもう一度、あの地獄のような生活をしろというのか！君には分からないかもしれないが、あの時、僕は狂い死んでしまいそうだったんだよ！」

婚約者の熱い眼差しを真正面から受け止め、ヨイクは初めて自分の心が揺れ動くのを感じた。それまでは罪悪感を覚えることはあっても出発を迷ったことなど一度もなかったというのに。いつも穏やかな彼がこんな風に感情を露にしたのも初めてのことだった。どきどきと高鳴る胸を拳で抑え、ヨイクは迷いを振り払った。

「心配かけたことは謝るわ、ごめんなさい。でも今旅に出なければ、きっと私は後悔する。あなたと幸せになっても後悔する。どんなに不幸になったっていい、誰に馬鹿にされてもいい、私は私が生きる意味と喜びが欲しいわ。一生それを追い続けるわ、たとえ今あなたを失っても」

ヨイクは自分が震えているのではないかと思った。もしかしたら、自分は道を間違えようとしているのかもしれない。もしかしたら、この最後通牒を後々悔むことになるかもしれない。これは身勝手な自分をずっと待ち続けてくれた愛情深い彼へ恩を仇で返すような行為だ。己のあまりの傲慢さに改めて気がつき、ヨイクの良心は痛んだ。だが、腹から出した声はヨイク自身がびっくりするほど冷静だった。

「明朝、村を出るわ。今度の旅は特別な旅で、恐らく、私はエディンバラ教会に追われる身になる。それでも私の帰りを待っていてくれるか、私と別れるか。出港までにあなたの答えを聞かせて」

翌朝、彼は港へ来なかった。代りに、彼の友人が彼からの手紙を持って現れた。ヨイクはその手紙の封をまだ開けていない。

峻険な地形、過酷な自然。それがスコットランドの代名詞だ。町から町への移動は困難で、直線距離ではそう遠くない隣町へ、山を越え、川を渡り、谷や湖を迂回してようやくたどり着くということがザラにある。

だから、エディンバラ近郊の深い森の中を三日も歩き続け、へとへtoになってリラ城にたどり着いた人物がヤケクソになってしまっ  
ていても仕方がない。降り積もった雪が辺り一面をほのかに白く照らす夕闇に、陽気なバイオリンの音が響き渡ったのはその時だ。

「ジャグリングをします」

のたまったのは背の高い赤毛の男だった。



「困ります」

答えたのは城の執事だ。

「始めます」

赤毛の男は仏頂面で言うと、持っていたバイオリンを地面に置いてジャグリングを始めた。密かな宴会芸として月に数回披露しているだけあって手慣れたものだ。

「突然困ります、お引き取りを！」

「まあまあそう言わず、見て下さい、あらよっと」

「え、衛兵！」

「まあまあまああ」

その押し問答はリラ城というロマンチックな城の正面入口で繰り広げられている。強引にジャグリングを始めた赤毛の男のもとへ衛兵が集まり、メイドが集まり、しまいには城主まで現れた。それを確認してから、立派な庭園の木の下で動き始めた人影があった。少女から大人に変わる年頃の女性だ。

俊敏で身軽な彼女はあつという間に北の別塔にたどり着く。見上げると最上階の窓の隙間から橙色の明かりが漏れている。彼女はそ  
の窓に向って、慣れた手つきで縄梯子の先端を放り投げる。縄を投  
げるのは子供のころから大得意だ。おかげで民話学者ヨイク・ア  
ルトが捕まえたトナカイの数は父より多い。彼女はノルウェー生ま  
れのサーメ人で、自称純真無垢な十八歳の乙女だ。

「ちよろいもんだわ」

縄梯子がかかると、ヨイクはすいすいと梯子を登り、あつという間に塔の最上階にたどり着いた。木の窓をそっと開けて中を覗くと、暖かな暖炉のそばに座り込んだ少女が、眼を丸くしてヨイクを顧みた。

「こんばんは」

ヨイクは寒さでこわばった頬をむりやり動かしにっこりと笑う。悲鳴を上げられたりしては面倒だから、まずは警戒を解いてもらわなくては。窓枠に両肘をつき、民話学者は被っていた赤い帽子を取った。

「びっくりさせてごめんなさいね。はじめまして、私はヨイク・アールト。民話学者よ」

ヨイクが言うと、少女はその場に立ち上がった。彼女の歳は十四五歳に見えた。痩せていて手足が長く、まるで少年のような体形だったが、腰まで届く明るい茶色の髪や愛らしい目鼻立ちが彼女を女性らしく見せており、足首が隠れる丈の白いドレスが妖精のような雰囲気醸し出している。

「とりあえず中に入れてくれると嬉しいんだけど、どうかしら」

少女がこっくりと頷き、ヨイクはひょいと窓枠を飛び越えた。ブーツを履いた両足で軽やかに着地する。暖炉に燃えさかる炎のおかげで室内は暖かかった。部屋の中をぐるりと見渡すと、大きな寝台や壁の絵画、マントルピースなどを始めとして、はっきり言ってギーヴ・バルトロメの幽閉されていた部屋より格段に豪華である。ヨイクは複雑な心境で縄梯子を回収した。

「わたし、ヒリール・バルトロメ。ヒベルニア王マキシムの孫だよ」

言いながら、ヒリールは大きな茶色の瞳で珍しそうにヨイクを見つめた。ヨイクの服装は生まれ故郷の民族衣装だ。大きく波打つ長い金色の髪に青い瞳の民話学者は、藍色の膝丈ワンピースの上にトナカイ革の上着とブーツと鞆を身につけている。ワンピースの下に履いた細身のパンツや大小の布袋を付けた腰のベルトもトナカイ革だ。ワンピースには赤色の糸で独特の刺繍がほどこされていて、彼女が手に持っている耳まで覆う帽子もその赤い糸で頑丈に織られている。斜め掛けの小ぶりの鞆からは地図やメモの束が盛大にはみ出していて、これもやはりトナカイの皮でつくられたものだ。

「ヒリール……アイルランド神話の海神の名前ね。ギーヴ猊下から聞いてると思うけど、私は彼に頼まれて、あなたを迎えに来たの、すぐに支度して欲しいんだけど構わないかしら？」

少女は諸手をあげて歓声を上げた。

「あなたがギーヴおじいさまの言ってた人ね！良かった！これでヒベルニアへ帰れるんだ！」

嬉し泣きしそうな勢いの少女にヨイクは思わず笑ってしまった。

「話が早くて助かるわ。今、正面玄関で仲間が城の人たちの気を引いているから、今のうちに逃げましょう」

「わたし、あなたが来てくれるのをずっと待ってたの！すぐに支度する！荷作りもだいたいできてるから本当にすぐだよ！」

ヒリールが狭い部屋の中を行ったり来たりしながら支度するのを、

ヨイクはぼんやりと見ていた。本当はヒベルニアについて質問したり、自分や相方のことを話すべきなのだが、少女の発した「あなたをずっと待っていた」という言葉に、婚約者のことをつい思い出してしまったのだ。

ヨイクは斜め掛けの鞆を開け、婚約者からの手紙が入っていることを確かめてからヒリールをちらりと見た。ヒベルニア王の孫娘は興奮しているのか独り言を言いながら忙しく身支度しているが、その傍らにはまとまりそうにない私物がごろごろと転がっている。リラ城の主は彼女にずいぶん贈り物をしたようだ。もうしばらく彼女を待つことになるなら。ヨイクは婚約者からの手紙を鞆から取り出した。

『ヨイクへ。カームスより』

封筒に踊るその文字だけは、今まで何度も読み返してきた。ヨイクは思い切って封を切った。中からは二つ折にされた一枚の紙が現れる。

一枚。ヨイクは手を止めた。たった一枚の手紙で、彼は私との縁を切ったのだろうか。いや、まだ別れの手紙と決まったわけではない。だが、ヨイクの出発する朝、彼が港に現れなかったことを思い出すと、自然と手紙の内容は想像できた。

「ごめんなさい、お待たせ、ヨイク」

支度を終えたヒリールに声をかけられ、ヨイクは我に返った。読んでいない手紙を鞆にしまい込み、ヨイクは暖炉の火に灰をかけるのを手伝った。ヒリールはミルク色の毛皮のコートを羽織り、裏地に毛皮を張った温かそうなブーツを履いている。手には何も持って

いない。

「あら、荷物は？着替えとか、金目のものはあって困らないわよ」  
「うん、そういうの、全部身につけたから、平気」

ぽんぽんとミルク色のコートを叩き、ヒリールは無邪気に笑った。  
なるほど、毛皮のコートの下に持ち物を着ているということか。そ  
ういえばコートのポケットから飛び出しているのはヘアブラシの柄  
のようだった。

ヨイクは窓に近づき、鞆にくくりつけていた長い縄をほどいて城  
壁の向こうの大木に投げた。石のついた縄の先端はぐるぐると太い  
枝に巻きつく。こちら側の先端を豪華な寝台の足に結ぶと、夜の闇  
の中に一本の縄がピンと張った。ヨイクは窓枠に立ち、への字型の  
金属を取り出すと青い目を輝かせて言った。

「さて、忘れものはないわね？」

知らず知らずのうちにわくわくと心を躍らせている自分がいる。  
これだから冒険はやめられないのだ。ヨイクは悪びれもせずにな  
そう思うと、脳裏にちらつく婚約者の面影を丸めて暖炉に投げ込んだ。

すべてが終わるまで、彼のことは考えない、そうするわ。

「うん！」

緊張した面持ちで頷いたヒリールにヨイクは自分の赤い帽子を被  
せた。

「しっかり私に捕まって、行くわよ！」

張りつめた縄への字型の金属をかけ、皮手袋をした手でその両端をつかむと、ヨイクは思い切り窓枠を蹴った。ヨイクの身体に後ろから抱きつくヒリールが押し殺した悲鳴を上げる。

「ヨイクううう！」

二人の少女の体が闇に踊る。ヨイクの持つ金属が縄を滑り、それにぶら下がった二人は冷たい夜の空気を突っ切って緩やかに下降していく。ヒリールがヨイクの背中に顔を押し付けると、民話学者は心底楽しそうに白い歯を見せて笑った。

「目を開けないと後悔するわよ！」

雲の向こうに薄らと月が光る。その月明かりに、降り積もった雪や真っ白な深い森やリラ城が浮かび上がる。

ヨイクは思う。

夜の闇は優しい。民話や物語が語られるのは、こんな夜が、ふさわしい。

## 2. ロンドンの書籍商

リラ城は女性的な城と言われている。いくつかの灰色の円塔の上に三角形の薄青いトンがり屋根がのり、窓が小さく、壁が厚い、典型的な中世の城だ。この城は約三百年前、エディンバラ王の愛妾の城として建てられた。男女の愛憎と欲望と人血にまみれた数々のエピソードを持つ城だが、建物自体は小じんまりとして可愛らしい。

「ようし、うまくいったな」

その城壁の外側で、北の別塔から縄をつたって滑り降りて来る人影を満足げに眺める男がいた。神秘的な月光を背に、少女たちの影が太い枝のひとつにたどりつくとき、彼はその大木に向って走り出した。

森の中は暗く、足元がおぼつかなかったが、明かりをつけるわけにはいかない。ユアン・リプトンは木の根や切り株を飛び越え、行く手を阻む小枝を掻き分けた。一面に積もる雪がほのかに明るく、そのおかげで怪我をすることはなさそうだ。

「ユアン、ここよ、ここ！」

聞き慣れた声が頭上から降ってきたところでユアンは足を止めた。木の上にヨイクの姿を見つけ、ユアンはほっと息をついた。ヨイクの傍らには髪の長い痩せた少女がいた。この派手な脱出劇のせいか青冷めた顔は、どこことなくギーヴ・バルトロメに似ている。

「救出作戦大成功よ！やっぱ私が救出役、ユアンがおとりで正解だったじゃない！」

ヨイクが腰に両手をあててふんぞり返ると、ユアンは深刻な顔をつくって応じる。

「威張ってないで降りて来い。足を滑らせても、あんたのその重さに耐えられる自信は……」

「無礼者」

振り下ろす拳とともにヨイクが枝から飛び降りた。鉄拳を受けたユアンは頭を抱えてその場にうずくまる。サーメ人の女は強い。ヨイクは枝に残してきてしまったヒリールを見上げた。可憐な少女は、枝にしがみついたまま声も出せない様子だった。

「ヒリール、これは私の仲間のユアン・リプトン。ユアン、ヒベルニア王の孫娘のヒリール・バルトロメよ」

「よろしく。無事でよかった」

ユアンが微笑みを向けるとヒリールの頬がほんのりと朱に染まった。

「ヒリール、ちょっと高いけど思い切って飛んじゃうのが一番よ。雪が積もってるから怪我する心配もないわ」

無茶を言う。相手はお姫様だ。おてんば者の民話学者と同じというわけにはいかないだろう。躊躇するヒリールを見かねて、ユアンは木の幹に近づき両手を広げた。

「大丈夫だ、頭から落ちてこない限り受け止める」

「ヒリール、安心して。無礼で無愛想だけど、どさくさに紛れてお尻を触ったりしない程度には紳士な男よ」



「……誉めてるのか？」

ヒリールは大きく息を吸い込むと、眼をつぶって飛び降りた。落ちてくる細い身体をユアンが両腕で抱き止める。少女の両足を雪の上にそっと下ろし、ユアンは少女の表情をうかがった。ゆっくりと開かれたヒリールの目はとろんしていて夢見心地のようだ。

「あ、ありがとう、ユアン」

ギーヴ・バルトロメの血縁者なら少々ぼんやりしていても不思議はない。何故か顔をひきつらせているヨイクに一瞥をくれてからユアンはリラ城を見た。

「どういたしまして。さあ、さっさと逃げるぞ。まだ騒ぎにはなっていないようだが、君が消えたことがばれるのは時間の問題だ」

ヒリールがいなくなったことが分かったら、リラ城の城主は血眼になって彼女を探すだろう。ヒベルニアから流れ着き、エディンバラ教会に保護された彼女は、リラ城の城主にとって教会からの大事な預かりもののなのである。事態がエディンバラ教会に伝われば、教会は教会で追手を差し向けるはずだ。それまでに何とかエディンバラ近郊から逃れなければ。

三人は頷きあってその場を離れた。

街道に出て馬車に乗るべく、三人は夜を徹して森の中を歩いた。ところが思った以上に雪が深く、雪道を歩くことに慣れないヒリー

ルが遅れたため、予定していた行程の半分ほどで夜が明けてしまった。ヨイクやユアンの疲労もピークに達しており、彼らは森の中で見つけた小屋で休むことにした。

自分が足手まといになったことを詫びるヒリールに、ヨイクは焦っても仕方がないわと言って笑った。追手から逃れるために少しでも距離を稼ぎたい気持ちは山々だが無理をしてヒリールが倒れてしまつては大変だと。

追手もまだここまでは来ないだろうと言って火をおこし、ユアンは暖炉で野菜スープを作り、凍ったパンを火のそばに並べて温めた。ヨイクはユアンの傍らに座り、口を出すでもなくうとうとまどろんでいる。

この二人はどういう関係なのだろう。ヒリールは小さなテーブルにつき、寄り添う二人を観察していたが、やがて視線はユアンだけに向いた。後方に撫でつけられた長めの髪は赤く、髪よりもワントーン暗い赤茶色の上着とパンツをまとい、黒いブーツを履いている。茶色の目は切れ長で、薄い唇は冷たい印象を与えるが、優しく響く彼の低い声は聴いていてとても気持ちがいい。こんなに素敵な人に出会ったことはないわとヒリールは頬を染めた。

「さあ、召し上がれ。――ほら、あんたも起きろ」

ユアンは出来立てのスープの皿をヒリールに手渡し、暖炉の前で膝を抱えて居眠りするヨイクを揺さぶった。ヨイクは大きく伸びをしながらヒリールの向かいに腰を下ろし、手を合わせてからパンとスープを食べ始めた。椅子が二脚しかないため、ユアンは薪用の丸太に座った。

「神々の恵みに」

ヒリールは手を組んでつぶやくとスープを口に運んだ。それはヒリールにとって人生で何度目かの粗末なもてなしだった。最初に経験したのはスコットランド北部の漁村での食事だ。ヒベルニア島の沖で嵐に逢い、船から投げ出されて流れ着いたのがその村だった。数日後にエディンバラ教会が迎えに来てからは淑女としての待遇を受けたが、あの漁村で人々から親切にしてもらったときは忘れられないいい思い出だった。

「私がいなくなったこと、そろそろリラ城の人たちも気が付く頃かな」

毎朝、ヒリールを起こして身支度を手伝ってくれたのは侍女のローゼリットだった。真面目な彼女だ、ヒリールの不在を知ったらすぐに城主へ報告するだろう。もし彼らに捕まれば、エディンバラ教会はヒリールをもっと厳重に幽閉し、ヨイクとユアンは何らかの処罰を受けることになるに違いない。

「大丈夫よ。私たちが絶対に守ってあげる。あなたを必ずヒベルニアへ送っていくわ」

ヨイクが朗らかに大きく頷いたので、ヒリールの心は少しだけ軽くなった。リラ城の侍女たちは優しかったが、こんな風に誰かと親しく話をするのは久しぶりだった。

「ありがとう」

「どういたしまして。ねえ、ヒリール。疲れてるところ本っ当に悪いんだけど、少しでも聞かせて欲しいの、ヒベルニアのこと」

ヒリールは温まった心が急速に冷えるのを感じた。

「――気象兵器なんてないよ」

唇からこぼれ出たヒリールの言葉は氷のようだった。ヒリールはヨイクとユアンがどんな反応を示すかじっと窺った。ところが、ヨイクは喜びと興奮が極まったような目でヒリールの両肩をつかんだ。

「そんなのどうでもいいわ！私が知りたいのはヒベルニアに通じる海流のこととか！一角獣湾のこととか！人魚の入り江のこととか！火の山の洞窟のこととか！花砂漠の嵐のこととか！」

勢いに任せてまくしたてながら、ヨイクは鞆の中から筆記用具を取り出した。ヒリールは彼らを警戒していた自分が恥ずかしくなり、同時に嬉しくなって思わず腰を浮かした。

「な、なんでそんなにヒベルニアのことを知ってるの？今までに話した人たちの誰もそこまで知らなかったのに」

「私はヒベルニアの研究をしてるの。エディンバラ教会の付け焼刃的知識なんて、たかが知れてるでしょうね」

暖炉にかけていた鍋が沸騰した。ユアンが紅茶のポットに湯を注ぐ。

「ヒリール、あなた、船が難破してヒベルニアから流されて来たのよねえ。私は、ヒベルニアへ続く海流は一方通行だって聞いてるんだけど、違うの？」

「わたしも一方通行だって聞いてたよ。でも、わたしはこうしてスコットランドへ流れ着いたし、どういうわけか、ときどきヒベルニ

アの方角からの漂着物が海岸に打ち上げられることがあるって、わたしを助けてくれた漁村の人が言ってた。マキシムおじいさまなら、その理由を知っているかもしれない」

二人のやり取りに、ユアンが紅茶を入れる手を止めた。凶悪な顔でヨイクを睨んでいる。

「ちょっと待て、その民話学者」

ヨイクはうるさげにユアンを振り向いた。

「何よ、ユアン。あたしの学者生命がかかった大事な話をしてるときに」

「口を挟まずにいられるか！ヒベルニアへ続く海流が一方通行だなんて聞いてないぞ！」

「誰にも言っていないもん。そんなこと言ったら、誰もヒベルニアへ行きたがらないでしょ？」

「当然だ！あんたはともかく、おれはヒベルニアに骨を埋めるなんて御免だからな！」

「やあね、私だって嫌よ。まあ何とかなるでしょ、現にヒリールはこうしてヒベルニアからこっちへやって来てるわけだし」

偉そうにふんぞり返るヨイクとぷりぷりと怒るユアンを交互に見ながら、ヒリールは唇を尖らせた。

「ねえ、ヨイクとユアンは夫婦？」

「はあ？そんなわけないじゃない。名前だって違うでしょ、私はヨイク・アールト、彼はユアン・リプトン」

「じゃあ、恋人同士？」

「はあ？」

「違うの？」

「当然！第一、私には婚約者が……」

ヨイクは言いかけて口ごもり、それから忌々しげに頭を振った。すると彼女の波打つ金髪がふわふわと揺れ、ヒリールの興味はヨイクの髪形に向いた。ヒリールの髪は真っ直ぐなので、ヨイクのようにウェーブのかかった髪が少し羨ましかった。金色というのも魅力的だ。祖父マキシムが金髪だからヒリールがそれを受け継いでいてもおかしくないのだが、残念ながら彼女の髪は明るい茶色である。

「おれたちはビジネスパートナーだ」

嘆息と共に言ったのはユアンだった。ヒリールは聞き慣れない言葉に首をかしげた。

「ビジネスパートナー？」

「彼女は民話学者で、おれは書籍商、つまり本屋だ。おれは彼女の旅と研究に出資、つまり金を出していて、彼女の本をロンドンで印刷したり、世界中の書店に売りさばいたりして利益を得ている。そして利益の一部で、彼女の次の旅と研究に出資する、その繰り返しだな」

「そういうこと。私はお金の計算とか、製本とか、書店との交渉とかできないからね。面倒なことは全部ユアンにやってもらってるの」

ヨイクとユアンを交互に眺め、ヒリールは腑に落ちないものを感じた。彼らは合理的な協力者というだけではないような気がするのだ。

ヒリールがうっかり欠伸をすると、ヨイクが立ち上がって小屋の

隅に毛布を敷いてくれた。彼女に促されるまま眠りに落ちていく途中で、ヒリールは久しぶりにいい夢が見られそうだと思った。

### 3. ヒベルニアの姫

ヨイクは正午頃に目を覚ました。ぐずぐずと鼻をすする音が聞こえたのだ。身体を横たえたまま耳を済ませていると、誰かが声を殺して泣いているようだった。ヨイクは起き上がった。

「ヒリール？」

隣で寝ているのはヒベルニアのお姫様だ。細い体を粗末な毛布で覆っている。

「どうしたの？」

ヨイクは毛布を身体に巻きつけて立ち上がり、暖炉に薪をくべて火力を強めた。

「平気。大丈夫。夢を見ただけ」

少女は毛布を被ったまま首を振った。声が震えている。ヨイクは沈黙で応じ、半分ほど水の入った薬缶を暖炉の火にかけた。彼女は窓辺に立ち、テーブルの上のポットへ茶葉を入れる。カップとポットを火のそばへ置いて温めておくことはユアンから教わった。

「ねえ、ヒリールは私達がヒベルニアに行くことについてどう思うの？」

ヒリールが何かを悩んでいるとしたら、故郷である秘密の島へ異邦人であるヨイクたちを連れ帰ることに違いない。ヨイクは沸いたお湯をポットに注ぎつつヒリールの様子をうかがった。



「ヒベルニアはクラシック教徒の秘密の島だもの。教会関係者はもちろん、誰にも知られちゃまずいわよね。もしかしたら、どうして帰って来たんだ！ってヒベルニア王マキシムの怒りを買うことになるのかも」

ヒリールは毛布の中でびくりとした。

「マキシムおじいさまは厳しい方なの？」

「……うん。マキシムおじいさま、夢の中ですごく怒ってた。わたしのせいでヒベルニアの秘密が暴かれて、わたしのせいでクラシックが教会に滅ぼされるって」

すすり泣くヒリールにヨイクは胸を張って自身満々に答えた。

「よし、分かった。もしもヒベルニア王マキシムがあなたを怒ったら、私がちゃんと言ってやるわ！ヒベルニアが見つかるのは時間の問題だってことをね！」

ヒリールは毛布をはねのけて起き上がり、ヨイクを睨んだ。頬や長い茶色の髪が涙で濡れている。

「でも！それだって、わたしのせいでしょう！わたしがスコットランドに流れ着いて、教会に保護されたからでしょう！わたしのせいでヒベルニアの秘密が暴かれて、わたしのせいでクラシックが滅ぼされるんだ！」

とうとう声を上げて泣き出したヒリールにヨイクは慌てて駆け寄った。

「ほらほら、まだユアンが寝てるから、ね、ヒリール。それに大丈夫よ、ヒベルニアへ行けるのは選ばれた人だけなんですって。教会が押し寄せて来るようなことにはならないわ」

ヨイクはヒリールの頭を抱きかかえ、背中をさすってやる。小さく細い身体は頼りなく、彼女の境遇にヨイクは同情した。とはいえ、ヒリールがいがいがだが、ヨイクがヒベルニアを目指すことはもう決まっている。ヒリールがどうしても帰りたくないと望むなら彼女を置いていくこともできるが、そういうわけにもいくまい。

「わたし、マキシムおじいさまに嫌われてるの。わたしの両親も、わたしのおばあさまも、マキシムおじいさまに嫌われてる。わたしたちはマキシムおじいさまとは別の離宮に住んでいて、おじいさまには年に数回しかお会いできない。おじいさまのことを昔から知っている人たちは口をそろえて言うわ。『マキシムはアンジェラを忘れられないんだ』って。ギーヴおじいさまとシスター・アンジェラを連れて行ったら、マキシムおじいさまは喜ぶでしょう。その横で、わたしはおじいさまから叱責されるんだわ」

堰を切ったように胸の内を語るヒリールをヨイクはなだめた。

「考え過ぎよ、ヒリール」

「考え過ぎじゃないもん」

「だとしても、疲れている時に考えることはロクなことじゃないわ。悪い方へ悪い方へ、下へ下へ、考えが落ちて行くの」

もう少し出発を延ばしてもいいだろう。ヨイクはヒリールを横たわらせ、傍らに腰を下して少女の髪を撫でた。

「ひとつ、北欧民話を聞かせてあげましょうか。霧山の王というお

話よ。目をつぶって」

ヨイクが促すとヒリールは目を閉じた。

「むかしむかし、ある村に一人の娘がおりました。ある日娘は仲間と森へキノコ採りに出かけましたが、仲間とはぐれ道に迷ってしまいました。夜が訪れ心細くなった娘は、遠くの山頂に光を見つけ、それを目指して歩いて行きました。

光は焚火の炎で、そのそばには一人の老人が座っていました。娘はなぜだか恐ろしい気持ちになって、岩の陰に隠れて老人の姿をよくよく観察しました。すると、老人は一つの目の妖怪だったのです」

ヒリールは目をつぶったままわずかに息を飲んだ。

「娘は逃げようと思いました。しかし、そっと立ち去ろうとする娘に老人は言いました。

『逃げるんじゃない。逃げればこのナイフでおまえの目玉をくりぬいてやる。大人しくここへ来て、焚火にあたれ』

娘は恐る恐る老人の言う通りにしました。娘が黙って座っていると、老人は杖を取り出して地面を叩きました。すると、叩いた地面から一人の女が現れ、母親のように娘を抱き締めました。老人は再び地面を叩きました。今度は地面から一人の女の子が現れ、自分は老人の娘だと名乗りました」

ヨイクはヒリールがまだ起きていることを確認して話を進めた。

「村娘は老人の娘と仲良く遊び、夜は母親のような女に抱かれてぐ

つすりと眠りました。村娘は時を忘れて数日を過ごしましたが、やがて家が恋しくなつて、村に帰る道を女に訊ねました。女は村娘の帰宅を残念がりましたが、帰り道を教えてやりました。そして女は銀のブローチを村娘に渡し、こう言います。

『またここへ来たくなつたら、このブローチに息を吹きかけなさい。そのかわり、ここで見たこと聞いたことについて誰にもしゃべってはいけないよ』

一つ目の老人と女と老人の娘に別れを告げ、村娘は自分の村に帰ってゆきました。すると、たった数日村を離れていただけなのに、村の様子がすっかり変わっていて、すれ違う村人は見知らぬ人を見る目で娘を見ました。自分の家に入ると両親までもが娘にこう言いました。

『人の家に黙って入ってくるなんて、あんたは一体誰なんだい？』

娘も訊ねます。

『お母さん、お父さん、どうしてそんなに年を取っているの？』

そこで両者は気がつき、母親が叫びました。

『なんということだ、あんたは七年前に森でいなくなったあの子だね！』

……あら」

ヒリールはすやすやと眠っていた。ヨイクは彼女を起こさないようにそつと腰を上げた。

「眠ったか？」

小屋の入口の脇に横になっていたユアンが身を起こした。

「ごめん、起こしちゃった？」

ヨイクは小声で謝ると、暖炉で蒸気を上げている薬缶を下して紅茶を淹れた。

「いや。霧山の王か」

「まだ続きがあるんだけど、眠っちゃったわ。あんたも紅茶飲む？」  
「ああ、頼む」

ユアンは眠っているヒリールの顔をそっと覗き、それから暖炉のそばの椅子に腰を下した。

「かなり取り乱していたな」

「あの年頃の女の子はこういうものよ。あんたは十四歳の時、何してたわけ？」

ヨイクはカップに紅茶をそそぎ、ユアンに差し出した。

「何かな。アメリカに行ったのが十五歳の時だったから、故郷のグラスゴーで草鞋わらじを二足も三足も履いていたはずだ」

二十六歳のユアンにとって、それは十年以上も前のおぼろげな記憶だ。

「はあ、根っからの商人なわけね」

「まあな。『稼いで貯めろ』が親父の口癖だった」

ヨイクはユアンの向かいに腰掛け、両手で紅茶のカップを包んで冷えた掌にその熱を受け止める。

「人生は何があるか分からないから蓄えは大切だと。そう言った次の日に親父は姿を消した。六歳のおれとお袋と幼い弟妹を放り出してな。どこへ行ったのやら、未だに連絡の一つもないから生死さえ不明だ」

ユアンは紅茶を一口すすって苦笑した。紅茶にはブランデーを垂らしてある。身体が温まるはずだ。

「おれは思ったよ。ああ親父、本当に人生は何があるか分からないってな。だけど、おれたちの誰も親父を憎まなかったから不思議だ。もしかしたらお袋は腹の中で何か思っていたのかもしれないが、そのことで腐ったり、おれたちに当たり散らすことはなかった。いつもと同じように店を開けて、おれたちにパンを食わせて、涙の一つも見せなかったな」

ユアンはスコットランドの商業都市グラスゴー市の貧しい雑貨屋に生まれたという。一つ年下の弟と四つ下の妹がいるが、もう何年も会っていないらしい。

「苦勞したのね。じゃあ、あんたが商人になったのは家族を養うためだったんだ」

「そうでもない。それなら実家の雑貨屋を盛りたてて稼げばいいだけだ。だがおれは自分の力を試したくて、八歳の時に外へ働きに出たんだ。雑貨屋の仕事は読み書きと計算さえできれば誰にでもできる屈な仕事だったから」

様々な仕事を渡り歩いた後、彼は十五歳でアメリカへ向かい、十九歳で自分の貿易会社を設立した。そして二十三歳の時にヨイクと出会い、ヨイクのスポンサー兼書籍商となった。ヨイクは彼の人生の波乱万丈ぶりに感心するが当の本人は何とも思っていない様子だから不思議だ。

「こんな話、退屈だろ？もうひと眠りしたらどうだ？」

今さら照れたようにユアンが言ったのでヨイクは思わず笑ってしまった。

三人は遅い昼食を済ませるとすぐに小屋を出て、真っ白な深い森の中を歩き続けた。

「この厳しい環境にイングリランドやヴァイキングの脅威が加わって、スコットランド人を防衛的にさせたって言われてるのよ、知ってた？」

そう言っただけヨイクはコンパスを取り出した。目指している方角に間違いはない。そろそろ街道に出てもいい頃なのだがそれらしいものはない。

「あんたが防衛的かどうかは知らないけどね」

青い目をくると動かし、ヨイクはユアンの背中に笑って見せた。

「おれも自分が防衛的かどうかは知らないが、まあ氏族同士の内紛は絶えないようだな」

ユアンはそう言って、後ろを歩くヨイクを顧みる。三人の先頭を歩くユアンは銃を背負い注意深く辺りの様子をうかがいながら歩みを進める。熊はすでに冬眠中だが、狼や大鹿がときどき現れるので、注意を怠れないのだ。最後尾のヒリールは疲れた顔で眠そうに歩いていた。

「ねえ、変だと思わないの？『防衛的』なスコットランド人がお互いに争うなんて」

ヨイクの指摘にユアンは苦笑した。彼は生粋のスコットランド人だが、商業都市で生まれ育った彼には、地方でおこる氏族同士の争いごとは遠い話だった。ヨイクは顔をにやつかせる。

「攻撃的な奴もばっちりいるってことよね？」

「そりゃあな。だが名目上は侵された自分の権利を守るために立ち上がるのさ。誇り高いスコッツの戦士はね」

「あら、じゃあ、あれも戦士かしら。誇り高いスコッツの」

ヨイクが言ったとき、三人の行く手を阻む者が現れた。ナイフを持った五人組だ。いかにもごろつきという風体の中年男たちである。ヒリールが小さく息を飲んだ。

「へっへっへ、お嬢ちゃんたち、綺麗な顔に傷つけられたくなくちゃ大人しく……」

男が言い終わる前にヨイクが男の股間を蹴り上げ、ユアンが銃床を打ちつけて別の二人を失神させた。一瞬の出来事に虚を突かれた



残る二人の男たちは、雪の上に倒れた三人の間を見下ろしていきり立った。仲間がやられると闘争心に火がつく、実にスコツツらしい行動とも言える。

二人の男はナイフを構え、ヒリールに狙いを定めた。銃を持った長身のユアンや素早く短剣を抜いたヨイクを避け、武器を持たない少女を標的にしたのは見事だった。咄嗟にヒリールの前に飛び出したヨイクが二人の男から突き出されるナイフを受ける形となり、彼女はひよいひよいと身軽にそれを受け流す。

「おのれ小娘！」

苛立たしげに齒噛みする男たちをせせら笑い、ヨイクは自分の短剣を一閃させた。

「ぐわっ！」

男の一人が腕を抑えて雪の上に膝をつく。もう一人がそれに氣を取られている隙にヨイクは鞆から縄を取り出してそれを男に投げつけた。縄は男の両足に絡み、それを思い切り引くと男は派手に転倒した。転がった男の腕をブーツの底で力いっぱい踏みつけ、ヨイクは男の手からナイフを取り上げた。

「お見事！」

ヒリールをかばいつつ感心するユアンにヨイクは胸を張って見せた。

「こんなもんよ！」

「街の失業者かな？山賊ではなさそうだ。人里が近いのかもしれない

い」

転がった男たちを手早く縛り上げ、ユアンは腕組みした。その後ろでヒリールが小刻みに震えている。民話を集める長い旅をしてきたヨイクたちにとって賊の襲撃など大したことではないが、ヒベルニアの城で大切に育てられてきたヒリールにとってこれは恐ろしい出来事だったのだ。

「ヒリール、大丈夫？びっくりしたわよね？」

少女に駆け寄り、ヨイクはヒリールの頭をそつと撫でた。思い出してみれば、ヨイクも初めて旅に出た頃、よく宿屋や街道でガラの悪い男に絡まれたものだ。誰に助けを求めるでもなく、己の力で徹底的に撃退していたが、あとから震えが止まらないことがあった。

「大丈夫、怖くないわよ。どんな奴が来たって、私とユアンがぶちのめしてやるからね」

ぎゅっとヒリールを抱きしめ、ヨイクは自分の胸に誓った。何があってもこのお姫様を護るのは自分だと。だが、ユアンは案外冷たかった。

「ヒリール、酷だと思うが慣れてくれ。当分は男ひとりに女ふたりの旅だ、おれたちは道を歩いているだけでああいう連中に絡まれる」

確かに一理あるとヨイクは頷いた。

「美女と美少女が並んで歩いていれば仕方がないわ。シユクメイってやつよヒリール」

「美女がどこにいるかは知らないが、そういうわけだ。君はおれか

ら離れないように、ヒリール」

「……はい」

「こら、ユアン！いま何て言った！」

ユアンのキザなセリフに瞳を輝かせ頬を染めるヒリールの隣でヨイクは拳を振り上げたが、足元で伸びている男のポケットから一ポンド紙幣がのぞいているのを見て手を止めた。ユアンも眉をひそめる。こんなごろつきが持つ金としては不自然だ。

「一ポンドといえぼうちの印刷工の一週間分の給料だ。……おい、誰の差し金だ？」

意識のある者の襟首をつかみ、ユアンはぐらぐらと揺さぶった。まともな言葉をつむいだのは五人の中で一番の大男だった。

「し、神父だ。見かけねえ顔の神父だよ。お、おまえらに荷物を奪われたから、取り戻して欲しいって言われたんだ。荷物さえ渡せば女は好きにしたいと」

「なんつつー野郎よ。聖職者の風下にもおけないわね」

腰のベルトに短剣を戻し、ヨイクは地図を広げた。

「どうして荷物なの？エディンバラ教会はわたしを連れ戻すのが目的じゃないの？」

首を傾げるヒリールにヨイクは事も無げに答えた。

「こいつらを差し向けたのは教会の連中じゃないってことよ。聖職者の服なら誰でも手に入るわ。おそらく、私たちのことをあまり知らない連中が私たちの実力のほどを見るためにこいつらに金を渡し

たのよ。その連中は今もこっそりと私たちを見ている、かも？」

リラ城の城主に追われ、エディンバラ教会に追われ、さらに何者かに狙われている。ヨイクは薄ら寒い気持ちになった。

「早く行きましょう」

#### 4. 劇団潜入

三人は街道に出た。目指すは西、商業都市グラスゴー、ユアンの生まれ故郷である。彼らはそこでギーヴと落ち合う約束をしていた。エディンバラとグラスゴーは運河でつながっている所以で船での移動が楽だが、関所の検問に引っかかることを考えると交通量の多い陸路の方が安全だ。どさくさに紛れて関所を通過することができる。

ユアンは疲れて眠ってしまったヒリールを背負い、ヨイクの横を歩いていった。考えることは色々あったが、彼の第一の仕事は金の工面である。頭の中で諸経費の計算をしながら黙々と足を動かしていると、やがてヨイクがおかしそうに笑った。

「まだヒベルニアに骨をうずめる心配してるの？」

そういうわけではないと言おうとしたが、ユアンは思い直した。確かに、それも心配ごとのひとつだ。

「ヒベルニアからこちらへ帰る方法が分かったとしても、果たしてヒベルニア王はおれたちを帰してくれるだろうか。おれたちはヒベルニアの秘密をあまりに知りすぎてしまったと思わないか？」

「ギーヴ猊下がヒベルニア王を説得してくれることになってるけど、どうなるかしらねえ」

ユアンはギーヴ・バルトロメの暢気な顔を思い出し、いまいち期待できないなと思った。

「ま、あんたは自分の望みのことだけを考えていればいい」

暮れなずむピンク色の空を見上げ、ユアンはヨイクを追い越した。

「おれは何があっても、あんたを裏切らない。あんたが誰を敵にまわしても、おれだけはあんたの味方だ」

ヨイクは彼の後ろでふふっと嬉しそうに笑った。

「そんなこと、とっくに知ってるわ」

ヨイクは雪道に小さな足跡を作りながらさらにユアンを追い越した。その姿勢のいい真っすぐな後ろ姿に、ユアンは心を奪われ目を細めた。民話学者になると言って家出してからずっと、ヨイクは常にそうやって自分の求めるものを追いかけてきたのだろう。ユアンは彼女の情熱が眩しかった。

「……ううん」

ユアンの背中ではリールが身じろぎした。

「目が覚めたか？」

「うん」

ユアンはヒリールを背中から下し、その眠たげな顔を覗きこんだ。

「歩けるか？」

少女はこっくりと頷いたが、それから不安そうな顔でヨイクとユアンを交互に見た。

「もしかして、グラスゴーまでこの道をずうっと歩くの？」

それは無理、と少女の顔には書いてある。旅慣れない彼女の足では難しいだろうことはユアンも予測していた。

「大丈夫だ、馬車に乗る。三人でいると目立つから、団体様の中に潜り込むんだ」

「団体様？」

「今に分かるわ」

小首を傾げるヒリールにヨイクが胸を張った時だった。午後四時過ぎ、すっかり暗くなった街道を、ごとごとと何かが近づいてくる音がした。音はどんどん大きくなり、地平線の向こうから何かがやって来るのが見え始めた。

「あれは……？」

ヒリールが怯えた顔でヨイクとユアンを見上げたので、二人はつい笑ってしまった。

「大丈夫、あれはユアンのお友達の馬車よ」

馬車は三台連なって走って来た。どれも大きな幌馬車で、それぞれ二頭の馬が車を引いている。三人の前で馬車が急停車すると幌の中から大柄な男が飛び降りて来た。

「よう、リプトンの旦那！言われたとおりの時刻にエディンバラを出発してきたぜ！」

「助かった。グラスゴーに着いたら約束の金のもう半分を払うよ」

ユアンは大男に応じつつヒリールの手を取って幌馬車の荷台に彼

女を乗せた。続いてヨイクも乗り込む。幌の中には様々な衣装と小道具が詰まっっていて、彼女たちは興味深そうに荷台をぐるりと見回した。

「彼らは旅の劇団で彼とは昔からの知り合いだ。エディンバラでたまたま会って、グラスゴーに行くというから乗せてもらう約束を取り付けたんだ」

ユアンがヒリールに教えてやるとヨイクは彼女に囁いた。

「ユアンは多方面に無駄に知り合いが多いのよ」

無駄にとは失礼な。ユアンも荷台へ乗り込み、大男もそれに続く。やがて馬車は走り出した。

「これまでに検問に遭ったか？」

適当なところに腰を落ち着け、ユアンは大男こと劇団長に訊ねる。ヒリールをリラ城から連れ出してからもうすぐ丸一日経つ。教会がどの程度追手を差し向けているか気になるところだ。

「エディンバラを出る時に一回あったきりで後は静かなもんだぜ」

教会はまだ本格的に動いていないのだ。それも時間が経てばどうなるか分からないが、まだ安心していられるようだ。

「ねえ、旦那、今度は何する気なんだい？」

荷台の奥の方に座っていた数人の女の中の一人が煙管をくわえた唇で気だるげに訊ね、ユアンに近づいて来る。名前は忘れてしまっ



だが、以前からの知り合いの女だ。ユアンは唇の端を上げて答えた。

「ちよつとばかり、教会に喧嘩を売ろうと思ってるんだ」

「まあいやだ」

いやだと言いながら女は楽しそうにユアンの腕を取った。

「男って無茶ばかりするんだから」

流し目をくれる彼女に言葉を返そうとした時、馬車が速度を落とした。

「心配すんな、今夜の宿に着いたんだ」

敵襲か検問かと思わず腰を浮かせたヨイクとユアンに劇団長が笑った。街道沿いにつくられた隊商宿に到着したのだ。三台の馬車に乗った劇団員たちは隊商宿に入ると馬を休ませ、食事にありついた。ユアンたちも彼らと食卓を囲み、男女別の大部屋で眠りに着いたのだった。

ちらちらと雪が降る。グラスゴー近郊の険しい森の中の街道を、三台の幌馬車が音を立てて駆けていく。演劇団の馬車だ。

白い森の中に、娘たちの朗らかな歌声が響く。

「彼の故郷は青い釣鐘草の咲き乱れる美しい邦くに」

戦地へ赴いた恋人を想う歌だ。

「真実の愛で彼を守る、この私の命をかけて」

三台のうち、真ん中の馬車に若い娘たちが乗っている。歌いながら、衣装や小道具を作っているのだ。前後の馬車に乗った男たちは景氣の話をしながら、彼女たちの歌う声に耳を傾けている。

曲目が変わった。緩慢だが陽気な歌だ。ライ麦畑のカップルを冷やかすスコットランド民謡である。

「あっはっは、何よこの歌？」

大口を開けて笑い、ヨイクは訊ねた。

「うふふふ、乙女の青春の歌よ」

「スコッツの女もたくましいわ」

娘たちと笑い合いながら、ヨイクは手を動かした。メモに歌詞を書いているのだ。ヒベルニアのことが済んだら、こうして民謡を集めるのも面白いかもしれない。

「ねえ、リプトンの旦那って、本当はあんたのいい人なんじゃないの？」

隣の娘がヨイクの腕をつついた。ユアンは先頭の馬車に劇団長と一緒に乗っている。他の娘たちも興味深げに頷いた。ヨイクは鞆にメモをしまい、舞台衣装の刺繍の手伝いに戻った。

「違うってば、あいつはただの友達よ」

「えー、またまたあ」

ヨイクとユアンとヒリールは、劇団員と同じような服を着ている。すでに二度ほど検問にあったが、怪しまれもしなかった。彼らが劇団に潜伏してもう四日目だ。三人は劇団員たちとともに馬車に揺られて街道を進み、夜は隊商宿で眠った。

「午後には森を抜けてグラスゴーに着くだろうから、荷物をまとめおけよ。ただし、服はそのままにしておけ。恐らく市門の前で検問に遭うだろうから」

昼の休憩の際、ユアンはヨイクとヒリールにそう囁いた。

「おおい、みんな、そろそろグラスゴーに着くぞ！」

先頭の馬車の御者が叫んだ。ヨイクが幌の中から顔を出したそのとき、馬車が森を抜けた。辺り一面に広大な雪原が広がり、地平線にぽつんと町が見える。立派な屋根と鐘楼を持った大聖堂がある町だ。街道はその町へ向かって真っすぐに敷かれていた。

「ヒリール、起きなさい。グラスゴーに着くわ」

ヨイクは幌の中に戻り、荷台の隅っこで丸くなっていたヒリールを揺さぶった。

「うううん、起きた」

目をつぶったまま上半身を起こし、ヒリールは頭から毛布を被った。それをはぎとり、ヨイクは一喝する。

「こら、目を覚ましなさいっての。しっかりして、最後の検問よ。これを抜ければ無事に故郷に帰れるんだからね」

「ううううん」

そうこうしているうちに馬車はグラスゴアの市門にどんどん近付いていた。馬車が速度を落とした時、最後の検問が始まったとヨイクは腹に力を入れた。

「何だかえらく時間をかけてるみたいね」

劇団員の娘がヨイクに言って指さしたのはグラスゴアの市門と、それに向かって伸びる行列だった。徒歩の者も馬の者も馬車も、雪の中で辛抱強く並んでいる。劇団の三台の馬車も静かに行列の最後尾に着いた。

「いつまで待たされるかしら」

「日が暮れるまでに中へ入れるといいわね。今夜はまた一段と冷え込みそうなもの」

娘たちはそう言ってのんびりと笑い合い、再び刺繍を始める。ヨイクとヒリールも緊張を抑えてそれを手伝った。

しばらくして、先頭の馬車に憲兵の声がかかった。

「全員の首札を改める。一人ずつ馬車を下りて来い」

ヨイクとヒリールは緊張しながら馬車を下り、首札を手には憲兵の前に立った。とはいえ、ヒベルニア人のヒリールはユアンの用意した偽造の首札を使っているし、ユアンもグラスゴアではお尋ね者なので偽名と偽造首札で今までの検問を通過した。まともな旅行者は

ヨイクだけだったが、彼女は彼女で著名人なので「あ、新聞広告の民話学者のヨイク・アールト？」と役人に訊ねられては恥をかいていた。

劇団員全員が検問を終えると、馬車は市門をくぐってグラスゴー市に入った。ちょうどそのとき、グラスゴー大聖堂の鐘が鳴った。馬車は中央広場で止まり、三人は服を着替えて劇団と別れた。

「ぶ、無事に辿り着いた……！」

ヨイクは万感の思いをしみじみと口にした。ここまで来ればヒベルニアは目前だ。ヒリールもほっとしたように微笑む。

「わたしもどきどきしちゃった」

意気投合する女子たちに、冷や汗ひとつかいていないユアンが背を向ける。

「先に『鷲獅子亭』へ行ってくれ。おれも野暮用を片付けたらすぐに行く」

ユアンは言い捨て、通りかかった辻馬車に颯爽と乗り込んでいずこかへ去って行った。残された二人は荷物を背負って歩き出す。

「仕方ないわねえ。ヒリール、行きましょう。ああいう勝手な男を夫にしちゃダメよ」

「ユアンは勝手？」

「そうね、勝手。というより自由、かな」

十五歳で渡米し、十九歳で自分の会社を設立し、二十三歳で書籍

商に暖簾変えをしたユアンが、ヨイクは羨ましい。彼は心のままに生きているのだ。

「ここ、ユアンと初めて会った場所だわ」

ヨイクがつぶやいたのは劇場前の広場だった。貴族や商人の馬車が行きかい、カフェやレストランが賑わっている。三年前にヨイクの目の前で起こった惨劇が嘘のようだったが、彼女の胸はちくちくと痛んだ。

「ユアンとヨイクはこの町で出会ったの？」

「私があのお店でカフェオレを飲んでたら、ユアンの家の使用人が貴族に因縁つけられて殺されたの。で、あいつってばその貴族のことを拳でぶん殴った」

自分の拳を固め、ヨイクは空を殴る。ヒリールは目を丸くして頬に両手をあてた。

「うわあ」

「世の中にはすごい奴がいるもんだと思ったわ。ユアンはその貴族に銃を向けられて、ああ助けなくちゃって思った時には私も引き金を引いてた。幸いその御貴族様は死ななかったけど、どうやらカスリ傷を負わせてしまったらしくて、私もここでは半分お尋ね者よ」

ヨイクは足早に劇場前を通り過ぎた。

「私とユアンが出会ったころの話をしましょうか」

## 5. 追憶1 ―入道雲― (前書き)

今回から数回にわたっては過去のエピソードとなります。  
ヨイクとユアンの出会いから、ギーヴのエディンバラ脱出まで。

## 5. 追憶1 ―入道雲―

ユアン・リプトンがヨイク・アールトに出会ったのは三年前、ユアンが二十三歳、ヨイクが十五歳の時のことだ。

ユアンはスコットランドの商業都市グラスゴー市の貧しい雑貨屋に生まれ、八歳で初めて給料を手にしてから様々な仕事を渡り歩いた。やがて自分の才能を試そうと十五歳でアメリカへ、十九歳で自分の貿易会社を設立した。扱っていたのは紅茶や砂糖、煙草など儲けの大きい嗜好品が中心で、ユアンは一代で大きな富を得た。

一方、その頃のヨイクはヒベルニアに関する民間伝承を集めるために旅を始めたばかりだった。父親の反対を押し切って村を出た手前、路銀は自分のトナカイを売り払って得た分しかなかった。それがとうとう底をつき始めていた。

運命の日、ユアンは大切な商談に向かうべく馬車に乗り込んだ。機能的ながら美しい自家用の馬車だ。真夏の汗ばむ陽気ではあったが老舗の仕立て屋に作らせた新品のスリーピースを着込み、母親譲りの赤毛を整髪料で後方にきっちり撫でつける。商談に臨む時は見た目も肝心だ。

屋敷を出て十数分後、ちょうど劇場の目の前にさしかかった時だった。馬車が何かにぶつかって急停止した。座席で新聞に目を通していたユアンは驚いて扉を開けた。御者は興奮する馬を落ち着かせようと手綱を引きながら青ざめた顔でユアンを顧みる。

「だ、旦那様、すみません」



ユアンの馬車は並走する別の馬車にぶつかってしまったようだ。相手が辻馬車なら窓から顔を出して謝れば済むのだが、馬車を見る限り相手は貴族だ。ユアンが馬車を飛び降り、貴族の馬車に駆け寄ると、劇場の前の石畳に尻もちをついた若い男が従者に助け起こされながら何か喚き散らしていた。ユアンは彼を知っていた。フォシヨン侯爵だ。麻薬や武器の密貿易で荒稼ぎしていると商人仲間から聞いたことがある。

「おまえ、ユアン・リプトンだな！商人の分際で侯爵の馬車にぶつかるとは何事だ！あまつさえ、このボクに怪我を負わせるとは無礼千万！」

ユアンは地面に膝を折り、面倒なことになったと内心で舌打ちした。ユアンの馬車は芝居見物にやってきた貴族の馬車にぶつかり、ちょうど馬車を降りようとしていたフォシヨン侯爵閣下を転倒させてしまったのだ。知人や下々の見ている前で恥をかかされた侯爵は顔を真っ赤にして怒り狂っている。彼の転び方がよっぽど滑稽だったのか、傍らに立つ若い娘は幻滅した様子で侯爵を見下ろし、見物人は何か囁き合いながらくすくす笑っている。

「誠に申し訳ございません。下男が無礼は主人である私が責任を負います。どうか広いお心でお許しください」

ユアンと御者は並んで深々と頭を下げた。汗水たらして働く商人が、先祖から譲り受けた特権と財産でこのうと生きている貴族に対して膝を折るなど悔しくてたまらなかったが、こうするしかない。

「おまえのせいで皆に笑われたじゃないか」

フォシヨン侯爵がつぶやいたかと思うと、大きな破裂音がして御

者の身体が傾いた。地面にどさりと倒れた彼の額から大量の血が流れ出し、あっという間に血だまりをつくる。あちこちから女性の悲鳴が聞こえ、ユアンはフォション侯爵を見上げた。侯爵は白煙を上げる短銃を今度はユアンに向ける。二連銃だ。

「おまえのせいで皆に笑われたじゃないか。おまえのせいで婚約者の前で恥をかいたじゃないか。おまえのせいで、おまえのせいで」

血走った目でフォション侯爵が引き金の指に力を込めた時、ユアンは死を覚悟した。短い人生だったが、やりたいことはやったと思う。心残りは今日の商談くらいだ。詳細は知らされていないが、きっとユアンが喜ぶ話だと言って知己がセッティングしてくれた商談だった。

「まったく、イカレてるな」

何もかも諦めて思わずつぶやくと、それまで金縛りにあったように動かなかった身体が自由になった。すると自分の頬や服に御者の血が付いていることに気が付き、ユアンの胸に怒りが湧き上がってきた。彼には妻子がいた。年老いた両親がいた。彼には長い人生があり、たくさんの喜びや悲しみを手にするはずだったのに、それが身勝手な一人の男の手で、無情にも断ち切られたのだ。

「な、なんだと?!」

ユアンがすっと立ち上がると、背の低いフォション侯爵はたじろいだ。ユアンは顎を突き出し、侯爵の顔をじっと見下ろし、拳を固く握った。向けられた銃口が恐ろしくなかったといえは嘘になる。それでも我慢できなかった。こんなに怒ったのは生まれて初めてかもしれない。身体が火の玉のようだ。そもそも、麻薬や武器の

売買でぼろ儲けしているこの男が、ユアンは大嫌いだったのだ。

「おまえは、イカレてる」

大きく振りかぶり、全体重をかけて突き出したユアンの拳がフォション侯爵の左頬を直撃した。侯爵は数歩よろけて地面に倒れこむ。彼は頬を押さえ、目を丸くしてユアンを見上げた。貴族である自分が庶民に殴られるなんて想像したこともなかったのだろう。もしかしたら今までの人生で殴られたことが一度もなかったのかもしれない。

「お、お、お、おまえ、殴ったな！商人のくせに、このボクを！ど、どうなるか分かってるんだろうな！」

「分ってるさ。おれはおまえみたいな阿呆じゃない」

最期にやってやったぞという清々しい思いと若干の後悔の念が胸をよぎり、ユアンは今度こそ死を覚悟した。フォション侯爵は立ち上がり、常軌を逸した怒りの形相で真っ黒の銃口をユアンの眉間に向ける。次の瞬間、劇場前広場に銃声がこだました。うめき声を上げたのは侯爵だった。彼は叫びながら右手を押さえ、短銃を下ろした。ユアンは周囲を見回す。誰かが侯爵を狙撃したのだ。それが誰なのかはすぐに分かった。

「まったく、イカレてるわね」

凜とした張りのある声が出て、その場にいた誰もが彼女を振り返った。どこからともなく現れ、呆然とするユアンに駆け寄ったのは藍色のワンピースの少女だった。珍しい身なりと背中に大きな荷物を背負っているところを見る限り、異邦からの旅人のようだ。彼女は短銃を腰のベルトに挟み、波打つ金色の髪を揺らして、ユアンの

腕を強い力で引っ張った。

「殺されてやることなんてないわ」

少女はユアンの手を引き、人の群れを縫ってその場を逃げ出した。背後から侯爵の怒鳴り声が聞こえてきたが、二人を止める者はいなかった。ユアンは引きずられるがままに走りながら、自分の手が震えていることに気がつく。ついさっき、自分は本当に殺されるところだったのだ。あと、ほんの一瞬で。心臓がどくんどくと音を立って鳴り響いている。生まれてこの方、こんなにも生きているということを実感したことはなかった。

しばらく走ると、少女は何も言わずに路地裏の建物と建物の間に飛び込んだ。当然、腕をつかまれたユアンも引きずりこまれる。大人がすれ違えない程の狭い通路を進み、角をふたつ曲がったところで彼女は足を止めた。二人とも汗まみれだ。

「あのイカレ侯爵の馬車は往来の激しい場所で急停車したのよ。あなたの馬車はそれを避けようとしたけどだめだった。あなたの御者は悪くないわ」

薄汚れた地面にしゃがみ込み、息を整えながら少女は言った。ユアンは上着とベストを脱ぎつつ建物の壁に寄りかかり、大きく肩で息をする。だらしなく地面に座り真上を見上げると、建物と建物の間から、青い空と入道雲が見えた。

「当然だ」

二人はそれきり口を利かず、息をひそめて騒ぎが収まるのをただ待ち続けた。やがて日が傾き始めた頃、ユアンは懷中時計を取り出

して頭を抱えた。商談の約束をすっぱかしたことに気がついたのだ。そして、自分を助けてくれた少女にまだお礼のひとつも言っていないことにも。少女はユアンの隣に座り、膝の上に広げた紙に何か文章を書いていた。

「なぜ、おれを助けてくれたんだ？」

ユアンの声は掠れていた。自覚している以上におれは参っているのかもしれない。彼が心の中で自嘲したと同時に少女は顔を上げた。青い両目がきらりと光る。それは若きビジネスマンをはっとさせるほど意思の強い瞳だった。

「お金に困ってるからよ、リプトンさん」

「……何だって？」

ふふふ、と少女は破顔した。

「あなたの馬車があのかレ侯爵の馬車にぶつかった時、劇場前のカフェにいたの。他の客があなたの顔を見るなり『リプトンさんなら上手いこと金で解決するだろう』って言うもんだから、あなたを助ければ礼金がたんまり貰えるんじゃないかと思って」

少女は自分の背中の中から大きなボストンバッグを取り出した。ユアンは額を抑えた。それは今日の商談のために用意した金だった。馬車に積んでおいたものを彼女が持ってきたのだろう。

「言っておくけどな、それひとつで貴族の年収に相当するんだぞ」

「見れば分かるわよ。だから騒ぎの隙にそれを馬車の荷台からいだいて、かといって泥棒するのも気が進まなかったら、あなたを助けたのよ」

金が絡むとユアンの頭は冷静に思考を始める。確かに少女はユアンの命の恩人だ。自分の資産に見合った礼金をはずむべきだろう。それに、商談にはもう行けない。フォション侯爵は自分の頬を拳で殴った商人のことを市長に報告するだろう。彼は影響力のある人物だから、この町で商売することも暮らしていくことも難しくなる。だったら、もう一度どこか別の町で、何もかも一からやり直した。

「分かった、礼金ははずむ。だが、その金はあるにやれない」

ユアンは商談のために新調したズボンの汚れを払いながら立ち上がる。髪のを直し、ベストに腕を通す。

「どうということ？」

少女は腰を浮かし、静かに首を傾けた。彼女が憤慨するのではないかと思っていたユアンは、この子は案外賢いのかもしれないと目を見張る。

「事情はうちに来れば分かる。おれはここに隠れているから、その通りで辻馬車を捕まえて来てくれ」

少女はボストンバッグを置いて表通りへ出ていくと、すぐに辻馬車で戻ってきた。ユアンは大金を抱えてみすばらしい辻馬車に乗り込み、平静を装って自宅の住所を御者に告げた。御者は何かに気がついたかのように片眉を上げたが、何も言わずに馬の尻へ鞭を振った。

## 6. 追憶2 ―夕べの光― (前書き)

前回のすぐ後の話です。

## 6. 追憶2 ―夕べの光―

辻馬車は新興住宅街の一角に佇むリプトン家に、二十分で到着した。西の空が薄いオレンジ色に染まり始めていたが、まだ暑い。ユアンは上着とボストンバッグを手に馬車を降りた。彼の命の恩人である少女もそれに続く。二人は裏門の扉を開けて素早く中に滑り込んだ。

「あなた、本当に金持ちなのね」

下級貴族の屋敷より大きな住居を前にして、少女は感心したように口を開けた。

「それも今日までだ。こっちだ、ええと」

「ヨイクよ。ヨイク・アールト」

口を開けてリプトン邸を見上げていた少女が、ユアンに向き直って微笑んだ。波打つ金色の髪が揺れる。瞳は海のように青い。肌は陶器のように白く滑らかで、頬や唇は薔薇色だ。若きビジネスマンは突然居心地が悪くなり、わざとらしい咳払いをした。明るいところで、きちんと彼女の顔を見たのは初めてだった。

「そうか、じゃあこっちだ、アールト嬢」

ユアンは勝手口を開けてヨイクを厨房へ招く。背後を気にしながら自分も建物の中に入ると、ドアを閉めて鍵をかけた。厨房は無人だった。いつもなら使用人が夕食の支度をしている時間なのだが。

「静かね。誰もいないのかしら」



「執事はいるはずだ。ここで待っていてくれないか？」

ヨイクを厨房に残し、ユアンは居間と応接間を覗き、階段を上って自室や使用人の部屋や客室を見て回った。どの部屋も荒され、目のつくところにあった金目のものがなくなっている。そして誰の姿もなかった。屋敷にはユアンの他に六人の使用人が住んでいる。

「旦那さま、ここです、上ですよ！」

もしやと思つて屋根裏部屋の隠し扉の真下へ行くと、案の定、扉の隙間から執事が顔を出した。

「みんなそこに隠れてるのか？」

「ええ、フォション侯爵の私兵と市の衛兵がやってきたものですから、ここに隠れておりました。何があったか聞きました、ご無事で何よりです、旦那さま。今、はしごを下しますから」

「頼む。ああ、それと客が来てるんだ。おれの命の恩人だから、できる限りのもてなしをしてくれ」

「承知しました」

親子ほど年の離れた執事が恭しく応じると、ユアンは厨房にヨイクを迎えに行った。彼女はユアンが戻ってきたことに気が付かず、窓から差し込む夕べの光の中にひっそりと立ち、庭師の整えた広い庭を眺めていた。藍色のワンピースに包まれた細い身体は彼女の瞳のように堂々としていて、ユアンは不思議なものでも見るように、しばらくヨイクの背中を見つめていた。

「あら、執事は見つかったの？」

ヨイクが振り向いた。ユアンははっとして、誤魔化すように懐中時計を見た。午後九時。夏のスコットランドは日が長く、まだ日は沈まない。

「あんた、いったい何者なんだ？」

口をついて出た質問にユアンは自分で驚いた。そんなことを聞いてどうする。

「民話学者よ」

ヨイクは天気の話でもするように答えた。

「ヒベルニアって知ってる？」

「御伽噺の島だな」

「私はそれが本当に存在すると思っているの。色々な町を訪ねて、色々な人から話を聞いて、いつかヒベルニアの真実を突き止める。それが私の仕事」

ユアンは身を乗り出した。彼はそれまで飾り立てて踊る女と身を粉にして働く女しか知らなかった。ヨイクは自分と同じ、前に進み続ける種類の人間だ。

「そうか。おれも十五の時に家を出てアメリカへ渡った。最初は辛かったが、商売の流儀やモノや金の流れが分かるとすぐに貿易に夢中になった」

「私はまだ不調よ。この前もエディンバラの名誉司教との意見交換会に応募して落選したし。まあ、大学出の一流学者ばかりが応募する中で無名なのは私だけだったって話だけど」

ユアンはエディンバラ名誉司教などという地位は聞いたことがなかったし、民話の研究とエディンバラ教会がどう関係しているのかも分からなかったが、ヨイクが困っていることは分かった。

「あんたは大学に行くつもりはないのか？」

「私の知りたいことは誰も知らないことだもの」

ヨイクは途方に暮れた顔で西の空を見つめた。夕日の沈んでゆくその向こうに、恋焦がれる何かがあるかのように。

「だからエディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメにどうしても会いたい。私の知りたいことの一歩近くにいたのが彼だから」

彼女はユアンを顧みてにっこりと微笑んだ。

「ああ、ごめんなさい。――執事は見つかった？」

屋根裏部屋には屋敷中の金目のものが集められていた。衛兵たちに奪われないよう、慌てて隠したのだろう。現金、宝石、銀食器、高価なランプ、その他にも小さくて持ち出しやすそうなものが並んでいる。リプトン家の面々は暗く天井の低いその部屋で車座になり、ヨイクは少し離れたところに腰を下した。

ユアンは五人の使用人の顔を順に見つめた。毎日顔を合わせている彼らの、一人が欠けている。御者だ。ユアンの胸は改めて痛んだ。

「みんな、聞いてくれ。おれはこの町を出る。この屋敷も引き払うつもりだ。みんなには本当にすまないと思ってる。特にクレア、おれはあんたの亭主を死なせてしまった」

ユアンが話を切り出すと、ひとりの女が堪えていたような嗚咽を漏らして泣き出した。胸に乳飲み子を抱いているクレアという名の女は死んだ御者の妻だ。

「いいんですよ、旦那さま、全部うちの亭主のせいですから。うちの亭主がもっとしっかりしていれば……」

「彼は何も悪くない」

「そうよ、悪いのはあのイカレ侯爵だもの」

ユアンの言葉をヨイクが援護する。クレアは泣き崩れたが、ユアンは話を進めた。

「今からこの金と、そこにある金目のものを分配する。そうしたら、みんなもここを出るんだ。行くあてのないものはグラスゴー公園通りのおれの弟を訪ねてくれ、会社も彼に託すつもりだ」

ユアンは商談のために用意した金をボストンバッグから取り出し、それを貴金属類と一緒に平等に分け、自分の取り分をクレアにやってしまった。

「こ、こんな大金を?! 旦那さまの分は?」

「葬式代にするといい、おれのことは心配するな。それより急げ、みんな、どうか元気で」

主人との別れを惜しみつつ使用人が出ていくと、屋根裏部屋には

ユアンとヨイクだけが残された。少女は頬を膨らませてユアンを見上げた。

「私に礼金をはずむ話は？」

がらんとした屋根裏部屋を眺めていたユアンは我に返ってヨイクを顧みた。

「札束を持って旅するのは危険だろう？こっちへ来い」

二人は梯子を下りてユアンの寝室へ向かった。ヨイクはわずかに警戒したようだったが、黙ってユアンについてきた。窓の外は薄闇に包まれており、黄色く丸い満月が東の空に浮かんでいる。その月の光を頼りに、ユアンはカーペットをめくり、床板をはがした。

「現金より便利で確実なものもある」

ユアンが床下から取り出したのは四本の金の延べ棒だった。ヨイクは難色を示した。

「こんなに重いものを持って旅するのも大変よ。換金するのも面倒だし」

「札束は所詮、紙きれだ。それに、国境を越えるたびに両替していったら損をする、貴金属や宝石の方がいい。ほら、これはどうだ？これなら軽いだろう」

続いてユアンがヨイクに手渡したのは数百粒のダイヤモンドが入った革袋だった。それを床に五つ並べ、彼はヨイクの顔を見た。彼女は困ったように唇を尖らせる。

「宝石の価値は知らないわ。これでどれだけのお金になるの？」

「五千ポンドにはなるだろうな。足りないか？」

「……あの鞆にはもっと入ってたんでしょ？」

「ばれたか。あの半分だ」

恨みがましそうなヨイクにユアンは笑ってしまった。彼は鈍くない人間が好きだった。

「いいわ。そんなに沢山持てないのは事実だし、これだけ頂戴するわね」

ヨイクは腰のベルトに革袋を結びつけ、床から立ち上がった。

「あんた、いつまで旅を続ける気なんだ？」

立ち去ろうとするヨイクを引き留めるようにユアンは訊ねた。ヨイクは扉に向かいかけていた足を止め、ユアンを振り返らずに答えた。

「故郷を出たのはほんの数ヶ月前なの。知りたいことを全部知るまで旅はやめないわ」

「じゃあ、次に路銀がなくなったらどうする気だ？ また金持ちの命を救って礼金をせびるのか？」

ユアンは窓際の机の椅子を引き、ヨイクの方を向いて腰を下した。少女は月光の中にじっと立ち続けている。ユアンからは彼女の背中しか見えなかったが、ヨイクが真剣に考えていることは分かった。彼女は自分の未来や、自分の望みや、これからどうしていくべきかということを実際に考えている。指針を求めている。目標へ到達するための一歩をどこへ踏み出すべきかを探している。

「さっき膝の上で書いていたものを見せてくれないか」

劇場前広場から命からがら逃げ出した後、路地裏でヨイクがしていた書き物のことがユアンはずっと気になっていた。ヨイクは一瞬何のことか分からなかったようだが、すぐに鞆から紙の束を引っ張り出した。

「これは故郷の民間伝承を文章にしただけのものよ」

ヨイクから紙の束を受け取ると、ユアンはそれを月明かりの下でゆっくりと読んだ。ヨイクの字はとても綺麗で、彼女のように堂々としていた。民間伝承は神秘的で、幻想的で、何より彼女の語り口がおもしろく、情景描写も美しかった。

「なあ、お嬢さん、エディンバラ名誉司教に会う方法を教えてやろうか」

一通り読み終わると、ユアンは座ったままヨイクに声をかけた。

「え?」

ユアンの本棚から『ガリバー旅行記』や『東方見聞録』を抜き取ってページをめくっていたヨイクは驚いてその本を閉じた。

「ついでに研究費用も少なからず手に入る。悪くない話だと思うがね」

「あなたに何がわかるのか知らないけど、教えてほしいわ」

机の上に転がっていたペンを手に取り、ユアンはこつこつと机を

たたいた。それから紙を取り出し、実家の雑貨屋を継いだ弟へ手紙を書いた。『おれの会社をおまえにやる。ついでにおれの家の処分を頼む。ユアン・リプトン』

「エディンバラ名誉司教に会うには、あんたが学者として有名にならないければならない、そうだろう？ ではどうしたら有名になれるか？ 大学を出ていないあんたには学者同士のネットワークがないだろうし、老いも若きも学者たちはあんたを相手にしないだろう。となると、学者たちを当てにはできない。じゃあ誰の間で有名になるか？」

かたん、とペンが机の上に落ちた。ユアンは立ち上がって真正面からヨイクを見た。ヨイクはユアンの次の言葉を待つようにじつと彼を見つめ返した。ユアンは唇の端を吊り上げた。

「庶民も貴族も、御伽噺は大好きなんだよ」

一步、二歩とユアンはヨイクに歩み寄った。そうしながら、彼女を焚きつけるように早口で語る。

「あんたが集めた民話を女子供にも分かるような本にする。英語版は庶民をターゲットに安価で刷り、フランス語版は貴族のために立派な装丁で出版する。目新しいものをテーマにした方が売れるだろうから、北欧辺りの民話がいい。もちろん、それを全国の書店に売りさばくのはおれだ」

「あなたが？」

ユアンの勢いに付いて行けず、ヨイクは疲れたように声を裏返した。ユアンは尚も身を乗り出し、部屋の中を行ったり来たりした。



「これはビジネスだ。採算がなければやる気も起きないが、これは儲かる。あんたの本は売れる。英語版はイギリスやアメリカで、フランス語版ならヨーロッパ中で売れるだろう。そうすれば、あんたの名はヨーロッパ中に広まるぞ」

呆れかえるヨイクの周りを行き来していたユアンが、その時ぴたりと動きを止めた。彼はヨイクの顔を覗きこみ、一語一語をゆっくりと発音した。扇情的な言い回しだった。

「おれはあんたに賭ける。あんたもおれに賭けてみないか？」

ヨイクは腹を抱えて笑いだした。

「あっはっは、あなたはペテン師ね。おまけにキザ。あなたが言うことはみんな本当に聞こえるわ、リプトンさん」

ユアンは憤慨した。

「みんな本当のことだ」

「そう？じゃあ本棚のこれは何？」

言いながらヨイクが指したのは本棚に収まる一冊の本の背表紙だった。『相手をその気にさせる交渉術、ペテン師一步步前編』

「……」

「ま、いいわ。私も現状を打開したかったから」

おかしそうに笑い、ヨイクは大きく深呼吸した。儼然としているユアンに向き直り、彼女は静かに告げたのだった。

「私はあなたに賭けない。私はあなたを信じるわ」

ふわふわと揺れるヨイクの金髪を、黄色の月影がぼんやりと輝かせていた。海のように青い瞳もきらきらと光る。人間の目というもののは、こんなにも美しく輝くものだったのか。ユアンはヨイクの瞳に見入り、一瞬、我を忘れた。この瞳を輝かすためなら、何でもしてやろうという気になった。

「……あんたも十分ペテン師みたいじゃないか」

ユアンがやつのことで絞り出した悪口に、ヨイクは再び声を立てて笑った。ユアンもつられて笑い、それが収まると身を正してこう言った。これからは忙しくなりそうだと思いながら。

「まあ、ペテンだろうが何だろうが、これだけ覚えておいてくれれば上手いくさ。世の中にうまい話なんてありはしない。おれはあんたの書いたものを必死で本にするし、必死で売りさばく。だからあんたは必死で考え、必死で書いてくれ」

それから一年後、ヨイク・アールトの本はヨーロッパ中でベストセラーになった。その才能が認められ、彼女がエディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメに会うことができたのはさらに一年後、彼女が十七歳の時であった。

## 7. 追憶3 ―春に― (前書き)

ヨイクとユアンの出会いから二年後。

## 7. 追憶3 —春に—

ヨイク・アールトがギーヴ・バルトロメに初めて会ったのは、雲ひとつないよく晴れた春の日のことだった。処女作の『北欧伝承余話』がベストセラー入りしてから一年後、彼女はようやくエディンバラ名誉司教との意見交換会に招待された。

エディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメはエディンバラ大聖堂の鐘楼に幽閉されている知る人ぞ知る高位の聖職者である。彼は弾圧の末にヨーロッパ中に身を潜めたクラシック教徒の象徴的人物であり、エディンバラ教会にとっては大事な人質だ。彼は週に一度だけエディンバラ大学図書館を訪れる権利と、そこで月に一度だけ様々な学者と話をする権利を持っている。ギーヴ・バルトロメ自身が研究しているのは教会やクラシックの歴史だったが、彼はこれまで多くの分野の学者と語らってきた。

そしてその日、とうとう民話学者ヨイク・アールトが彼のもとに馳せ参じたのだった。

と言っても、実際にヨイクの出る幕はなかった。意見交換会に招かれる学者は二種類いて、意見交換会に毎回招待される老練の学者と、たった一度だけ会の見学を許される若手の学者だ。ヨイクはもちろん後者である。その日もエディンバラ大学図書館の一室で円卓に座ったギーヴ・バルトロメと老練の学者八人の間で議論が進められ、壁際に並んで腰を下した若手学者七人は彼らの見解に耳を傾けるだけであつた。

「仕方ないと思うけど、そんなに緊張しないでね。ほら、みんなアールトさんを見なよ」

ギーヴ・バルトロメが若手学者に各々の研究テーマについて訊ねたのは、意見交換会の最後だった。緊張する面々のせいで引き合いに出されたヨイクは慌てて背筋を伸ばした。この日のために遙々生まれ故郷のノルウェーからエディンバラへやって来た彼女は、あまりの疲労と眠気に欠伸を噛み殺していたところだった。

「アールトさん、君の本は俺も読んだよ。すごくおもしろかった。次はどの辺りを研究するの？このまま北欧を極める？」

ギーヴは気さくに柔らかく微笑んだ。若き研究者たちは、初めて自分たちを顧みてくれたギーヴの姿に恍惚とした。当然ながら彼らはギーヴの正体など知らない。三十代前半の容姿を持つ彼が実は百八歳の老人であることも。

彼の端正な顔立ちや背中中で緩くまとめた金褐色の髪や緑色の瞳はヨイクから見ても魅力的ではあったが、その時の彼女の頭の中はギーヴと言葉を交わすチャンスを棒に振るまいという思いでいっぱいだった。おそらく最初で最後のチャンスだ。

「次はヒベルニアを狙ってます。ヒベルニアへ行って、ヒベルニアの住人からも話を聞きたいと思っていますよ」

これで百八歳とはねと思いつつ、ヨイクはギーヴに満面の笑顔を向けた。「あなたの仲間のクラシックが隠れ住んでいることは分かっている」と言外に含ませて。ヨイクは、ギーヴが約六十年前からクラシックの象徴であったことも、ヒベルニアにクラシック教徒が隠れ住んでいることも、とあるクラシック教徒の遺した長い日記から知った。

その場にいた学者たちは失笑をもらし、これだから御伽噺に現を抜かす非科学的な奴はと小声でヨイクを馬鹿にした。笑わなかったのはギーヴだけだった。いや、笑わないどころか、彼は張り詰めた表情でヨイクの瞳を覗きこんだ。

「……そう。またお話できたらいいね、アールトさん」

意見交換会が終わり、ヨイクが図書館を出るとユアンは中庭のベンチに腰掛けてヴォルテールの小説『カンディード』を読んでいた。楽観主義の主人公が不運に見舞われ、しかしその不運のおかげでより大きな不運から逃れ、さまざまな登場人物と交わり、世界中を旅するのだとユアンはヨイクに教えてくれた。

口にこそ出さないがユアンが異邦を旅する物語を好んで読んでいることに、ヨイクは最近気が付いた。彼は利益になるからと言ってヨイクの本を出版し、それをヨーロッパやアメリカの書店へ売りさばいているが、実は彼自身も御伽噺や冒険小説が好きなのではないかとヨイクは密かに思っている。

「どうだった？」

ヨイクが現れたことに気が付き、ユアンは本から顔を上げて訊ねた。彼はいつものように赤毛を後方に撫でつけ、白いシャツの上ベストと上着を身につけている。折り目のついたズボンも染み一つない襟元のクラバットもユアンが自分で手入れをしているらしく、全くマメではないヨイクは感心してしまう。それとも、二十五歳の独身商人というものは皆こうなのだろうか。

「とりあえずカマかけてきたけど、だめね。ヒベルニアはクラシックが落ち延びた秘密の島だもの、そう簡単に情報を漏らしちゃくれ

ないわ。謎を解き明かせば私が本を書くことはばれてるし」

ユアンの隣に腰を下し、ヨイクは膝を抱えて深いため息をついた。

「まだまだ分からないことだらけね。ヒベルニアの場所、ヒベルニアへ向かう海流の場所、ヒベルニアには選ばれた者しか入れないというけど、その条件。ギーヴ猊下に会えたら少しは解き明かされると思って今まで頑張ってきたけど、そんなに甘くないか」

ヨイクは両手を振り上げて空を仰ぐ。

「貯えがなくなる前に謎を解き明かしてくれよ」

眉を上げて微笑み、ユアンは目を細めてヨイクを見下ろした。時々、ユアンがそんな風に自分を見つめることをヨイクは快く思っている。

「あ……」

ヨイクは声を漏らして腰を浮かせた。図書館から濃紺の法衣をまとった金褐色の髪の男が出て来たのだ。エディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメは四人の護衛に前後左右を守られながら図書館前の階段をゆっくりと下りる。すると、すぐに四頭立ての立派な馬車がやって来た。大学内に馬車が入りすることはまずないので、学生たちは一様にギーヴを振り向いた。

「ずいぶん嚴重だな。あれがギーヴ・バルトロメ猊下か」

「ええ、聖なる妖怪ギーヴ・バルトロメ。とても百八歳には見えな  
いでしょ？」

ヨイクとユアンは苦虫を噛み潰したような顔を見合わせた。ギーヴが囚われの身であることは知っていたが、それを目の当たりにするのはやはり気分が悪かった。

「彼に会うチャンスはもうないでしょうね。会えたとしても教会の監視があるもの。教会関係者の前で彼がヒベルニアの話をするとは思えない」

言いながら、ヨイクははっとした。馬車に乗り込もうと身をかがめたギーヴと目が合ったのだ。護衛に悟られないようにするためか、ギーヴは静かに目を伏せ、懷からさっと何かを取り出して石畳の上に落とした。彼はもう一度ヨイクに目配せしてから馬車の中に消えた。ギーヴの乗った馬車が門の方へ走り去ると、ヨイクとユアンは図書館に向かって駆け出した。

「これかしら？」

図書館前の石畳からヨイクが拾い上げたの是一片のカードだった。クリーム色の紙に茶のインクで文字とリングのマークが印刷してある。

『王室御用達、菓子はニュートン。ロイヤルマイル通り白馬亭のとなり』

周囲の足元を見まわしつつヨイクは首をかしげる。ゴミ以外に落ちていたものは他にない。二人は額を寄せてカードを見下ろす。

「どう見ても菓子店のカードだな。裏は白紙、メッセージがあるでもなし。ギーヴ猊下おすすめの店か？」

「王室御用達の菓子店を私におすすめしてどうすんのよ」



「じゃあ帰りに寄り道するからここで会おう、とか？とりあえず行ってみないか？ロイヤルマイルの白馬亭ならここからそう遠くない」  
「そうね。行きましよう」

二人は辻馬車を拾い、街の中心を貫くロイヤルマイルというエディンバラ旧市街きつての大通りを目指した。

エディンバラはスコットランドの首都であり、ヨーロッパの宗教首都、つまりエディンバラ教会の総本山である。

街のほぼ中央には急峻な岩山がある。これは大昔に氷河によって削られた死火山で、その西側の頂上に建てられたエディンバラ城にはスコットランド王が、東側の崖の聖ピーター大聖堂にはエディンバラ教皇が鎮座している。

「複雑な地形と頑健な地盤を持つてはいるが、エディンバラ城はこれまで何度もイングリランドに占領されてきた」

辻馬車を下りたヨイクとユアンは、人の往来の激しいロイヤルマイルをゆつくりと下っていた。商用でエディンバラを訪れたことがあるというユアンがヨイクに蘊蓄を話して聞かせている。

「クロムウェルもエディンバラ城を占領したのよね。中世の魔女狩りや一七〇五年のクラシックの処刑にも使われたんでしょ」

「ああ。そのエディンバラ城を起点として、なだらかな坂道が旧市街を貫いている。それがこれだ。ホリルード宮殿まで一マイルほど

続いていることから、この坂道はロイヤルマイルと呼ばれている」

「へえ」

「エディンバラは険しい谷に挟まれているから、この通り、狭い道路の両脇に五階建てや六階建ての住居が次々と建てられた。中世の香りの残る街路といえは聞こえはいいが、高層住宅の住人が窓から生活排水や残飯を投げ捨てるせいで年中悪臭が立ち込めている。特に夏場は地獄だな」

ヨイクは鼻にしわを寄せつつ高層住宅を見上げる。嗅覚がおかしくなりそうだった。

「窓の下へ何でも捨てるのはパリの模倣ね」

「ああ、捨てやすいように、上の階に行くほど窓が通りにせり出しているだろ」

「なるほどねえ」

「ははは、感心している間も頭上への注意は怠れないぞ、おっと」

ユアンが飛びのいた場所に林檎の皮が降ってくる。ヨイクは腹を抱えて笑った。

パブ兼宿屋の『白馬亭』はロンドン行きの駅馬車の発着地としても有名であるため、ヨイクとユアンはすぐに『菓子店ニュートン』を見つけた。

「おう、入んな。今しがた貍下から注文が来たところだ。しかし今回限りにしてくれよ、うちだって教会に睨まれたかないんでね」

ヨイクとユアンが店先を覗くなり、威勢のいい中年男がヨイクの腕をつかんで店の中に引っ張り込んだ。厨房へと連れ去られるヨイ

クをユアンが慌てて追ってくる。

「お、おい、待ってくれ、悪いがこっちは事情を知らないんだ」

菓子職人でごったがえす厨房を抜け、食糧庫のようなところへたどり着くと、中年男はクリーム色のエプロンをヨイクに渡した。胸に『菓子店ニュートン』と刺繍されている。

「何を言ってやがる。さあ、それを着な。ぐずぐずするな、パイが冷めちまうだろう。そら、しっかり持て、落っこつすなよ、猯下の好物のアップルパイだ」

ヨイクがエプロンを身につけ、籐かごの持ち手を握ると、中年男は床に生えた取っ手を引っ張り地下への扉を開いた。足元から吹き上げる風は勢いがよく、菓子店の地下がどこかと通じていることが分かる。ヨイクは納得した。

「ユアン、合点がいったわ」

「……おれも分かった気がする」

中年男からランプを受け取り、ヨイクは地下室を覗きこんだ。階段の下の方は真っ暗で、どこからかネズミの鳴き声や風の唸り声が聞こえて恐怖心を煽る。

「いいか、階段を下りて少し歩くとY字路がある。右が大聖堂とエディンバラ城方面、左は劇場に行っちまう。迷うと危険だから寄り道せずに右へ行け。突き当たりをもう一度右に曲がると長い階段がある。そこを上れば見張りの衛兵がいるから、猯下に菓子を届けに来たニュートンだと言えればいい」

「わかったわ、ありがとう」

ヨイクは中年男に礼を述べ、取り残されて不満そうなユアンに任せなさいと頷いてから地下への階段を下りた。Y字路にたどり着いた時、ヨイクの背後で菓子店の入り口が閉められてしまった。賑やかな街から切り離され、頭からつま先まで静寂と闇に包まれる。急に心細くなり、ヨイクは心を落ち着かせようと深呼吸した。

「右が大聖堂と城、左に行くと劇場」

ヨイクはそれぞれの道をランプの明かりで照らした。高級菓子店が城や劇場と地下でつながっているという話は聞いたことがある。王侯貴族のパーティーや観劇のために、つくりたての菓子をいち早く届けるべく作られたのだそうだが、まさか大聖堂にも通じているとは。

ヨイクは右の道を足早に進み、しばらく黙々と歩き続ける。寄り道もしたかったが、限りある時間を無駄にするわけにはいかなかった。道は急こう配の上り坂で、ロイヤルマイルを上っているのだと分かる。間違いなく大聖堂方面だ。

突き当たりを右に曲がると、果てしなく長い螺旋階段の下に着いた。ヨイクは覚悟を決めて階段を上り始めるが、上れども上れども終わりが見えない。何しろ、エディンバラ城もエディンバラ大聖堂も急峻な岩山の上にあるのだ。くじけそうになるたびに、この先にエディンバラ名誉司教ギーヴ・バルトロメがいるのだと自分に言い聞かせる。足が棒になりかけた頃、ようやく頭上に光が見えた。正方形の光の枠だ、扉に違いない。

折しも、ヨイクの真上で鐘楼の鐘が鳴った。エディンバラ大聖堂の鐘楼に辿り着いたのだ。



## 8. 追憶4 —無数の星— (前書き)

前回のすぐ後の話です。

## 8. 追憶4 —無数の星—

ヨイクは螺旋階段を一気に駆け上り、木の扉を下からどんと拳で叩いた。扉はすぐに開いた。

「あ、ニュートンさん。いつもご苦勞様です」

「おお、今日は女の子だ、可愛い」

扉を開け、地下を覗きこむなりヨイクに手を貸してくれたのは、スコットランドの正装のキルトを着た二人の衛兵だった。上半身はタキシード、腰にはタータンと呼ばれる伝統的なチェック柄の織物をスカートのように巻きつけて、膝下丈の毛糸の靴下を履いている。彼らに引き上げられつつ、ヨイクは周りを見渡した。そこは衛兵の詰所のように、窓の外を見る限り鐘楼の地階に位置しているようだった。

「どうもありがとう。猯下の前でケーキの仕上げをすることになっているから、ちょっと時間がかかるんだけど、構わないかしら？」

ヨイクは籐かごを胸の前で持ち、上目遣いで訊ねる。衛兵たちは顔を見合わせ、困惑したように首をかしげた。

「いいんじゃないか？」

「猯下は天辺の部屋にいるよ。その階段の先だ」

「ご親切さま！」

ヨイクは衛兵たちにつこりと微笑み、疲れた体に鞭打って螺旋階段を上り始める。菓子店の店員はいつもこんな苦勞をさせられているのだろうか。汗だくになり、肩で息をしながら頂上まで上ると、

木の扉の前に衛兵が一人立っていた。

「ニュートンさん、ご苦労様です、猊下が中でお待ちですよ」

「ど、どうも……」

ヨイクは部屋に通されるなり、不覚にも床の上に倒れこんだ。螺旋階段ですっかり目が回ってしまったのだ。冷たい石畳には絨毯の一枚も引かれていない。暖炉には小さな火が燃えていた。

「やあ、来たね。そろそろ来るころだと思って、ちょうどお茶を入れたところだよ」

柔らかい声が聞こえ、ヨイクは顔を上げた。夕日の差し込む部屋の中央に質素な木のテーブルが置いてある。そのテーブルの傍らに背の高い男が立っていた。濃紺の法衣をまとい、金褐色の髪を背中で結んだ男だ。

「アップルパイをありがとう、ニュートンさん」

ギーヴは緑色の目を冗談ばく細め、ヨイクの手からアップルパイの入った籐かごを受け取った。ヨイクは床に倒れたまま、まじまじと彼を見上げる。クラシックの象徴であり、エディンバラ教会の人間質であるギーヴ・バルトロメと、今、自分は二人きりだ。ヨイクは今さら胸がときどきした。

「紅茶で構わない？俺はコーヒーも酒も飲まないんだ」

ギーヴはヨイクを助け起こし、椅子を引いて彼女を座らせた。彼はまだ湯気の立つアップルパイを籠から取り出し、それを八等分に切り分ける。ティーポットを手に取り、ふたつのカップに紅茶を注



ぐ。ゆつくりとした動作はまるで老人のようで、彼が百八歳の聖なる妖怪であることをヨイクは思い出した。

「そうだ、さっきから君の恋人が睨んでるんだよ。後で誤解を解いておいてほしいなあ」

ギーヴが窓の下を指して言うので、ヨイクは腰を浮かせて外を見た。大聖堂前の広場にユアンの姿があった。何故だか分からないが彼は不機嫌面でヨイクとギーヴを睨んでいる。だが、ヨイクは彼の背後に広がるエディンバラ市街に目を奪われた。夕焼け色に染まる赤屋根の街は美しく、鐘楼の天辺から見るとそれはミニチュアのようだった。

「こんな辺境に宗教首都が置かれ続けてきた理由が分かったわ。ここはまるで天界ね」

ヨイクは立ちあがって窓から身を乗り出し、鐘楼に隣接する聖ピーター大聖堂を見た。黄昏色の日差しを浴びるゴシック建築は、どんなよりとした陰惨な雰囲気醸し出している。エディンバラ教皇の住まいはその裏にある。

「こんな安全地帯に本拠地を置いているんじゃ、エディンバラ教会が威張り散らすわけだわ」

ヨイク自身にはエディンバラ教会に対して大きな恨みなどないのだが、教会はしばしばヒベルニアに関する情報収集の妨げになっていた。

「まあ、まずはいただこうよ。ここのアップルパイは本当に美味しいんだから。――神々よ、いただきます、と」

あまり時間がないことを忘れていた。ヨイクは席に着いてフォークを持ち、つやつやと輝くアップルパイを一口頬張った。ヨイクとギーヴは顔を見合わせる。

「これ、やばいでしょう」

「これは、やばいわね」

黙々とアップルパイを平らげ、紅茶を飲み干し、一息ついてからようやく二人は会話を始めた。外はすっかり暗くなり、空には無数の星が輝いている。

「君に聞きたいことがあるんだけど、俺ばかりが質問するのはフェアじゃないでしょう。だからお互いに同じ数だけ質問するって言うのはどうかな」

「いいわ。お先にどうぞ」

ヨイクは紅茶のカップを受け皿に戻し、椅子の背に寄り掛かってギーヴを促した。

「じゃあ聞くけど、君はどこでクラシック教徒や俺のことを知ったの？教会やクラシックたちは女神信仰と俺の存在を世間から隠したのに」

予想通りの質問にヨイクは用意していた答えを取り出す。

「クラシックがヨーロッパ中へ散らばったのはあなたも知っているでしょう。私の村にも弾圧から逃れて来たクラシック教徒の老人が住んでいたの。もちろん、彼が死ぬまで誰も彼の正体を知らなかった。それが分かったのは彼のお葬式の後、身寄りのなかった彼の遺

品を村の女たちで整理していたら、彼の古い日記が出て来たのよ。それはフランス語で書かれていて他の誰にも読めなかったものだから、フランス語を勉強していた私が貰ったの。生前の彼は無口で身の上の話をしなかったから、彼がどこから来た何者だったのかを知りたかったしね。翻訳をしながらゆっくり読み進めて驚いたわ。彼はフランスのオンフルール村出身の元修道士で、四人の女神を崇めるクラシック教徒だった。一七〇五年の大神進ではクラシックのリーダーであるマキシム・バルトロメやあなたと行動を共にしていた」

ギーヴは天井を仰いだ。

「そういうことだったのか、どうりで詳しいわけだ。ねえ、その日記の持ち主の名前は？」

「ミシエルさんよ。姓は分からないけど」

「ミシエル！うわあ懐かしいなあ！そうかあ、あいつも死んだんだあ」

しみじみと独りごち、ギーヴは頬杖をついて遠い目をした。

「本当は、その日記は死ぬ前に処分するべきだったんだろうけど……彼にはそれができなかったのかもしれないね。俺たちの信仰は焚書や弾圧で歴史から葬り去られてしまったから、せめて、この世に何かを書き残しておきたかったのかもしれない。今まで散々エディンバラ教会に――あ、耳、塞いだ方がいいよ」

ギーヴの警告の直後、鐘楼の鐘が足の下で鳴り始めた。その金属的な大音響に、テーブルや本棚が揺れ、食器がカタカタと震える。こんなものが十五分ごとに鳴ったらさぞ煩かろう。ヨイクは耳を塞ぎ、歯を食いしばって甲高い音色がやむのを待った。ギーヴは平然と紅茶のおかわりを飲んでいる。

「もうひとつ聞いていいかな？ 君はなぜヒベルニアを目指すの？」

鐘が鳴りやみ、ヨイクが耳を塞いでいた手を下すとギーヴは矢継ぎ早に訊ねた。手元を見れば二個目のパイに手を出している。

「ヒベルニアがあるからよ」

ヨイクは背筋を伸ばし、きっぱりと答えた。

「あの地平線の向こうにヒベルニアがあるから、だから行くの」

「それだけ？」

「十分でしょ。ミシエルさんの日記を読んで、御伽噺のヒベルニアが本当にあるなら行ってみたいと思ったの」

疑わしげに顔をしかめるギーヴにヨイクはすまして見せた。実際、本当にそれだけなのだ。

「じゃ、約束通り、私も質問を二つするわね」

「ちよっと待って、その前に断っておこうと思うんだけど、俺の立场上、話せないこともあるということを理解してほしい。君が大衆向けの本を書いている民話学者である以上、クラシック教徒にとって脅威となるような情報は教えられない」

それは最初から分かっていたことだったので腹は立たなかった。だが、ヨイクは少し意地悪を言いたくなる。

「私が知りたいのはヒベルニアの場所と行き方よ。それを教えてくれないというなら、あなたに聞くことはあまりないわね」

ヨイクが顎を上げて睨みつけると、ギーヴは申し訳なさそうな顔ををした。

「ごめんね」

「じゃあ、そうね。ヒベルニアへは選ばれた人しか行くことができないってミシエルさんの日記に書いてあったけど、選ばれるための条件って何なのかしら？」

日記には誰もが行ける場所ではないと記されていたが、詳しいことは書かれていなかった。ギーヴは迷う素振りを見せ、思い切ったように一息で答えた。

「ヒベルニアは極光の女神の加護を受けた者しか入れない。島の周りを女神の結界が覆っていて、それを通り抜けられるのは俺やマキシムだけだと思う。だからヒベルニアを探しても無駄だよ、アールトさん」

ギーヴはヨイクを諦めさせるために言ったのだろう。だが、それを聞いてヨイクは両の拳を突き上げて満面の笑みを浮かべた。

「つまり、あなたを誘拐すればヒベルニアの場所も行き方も分かる上に、ヒベルニアを覆う結界を通過することもできるってわけね！よし、一石三鳥！」

「え」

面食らって瞬きするギーヴにヨイクは吹き出して笑い、苦笑しながら両手を下した。

「冗談よ。あのね、あなたも学者なら知ってるはずだけど、情報っ

ていうのはそのまんま信じちゃだめなのよ。ミシエルさんの日記も、あなたの言葉も、本当ではないかもしれない」

「それを言っちゃあ、おしまいじゃない？」

「でも、そうでしょ。あなたたちはエディンバラ教会に弾圧されてきたクラシックの生き残りよ。そんな人たちがほしいと簡単に、しかも赤の他人に大事な情報を与えるかしら。疑う必要は大いにある、だから私はヒベルニア探しをやめない」

ヨイクは強い口調で宣言し、不安そうな面持ちのギーヴを真つすぐに見つめた。

「ヒベルニアはマキシム・バルトロメたち以外の誰も行ったことのない島だもの。つまり、あなたも行ったことがない。結界があるなんて嘘かもしれない。私はヒベルニアを探すわ」

「……そう」

ギーヴは意味深な瞳でヨイクの目を覗きこみ、くすつと笑って椅子から立ち上がった。

「そろそろ帰った方が良くかもしれないね、アールトさん。恋人も睨んでることだし」

彼につられてヨイクも窓の外を覗く。ユアンがさっきより凶悪な顔をしてこちらを睨んでいた。

「苛々しちゃって、どうしたのかしら。あ、ちなみに、あれは恋人じゃなくて、私の本の版權を持ってる書籍商よ」

「ああ、君の後ろに凄腕の書籍商がついてるって聞いたことがある。

もちろん本の中身も面白かったけど、処女作のヒットには彼の才能が貢献したんじゃないかって学者仲間が噂してたよ、特にあの新聞広告」

ヨイクはユアンのせいで頭の血管が切れかけたことを思い出して拳を握った。

ヨイクの処女作『北欧伝承余話』の印刷や製本はロンドンで行われた。ユアンの旧友がロンドンのパタノスタ・ロウという書籍街で書店を営んでおり、彼の持つ器材や人脈を借りたためである。原稿が仕上がった後、ヨイクは故郷の村へ一年ぶりに帰り、ロンドンのユアンと手紙のやりとりをしながら本が出来上がるのを待っていた。その時の自分の心境は何とも表現しがたい、そわそわと落ち着かない気分だったのをヨイクは覚えている。そんなヨイクの元にある日ユアンから届けられたのは数日分のロンドンタイムズだった。

『明々々後日、天才美少女民話学者、現る。——リプトン書店』

広告欄の最も小さな一枠いっばいに、大きな太い活字が躍っていた。ヨイクは卒倒しかけたが、力と勇気を振り絞って翌日の新聞を見た。

『明々後日、天才美少女民話学者、ヨイク・アールト、現る。——リプトン書店』

さらにその翌日、翌々日と新聞をめくって広告欄を見る。

『明後日、天才美少女民話学者、ヨイク・アールト、ついに処女作を……——リプトン書店』

『昨日までの広告には誤りがございました。おとぎばなしと民話が好きなヨイクの本が出ます。明日です。――リプトン書店』

最後の広告だけはまともだった。

『本日発売、ヨイク・アールト『北欧伝承余話』――リプトン書店』

最初の発売はロンドン市内だけだったが、やがて郊外やイギリスの地方都市からも本の注文が殺到した。英国内での販売が軌道に乗ると、ユアンはヨイクと約束した通り、アメリカやヨーロッパ大陸への発送を始めたのだが、そこでも似たり寄ったりの手法で新聞広告を出していたらしく、ヨイクは世界的に「あの新聞広告のヨイク・アールト」と言われるようになってしまったのである。

「同じ書籍の広告なのに、毎日違う宣伝文句が載るといふのは話題性が高いよね。もうロンドンで君の名前を知らない人はいないんじゃない？」

一生ロンドンには行けないわと心の中で悪態をつきつつ、ヨイクはギーヴに右手を差し出し、丁寧な社交辞令を述べた。

「ごちそうさま。私は故郷に帰って研究を続けるけど、いつかまたお会いしたいわ、ギーヴ猊下。私にはもう一つ質問をする権利があるわけだし」

ヨイクの手を握り返し、ギーヴはじつと彼女の目を見つめた。何か目に見えないものを見通そうとするかのような眼差しだった。

「たぶん、君とはまた会えると思う。次に会う時、君はヒベルニアを見つけているような気がするよ」



予言めいた不思議な口調で別れの言葉を述べると、ギーヴはヨイクの背を押して扉までエスコートする。ヨイクはそっとギーヴの顔を盗み見たが、彼の真意は読めなかった。

「だいいいわね。おやすみなさい」

ヨイクの背後で扉が静かに閉ざされた。彼女はしばらくその場に立ち尽くしていたが、キルトを着た衛兵が迷惑そうに顔をしかめたので螺旋階段を下りて鐘楼の外に出た。菓子店ニュートンのクリーム色のエプロンはずししながら、ヨイクは待っていたユアンへ駆け寄った。彼はむっつりと唇を結び、黙ってヨイクを見下ろした。

「お待たせ。どうしたのよ、何怒ってるのユアン」

「べつに」

そういえば最初の旅を終え、ヨイクが帰郷する際にも彼はこんな顔をしていた。容姿がいいので少年のようにふてくされた姿が可愛らしく見えないこともない。ヨイクは八歳の年の差を忘れてしまうくらい保護欲をそそられた。

「べつに、って怒ってるじゃない」

ヨイクは腕を伸ばしてユアンの頭を乱暴に撫でた。後方に撫でつけた赤毛が乱れ、ユアンはヨイクの手をつかんだ。彼はため息をついて顔の筋肉の緊張を解き、途方に暮れたような遠い目でヨイクを見下ろした。その悲しげな表情に彼女は一瞬どきつとした。

「それは、あんたがあんまり鈍……」

「アールトさーん、忘れものだよー」

ユアンの声に被さるように、頭上からギーヴの間延びた声と菓子店ニュートンの籐かごが降って来た。籐かごは鳥のようにゆっくりと石畳に着地する。ユアンはヨイクの手を離し、籐かごの横にひっそりと片膝をついてうなだれた。

「いけない、忘れてた！ ありがとう猊下！」

ヨイクがギーヴと手を振り合っているうちに、ユアンは階段を下ってロイヤルマイルへ向かい始めていた。冷たい夜風に首を締めながらヨイクはユアンの背中を追った。彼と彼が手に持った菓子店の可愛い籐かごは果てしなく似つかわしく、ヨイクはつい吹き出してしまったが、幸い彼は気が付いていないようだった。

「ユアン、ありがとね」

大股で階段を下りていくユアンにちっとも追いつけず、ヨイクはかなり遠くから声をかけた。ユアンは歩調を緩め、いつも通りの仏頂面で彼女を振り向いた。機嫌が直って良かった。ヨイクはユアンに追いつき、彼の持つ籐かごにエプロンを押し込みながら続けた。

「あんたがいなかったら、私、まだギーヴ猊下に会えてなかったと思う。これまであんたの言う通りにやってきて良かったわ」

ヨイクはしみじみとつぶやき、足を止めて大聖堂の鐘楼を見上げた。ユアンも立ち止まり、ギーヴ・バルトロメの住まう塔を見やる。次にギーヴと会えるのはいつだろう。その時こそはヒベルニアへ行くのだろうか。ヨイクは目を閉じて肩を落とし、それから腹に力を入れた。

「だからといって、あの新聞広告の件を許したわけじゃないけどねええええ!!」

階段の高低差を利用して、ヨイクは長身のユアンの脇腹に右膝をぐりぐりと打ちこんだ。ユアンは笑いながらよろけ、落ちるように階段を数段下る。

「しつこいな、あんたも。あれはあれで好評だったんだぞ」

二人はしばらく笑い続け、人通りの減ったエディンバラ旧市街を月明かりに頼って歩いた。そういえばユアンに会うのは久しぶりだった。数えてみると実に一年ぶりだ。ヨイクが帰郷している間もユアンはマメに手紙を送ってくれたし（広告の載ったロンドンタイムズも送ってくれた）、あまり離れていた気がしなかったのだが。

「これからは私の戦いなんだと思う。ヒベルニア行きの手掛かり、絶対に見つけるわ」

にっこりと笑って意気込んで見せるヨイクを、ユアンは目を細めて見下ろした。ヨイクは居心地の悪さと快さを感じて彼から視線をそらし、何かを誤魔化すように菓子店ニュートンのクリーム色のエプロンをユアンに着せてはしゃいだ。

数日後、ヨイクは船に乗って故郷へ帰り、ユアンは駅馬車に乗ってロンドンへ戻った。二人が再会し、ギーヴを連れてエディンバラを脱走するのはその一年後である。

9. 追憶5 —雪の村— (前書き)

前回から一年後。

## 9. 追憶5 —雪の村—

ロンドンにはパタノスタ・ロウに店を構えるリプトン書店にギーヴ・バルトロメからの手紙が届いたのは一七六五年の九月末だった。三月地震が起き、空が雲で覆われ太陽光が遮られて半年が経ち、水不足、凶作、飢餓などという不吉な言葉が現実味を帯びてきた頃だった。ロンドンにおける本の売れ行きも右肩下がりで、せめて貸本屋にでも転身した方がいいのではないかと書籍商たちが愚痴をこぼすこともしばしばだった。

ギーヴからの手紙の宛名はミスターリプトンとなっていたので、ユアンは迷わず封を切った。中から出て来たのは演劇のチケット一枚のみ。シェイクスピアだ。どう考えても、ユアンがエディンバラ名誉司教と二人で観劇に出かけるとは考えにくい。ヨイクに渡してくれということだろう。

チケットに印字された日付は十一月二十七日だった。まだ二カ月近く時間があったが、ユアンはすぐにヨイクに手紙を書き、封筒にチケットを入れてその日のうちにポストに投函した。今度こそ、ギーヴがヨイクに何か教えてくれる気になったのかもしれない。善は急げだ。

四週間後、ヨイクからの返事が届いた。

『ヒベルニアへ旅立つ時が来たわ。船を用意してエディンバラへ向かって。私も十一月二十五日までにはエディンバラへ行く』

話の飛躍に付いていけず、ユアンは何度も手紙を読み返した。ヒベルニアへ旅立つ時が来た？ヨイクはヒベルニア行きの手がかりをついに見つけたのだろうか。ユアンは急いでグラスゴウの弟に手紙

を書き、三年前にグラスゴーを追われた時に預けた貿易船をエディンバラまで運んでほしいと頼んだ。そして翌々日にはリプトン書店を友人と従業員に任せ、ロンドン中央銀行で貯金の半分を下してエディンバラ行きの駅馬車に乗りこんだ。エディンバラへ着くとすぐにヨイクへの手紙を投函した。

『あんたの村まで船で迎えに行く』

エディンバラの船着き場へ向かうとすぐに自分の船が分かった。歴戦の貿易船の前に見知った人物が立っていたからだ。

「旦那さま、お久しゅうございます」

感極まったようにしみじみと目礼したのはかつてユアンの執事を務めていた老人だった。ユアンは彼の肩に手を置いて彼をねぎらい、船内に足を踏み入れた。すると、三年前に別れた四人の元使用人たちがユアンを出迎えてくれた。フォション侯爵に射殺された御者の妻クレアは三歳になった娘を連れていた。あの時の乳飲み子がこんなに大きくなったのかとユアンは大喜びした。

かつての主従は再会を喜び合い、船室の改装や航海のための積み荷について綿密に話し合い、共に食卓を囲った。もちろん、船内の厨房で腕を振るったのはリプトン家の元料理人である。夜が更け、楽しい宴が終わるとユアンはロイヤルマイルの宿に引き返した。夜は物騒だからと執事が無理やりついてきた。

「あれだけ良くしていただいてこんなことを申し上げるのは憚られますが、旦那さま、あなたは全てお見通しだったのではないですか？ 私たちを解雇した時、手厚い報奨を与えて送り出せば、私たちがいつかご自分の元に進んで戻ってくるであろうことを」

入り組んだ暗い夜道を歩きながら、執事は訊ねた。エディンバラの道は複雑怪奇だ。ロイヤルマイルから一步奥に入ると、トンネル状の細い路地がどこまでも広がっている。

「あなたはこんな日が来ることを知っていたのではないですか？あのお嬢さんと出会った時にはもう、彼女と一緒に御伽噺の国へ行くことを確信していたではありませんか？だからあなたは自分の貿易船を一隻だけ残しておいた。他の船はみんな弟さまに譲り渡してしまったのに」

ユアンは答えなかった。

「恐ろしい方だ。けれど私たちはあなたに感謝しています。感謝してもしきれないほど。このご時世に屋根の下で眠ることができるのはあなたのおかげです。あなたもご存じでしょうが、今、裕福だった者は貧しく、貧しかった者はより一層貧しくなり果てています。路地裏には餓死者とも浮浪者とも区別のつかないものが溢れ、誰もが明日は我が身と震えています」

ユアンの暮らしているロンドンも酷い有様だった。日照不足で作物が育たずパンの値段がつり上がると、貧乏人は食べ物を得るために様々な物を売り払い、家賃が払えなくなればアパートから追い出された。豊かな商人や貴族が食べ物や物の買い占めを始めると、物価はますます上がり、飢えた人々によってパン屋が襲撃されることも珍しくなくなった。

執事は静かに続けた。

「私たちが再びあなたの元に集まったのは、あなたを信じているか

らですよ、旦那さま。御伽噺の国を目指すなどという馬鹿馬鹿しい航海を前に私たちが逃げ出さないのも、あなたを信じているからです。あなたが私たちを悪いようにはすまいと堅く信じているのです」

細い路地を抜け、二人はロイヤルマイルに出た。そここの宿やパブが明かりを灯し、不景気に負けずに賑わっているが、一年前にヨイクとその道を歩いた時より遥かに寂れてしまっている。三月地震以来、世の中全体がおかしくなっている。

「こんな時代にあなたのような主を持てた私たちは幸せです」

野兎亭という宿の前でユアンは執事と別れた。トンネル状の路地に消えていく老人の後ろ姿を見送り、ユアンは何とはなしにロイヤルマイルの賑わいを眺めた。

「信じるということは知ることを拒むということだ。それは無責任なことだと思わないか？ 人から信用されるということは喜ばしいことだ。だけどそれは、責任を負わされているということじゃないのか？」

小さくつぶやき、ユアンはクラシックのリーダー・マキシム・バルトロメのことを考えた。クラシック教徒たちから厚い信頼を寄せられ、老若男女問わず人望が厚かったというマキシムは責任の重みに耐えきれなくなったりはしなかったのだろうか。

ふと、ヨイクなら今のつぶやきに何と答えるだろうとユアンは思った。二人が初めて会った日、ヨイク自身もユアンを信じると断言したのだ。



貿易船の改装を終え、ユアンがヨイクの故郷に辿り着いたのは十一月十七日だった。小さな船着き場に貿易船を泊める場所はなく、ユアンは沖に錨を下して小舟で岸に降り立った。雪に覆われたノルウェー北部にある彼らの村は決して豊かではなかったが、都市部で見られるような餓死者や浮浪者はいない。ある程度の貧富の差はあっても、人々が助け合って暮らしているのだ。

雪がちらつく灰色の空の下、ユアンは出迎えてくれたヨイクの案内で村を一回りした。ヨイクたちは半定住、半遊牧の暮らしをしており、白樺の木で作られた家屋十数棟が船着き場を中心に点在している。彼らのように海辺に住むサーメ人もいれば、森の中や山の中や湖畔で暮らすサーメ人もいるのだという。

「私たちには漁業をやる家と放牧をする家があるの。漁業をやる家の男は海が凍らない限り船を出して漁に行くし、海が凍れば氷に穴を開けて魚を釣るの。放牧をやる家の男は交代で放牧生活をしていて、うちの父も先月は丸々一ヶ月留守にしていたのよ」

ユアンはまだ会っていないが、ヨイクは父親と祖母と三人暮らしだと言っていた。一ヶ月男手がないのはさぞ不便だろう。それとも、不足した男手も貸し借りするのだろうか。

「じゃあ、あれは何だ？放牧に出かけないトナカイもいるのか？」

真っ白な息を吐きながらユアンが指差したのは村の外に囲われた数十頭のトナカイの群れだった。

「あれは放牧から帰って来た屠殺とつされるトナカイ。秋になるとトナカイの肉を町へ売りに行ったり、自分たちの食料として保存したりする作業が始まるのよ。冬を越すトナカイだけを春まで森に放すの。森は風をさえぎってくれるから冬でも少し暖かいのよ」

二人はものの数十分で村を一周してしまった。ヨイクはトナカイに近づいてみようとユアンの腕を引いて誘った。立派な角を持ったトナカイを柵越しに眺めユアンの胸はわくわくしたが、彼らの方はユアンには目もくれず、実に悠然としている。

「トナカイの主食は苔。苔は日光がなくてもある程度は育つから、彼らは元気よ。私たちも森や海で取ったものを食べているから暮らしていける。物価が上がったせいで町ではロクな買い物ができなくなっちゃったけどね」

ヨイクは肩をすくめ、柵に背を預けて自分の村を眺めた。故郷を愛おしむような彼女の目を、ユアンは吸い込まれるように見つめた。

「一年中村にいるトナカイもいるわ。運搬用の雄のトナカイは町に出かける時の必需品なのよ。この村には郵便夫が来ないから、私たちの方から町へ郵便物を取りに行くんだけど、あんたが送ってくれた本やなんかも、みんなトナカイが引いてくるんだから」

ユアンはリプトン書店から新刊を出すたびにヨイクへ一冊ずつ進呈していた。ほとんどが児童書や冒険小説や古典の類で、ヨイクは村人の誰でもが読めるよう図書室を作ったと手紙で教えてくれた。それからは古書店で買った評判の本なども送っていたのだが、そうすると郵便物を取りに行った村人は重い本を何冊も持って村に帰らなければならなかったに違いない。

「かえって悪いことをしたな」

「まさか。あんたの本が来ると子供たちが喜ぶのよ。文字が読める人は少ないし、英語も難しいけど、挿絵を見ればだいたいの話は分かるからね。外国語に興味を示して少しずつ言葉を覚える人も増えるし。今、誰があんたを自分の家に泊めるか争奪戦をしてる。みんな英国紳士からロンドンの話を聞きたいって何日も前からそわそわしてるのよ」

ヨイクがユアンに視線で示した方に彼女と同年代の娘が四人立っていた。ヨイクと同じ藍色のワンピースに赤い帽子を被っている。彼女たちは木陰からこちらの様子をうかがっていたようだが、ユアンが振り向くと黄色い声を上げて走り去った。何度もユアンを振り返り、互いの顔を見合わせてくすくすと笑い合いながら。ユアンは居心地の悪い気持ちになり、話題を変えた。

「そうだ、そろそろ教えてくれ。ヒベルニアの場所を突き止めたのか？」

顔を合わせたらすぐに訊いてやろうと思っていたのに、ヨイクの顔を見たら忘れてしまった。思わず身を乗り出したユアンに、ヨイクは満面の笑みを浮かべて頷いた。

「見つけたって言ったら、信じる？」

三か月前に十八歳になったヨイクの唇がユアンの耳元でそつと囁いた。身を切るような寒さで冷たくなった耳に彼女の温かい吐息がかり、ユアンは一瞬言葉を失くした。

「……信じるさ」

絞り出した言葉にユアンは自分で驚いた。無責任で浅墓で、嫌いな言葉だと思っていたのに。

「できれば暖かいところで話したいけど、適当な場所を思いつかないからここで言っちゃうわ。ここならトナカイしか聞いてないもの」

ユアンはうなずいた。

「あのね、実は私、一年前から、隔月で二週間くらい、エディンバラ大学で生活してたの。ギーヴ猊下の意見交換会に出席したことがあるって言ったら、エディンバラ大学図書館が出入りを許可してくれて、ついでに学生寮にも住まわせてくれたのよ。ただし、父や婚約者の遊牧当番中に行っているから、彼らはそのことを知らない。彼らは、私が勉強や研究をやめて花嫁修業に精を出してると思っているの。今度の旅のこともまだ言っていない。彼らにとっては寝耳に水」

エディンバラにいたのなら連絡してくれば会いに行っただのに。ユアンはそう思ったが口には出さず、代わりに非難がましく訊ねた。

「こそこそするなんて、あんたらしくないな」

ヨイクは柵に預けていた背を放し、うつむいて深いため息を吐き出した。

「覚悟が決まらないんだと思う」

若き民話学者はきっぱりと言った。ユアンは、自分が躊躇していることをこんなにはきはき口にする人間を初めて見た。思わず口から笑いが漏れた。

「覚悟が決まらない？明日出港するっていうのに、やっぱり、あんならしくないな」

笑うユアンを軽く睨みつけ、ヨイクは静かに語る。

「あんたが思っているほど、私は勇敢じゃないわ。むしろ私は臆病者だと思う。最初の旅に出る時だって、本当は何度も迷った。自分が何か取り返しのつかない選択をしようとしているんじゃないかって怖くてたまらなかった。それでも私が旅に出たのは、私が負けたからよ」

「負けた？」

「私の中の恐怖が、湧き上がる好奇心に負けたのよ、私はいつだって私の好奇心に負けて負けて負け続けてきた。あんたに本を出そうと誘われた時も、エディンバラの地下道を通してギーヴ猊下に会いに行った時も、私はいつだって負けてたのよ。決して勇敢なわけじゃない」

「言いかえると、あんたの好奇心は何物にも負けないってわけだ。根拠のない勇氣より、その方が分かりやすくて頼もしい。あんたの好奇心や探究心は、全ての恐怖に打ち勝ってヒベルニアへ出かけるべきだと言ってるんだろう？だったら、今までのように負けてやればいいことだ、今さら何を躊躇う必要があるんだ？」

ユアンはさも当然という口ぶりで言ったが、ヨイクは煮え切らない表情で地平線の彼方を見た。西の方角だ。空を覆う分厚い雲が、うっすらと橙色に染まっている。時刻は午後三時半、もう日が沈むのだ。

「ヒベルニアの本を出せば私たちは教会に追われることになるわ。ここが教会に知られたら、ここを出て行かなければならない。もしかしたら、一生戻って来られないかもしれないわ」

ヨイクは言いながら、腕を上げて誰かに大きく手を振った。彼女の視線の先をユアンが目で追うと、一人の青年がこちらへ手を振っていた。ヨイクと同じ金髪碧眼で、背の高い男だ。他の村人同様に藍色の民族衣装を着ていて、ヨイクと並んだらさぞ似合うことだろう。ユアンは直感的に、彼がヨイクの婚約者なのではないかと思った。

「婚約者や父や祖母とも別れることになるかもしれない」

ユアンはようやくヨイクのため息のわけを理解した。当然だが、彼女は旅立つことをとづくに心に決めている。だが、彼女は故郷や家族を捨てる覚悟が決まらないのだ。

「こんな時、普通の娘なら父親や婚約者を放って旅になんか出ないはずだわ。それなのに私は、薄情ね。父親に育ててもらった恩を忘れ、幼馴染の婚約者を裏切り、故郷を捨てても知りたいことや見たいものがあるなんて」

ヨイクは優しいのだ、とユアンは思った。ユアンなら自分が薄情だなど一瞬も考えずに旅に出るだろう。実際、ユアンはアメリカへ渡る際、母と弟妹をグラスゴーに残して旅立ったのだ。当時はエネルギーと好奇心のあり余る十五歳の少年だったとはいえ、今から思えば少々薄情だったのかもしれない。しかし、そのことで家族に非難されたことはない、一応、今のところは。

「別に普通だ。あんたは学者だろ」

「そうね、私は学者よ」

青年がこちらへ近づいてきたので、ヨイクは早口で話を終わらせた。青年は柔らかい笑顔をヨイクに向け、それからユアンに向かつてはにかんだ。男にはにかまれても嬉しくはないが、ユアンは目礼を返し、ヨイクの顔を見下ろした。

「私の婚約者のカームスよ。カームス、こちらがリプトンさん」

「はじめまして、リプトンさん」

カームス青年は片言の英語でそう言うと、イギリス式に右手を差し出した。ユアンはそれを握り返し、失礼だとは思ったがつい彼の頭の上からつま先まで視線を走らせてしまった。半遊牧生活で鍛え上げられた肉体は立派なものだが、おれの方がテントウムシ一匹分だけ背が高い。ユアンは精一杯の微笑を浮かべた。

「はじめまして、カームス君」

カームスは赤ん坊のように無邪気に微笑み、それからヨイクの腰にたくましい手をまわした。ユアンが作り笑顔を崩さなかったのは奇跡だった。

「ヨイク、僕らの結婚式にはリプトンさんにも来てもらおう。リプトンさんには本当にお世話になったんだ」

「結婚式?!」

声を裏返して訊ねたのはユアンではなくヨイクだった。カームスは怪訝な表情でヨイクを見下ろし、彼女の波打つ髪をそっと指に絡めた。

「何を驚く必要があるんだ？僕たちだって、いずれ式を挙げて正式な夫婦になるだろう。その時はリプトンさんもぜひお越しく下さい」

本人に悪気がないことは一目瞭然だったが、ユアンは喧嘩を売られている気がしてならなかった。怒りを鎮めようとする理性に逆らい、ユアンの眉頭がぴくりと動き、知らず知らず唇の端が不自然な形につり上がる。ヨイクがいなければ、この餓鬼と言ってつかみかかる場所だった。

「ごめんなさい、カームス、今、リプトンさんと大事な話をしてたの。私の本の売れ行きが良くて、また再版されるんですって」

ヨイクはさりげなく話題をすり替え、カームスの背に手を触れて彼をそっと押し返す。

「そう、良かったね。でも、頼むから二冊目を書くなんて言わないでくれよ。じゃあ、リプトンさん、また後で。夕食の時にロンドンのお話を聞かせて下さいね」

カームスは雪の中を颯爽と去って行った。ユアンはカームスの若者らしく野性的な立ち居振る舞いに羨望の眼差しを向けつつ、小声でヨイクに囁いた。

「今おれに話したように、あんたが考えていることを彼らに率直に話すんだな。人の良さそうな男だ、一緒に教会から逃げてくれるかもしれないぞ」

そう言うってはみたが、ヨイクの婚約なんて解消されてしまえばいいのにとユアンは腹の底で思っている。そうなることを間違いないと期待している。



「言われなくても説得するわよ。だから、あんたのお得意の交渉術を教えてくれてもいいんじゃない？」

ヨイクはユアンを拝むように見上げた。その仕草がどんなに可愛らしく見えようと、ユアンは協力するつもりなど毛頭ない。なかったはずだった。

「……端的に二択を出して時間を与えてやればいい。たとえば、『私と一緒に教会から逃げてくれるか、それとも私と別れるか。出港までにあなたの答えを聞かせて』」

「それだけ？ あんた、他人事だと思って適当なこと言ってない？ これでも一応、私の人生がかかってるのよ！」

「明日はさぞかし感動的な船出になるだろうな、彼がどちらを選んでも」

「まああ、友達甲斐のない奴！」

ユアンはあさつての方へ鼻を鳴らした。

「あんた、本当にあいつを愛してるのか？」

「はあ？」

「もし、本当にあいつを愛してるなら、必勝の交渉術を教えてやるか？」

「教えてよ」

「夜這いしろ」

ヨイクの右手がユアンの頬に飛んだ。

## 9. 追憶5 ―雪の村― (後書き)

お読みいただきましてありがとうございます！

次回の更新は11月27日(日)です。

◆小説トップページの拍手ボタンのお礼にオマケ小話「ギーヴの宿題『教皇は何語を話す?』」をしこみました。  
ぜひポチっと思います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4345y/>

---

ヒベルニアの極光

2011年11月26日18時47分発行